ラフムに転生したと思ったら、いつの間にかカルデアのサーヴァントとして人理定礎を復元することになった件

クロム・ウェルハーツ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

トラックにはねられたと思ったら、いつの間にかみんなのトラウマのラフムになっていたんだ。

転生だね、わかるとも！

で、更に色々あって、なぜかカルデアに召喚された。

「ｓ６４、３ｕｑｔ@０ｑｄｋ.ｊｒｑ?.ｔ?」

これは、人類悪と愛と欲望の日々である。

目次

0．プロローグ ―― 1
1．バビロニアFirstOrder ―― 3
特異点F　炎上汚染都市　冬木
2．穢れ切った世界 ―― 21
3．GOING ―― 29
4．燃える都市で顕れたる希望 ―― 38
5．出会い頭 ―― 51
6．狙撃手は赤で待つ ―― 57
7．帰還を目指して ―― 64
8．一心不乱 ―― 79
9．光の御子 ―― 92
10．アーサー王 ―― 109
11．強制終了 ―― 124
0から1のインタールード ―― 146

0．プロローグ

深夜、小腹が減ったからコンビニへと向かう。やはり、２４時間営業は便利だ。時計の針が頂点を回る時間にも関わらず食べ物を買うことができるのはいい文明。

目に入ったおにぎりとカップラーメン、そして、リンゴのカード――もちろん、最大額だ――をレジに持っていく。

スマホが鳴った。ＡＰが全回復する５分前にセットしたアラームの音だ。そこまでするか普通……って言いやがった友達は沼に引き摺り込んだ。今では、友達も立派な廃課金兵ですｗｗｗ

コンビニの店員の『毎度ざぁーっす』という声を後ろに、スマホを取り出してセイバーの顔が描かれたアプリを立ち上げる。

そろそろ、ガーチャーのクラスで自分もカルデアに召喚されてもいい頃だと思う。毎月、食費を削って課金しているのだから。

そう言えば、課金は家賃までと決めていたハズなのに、いつの間にか家賃を超えていたことがあった。ジャンヌオルタのピックアップの時だ。ピックアップすり抜けで青セイバーが来るのは悪い文明。

しかし、アプリが中々立ち上がらない。

だけど、こう考える方が建設的だ。アプリの立ち上げが遅いが、そのお陰で立ち上がるまでのワクワク感が毎回得られるのだから、良しとしよう。

嘘。運営、修正はよ。

と、ＦＧＯが立ち上がった。本当にフォウくんには頭が下がる想いだ。ランナーとして実装して欲しいぐらいに。

画面が変わる。タイトル画面をタップするとお知らせ画面に変わった。お知らせ画面を閉じるために右上の×印に軽く触れ、続いて、フレポ情報を読むことなく左端の閉じるという所をタップする。もはや、アンリマユは宝具５となっているからフレポなど必要ない。フレポガチャが回せないなら、課金すればいいじゃない。

やることはいつもと変わらない。

カルデアゲートから曜日クエスト、一番スタミナを消費するクエス

トを選んで、と。
「ＦＧＯは本当におもしろいなぁ……」
だが、それがいけなかったらしい。
プップーという音に嫌な予感がして振り返ると、ヘッドライトの眩しさを感じた。次いで、自分の体に奔る重い衝撃。
トラックにはねられた。
地面を転がりながらも手の中のスマホは離さない。
「引き継ぎ設定をしているから……大丈夫ッ！」
引き継ぎ設定をしていれば、大丈夫。大丈夫なんだから。
『歩きスマホは事故の元よ。キリエライト、あなたも気をつけなさい』という所長の声が耳元でしたような気がした。
そんなことより所長、タイツください。
多分、この時は混乱していたのだろうと思う。普段ならこんなことは言わない。段々、薄れていく意識の中、スマホの画面が青くなっていたことに気が付いた。きっと、誤作動を起こしているのだろう。第一部を全クリしたから、今見ているようなレイシフトをするムービーは流れない。ムービーを流すためには、メニューからマイルームに飛び、マテリアルの特異点での記録、プロローグを最後まで見ないと見れないのに。
けど……眠い。とても眠い。こんなに眠いのは最終章の柱折りで3日ほど徹夜した時以来だ。とてもじゃないけど、眠気に逆らうことなんてで……きな……い。
レイシフトする画面を見ながら、意識が遠ざかっていくのを感じていた。

1．バビロニアＦｉｒｓｔＯｒｄｅｒ

―ＯＦＦ―

目が覚めたらラフムでした。ええー？　ほんとにござるかぁ？

ほ　ん　と　で　す　！

腕を見る。なすび色の鋭く尖った４本の腕。細いけど、力は強い２本の足。口は人とは違って縦についている。その口の先から天に向かってぴょこんと揺れている頭の部分がチャームポイントだね。

ちくしょう……。

ラフムっていう人外になった挙句、今いる所は密林。誰もいないし、薄暗いし、なんか獣の泣き声がするし。うわーん、マタハリママ助けて！　ついでにおっぱい揉ませて！

泣きたくなってくる。ラフム、泣きたい。いや、本当に。

え？　え？　どういうこと？　トラックに轢かれたと思ったら密林にいて、葉っぱについた水滴に映った姿を確認したらラフムってどういうこと？

『楽しい楽しい、ギャハハハハ！』って言えばいい訳？　いや、楽しくないよ。こんな状況のラフムを見て愉しめるのは愉悦部員だけだよ！

ガサリと音がした。

ビクリと体を震わせる。いや、密林、ちょー怖い。ガサリガサリと茂みが揺れるのを見る。自分がこれまでの人生で経験したことがないほどに緊張しているのが分かった。

思わず、喉を鳴らす。いや、ラフムにも喉あるからね。人とはちょっと違う形だけど、人をベースにしているからね。少し違うからって差別は悪い文明。抵抗しないラフム相手に宝具をぶっ放すのはもっと悪い文明。

と、茂みから人が出てきた。やばい、ぶっ殺される。少なくとも、密林の中でバケモノに出会ったらぶっ殺す。ラフムならそうする。

けど、転がるようにしてラフムの前に姿を現したのは緑色の長い髪だった。次いでにいうと血塗れだ。うん、ラフム知ってる。キングゥ

だね、わかるとも！
　ラフムの前に出てきたのは、ＦＧＯ第一部の第七章のキーパーソン、キングゥだった。
「見イ……ツケタ」
　と、キングゥの後ろからラフムと同じ形をしたバケモノが現れた。うっわ、気持ち悪い。人のこと言えないけど気持ち悪い。
　絶望の表情を浮かべるキングゥに群がるラフムたち。ボケっと突っ立てることしかラフムはできない。ご同輩たち、マジ怖。だけど、震えているラフムとは裏腹に、キングゥを取り囲むラフムの内の一体が他のラフムを襲い始めた。
　自身の体に反撃による傷を受けながらも、この場のラフムを全て殲滅したラフムはキングゥに体を向ける。
「え？　お、まえ……助けて、くれたのか？」
「――逃ゲ、ナ、サイ、エルキ、ドゥ。アナタ、モ、長クハ、ナイデショ、ウ、ケド」
　アカン、これ泣いてまうパターンや。
　ラフム泣いちゃう。
　上を見上げて涙を堪えて、ついでに気配も消す。名場面は立ち入っちゃいけないよね、やっぱり。
「……おまえは、なぜ動かない？　ボクを殺しにきたんじゃないのか？」
　空を見上げていると、後ろから声を掛けられた。キングゥだ。
「ｇｙｈ@４４４４４！」
　ハッ……いかんいかん。余りにも感情が昂ってしまって、つい叫んでしまった。今の状況とキングゥをこの目で見れたこと、その両方によって如何ともし難い劣情を催しましてね。つまり、キングゥをペロペロしたいお。いや、待てよ。ラフムの口は人間よりも大きい。つまり、ペロペロできる面積が広がる訳で、それはそれでお得なのではないだろうか？　人の姿じゃないとしても舌の面積が広がることは素晴らしいことじゃないだろうか？
　……試してみるしかない。

取り敢えず、キングゥに近づこうと顔を向けた時、地面に土塊が転がっているのが目に入った。
「ｄｓ@ｌｘｙｙｙｙ！」
ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい！
ラフムがまだ人間でカルデアのマスターで廃人だった時、沖田さんでクイックチェインからのクリティカル連発しまくってしまってごめんなさい。菌糸類、マジ愉悦部。号泣したわ。
「ボクを攻撃する気はない、か。……くっ！」
と、叫んでいる内にキングゥの体調が悪くなったみたいで、キングゥは地面に跪いた。それもそうだ。神に造られた体と言っても無理がある。心臓である聖杯を取るために胸を抉られて無事なハズがない。
キングゥに背中を向ける。
「ｋｚｗ」
キングゥは不思議そうな顔をしている。ここにいれば、いつ追手のラフムが来るか分からない。だから、ここから離れようとキングゥを背中に乗せて行こうと背中を向けたのに、キングゥはポカンとした表情でラフムを見つめるだけだった。
仕方ない。ラフムには知性がある。転生して言葉を奪われたぐらいでラフムの頭の冴えは奪えない。
キングゥの前に右腕――正確に言えば、右の前の腕――を出す。少しビクッとしたキングゥだったけど、ラフムの次の行動でラフムが何をしようとしているのか分かるだろう。
ラフムは腕で地面に絵を描く。これでも、神絵師を目指していたこともある。ツイッターでファボ３つも貰ったこともある。ちなみに、フォロワーは３名、全て自分の複アカだったけどな！
まったく、世の中ときたらラフムの芸術性についていけない奴ばかりだ。
「オマエに乗れ……ということか」
ラフムの芸術的な絵を理解できるとは、流石、キングゥ。何回も首を縦に振る。

前世の親でさえもラフムの芸術を理解できなかったのに、こんな人理の果てで理解者に出会えるとは。
内心、凄い喜んでるけど、それが表に出せないラフムの体は不便だ。しかし、便利なこともある。ボロボロのキングゥを背中に乗せて、歩くことができる。しかも、素早く……ほんと、速いな、ラフムの体。時速１００ｋｍ近く出てるんじゃないだろうか。
恐ろしい性能に慄きつつ、ラフムとキングゥは目的地へと向かうのだった。

―ＡＮＯＴＨＥＲ　ＰＯＩＮＴ―

緑の髪を乱しながら、一つの影が駆ける。男とも、女とも取れそうな顔付き、そして、体付きの人影だ。人影の名はキングゥ。魔術王に仮初の命を与えられた人形（マリオネット）だ。
キングゥは口惜しさに顔を歪ませながら藪を掻き分け、遁走を続ける。キングゥは逃げていた。兄弟とも呼べる存在から逃げていた。
息を荒げて密林の中を進むキングゥの胸には大きな穴が開いている。鋭利なもので抉られたように凹むその胸からは血が流れ出ており、痛々しい姿である。通常の人間ならば失血死していてもおかしくはないほどの出血。だが、キングゥの足はふらついているものの、動かすことはできている。気力で補っているは言えない。ただ、キングゥの体が人類とは隔絶するほどの高スペックであるという単純な話だ。
人類では死を逃れられないほどの傷でも、キングゥにとっては動くことができる程度の傷でしかない。しかしながら、それほどまでに死に難いキングゥにも死は迫っていた。
「追イ詰メロ、捕マエロ！　解体ダ、デク人形ノ　解体ダ！」
キングゥの後から藪を掻き分けて紫色だとも茶色とも取れるような色をした、およそ人ではないモノが現れた。しかも、一体だけではない。藪から次々と姿を現すバケモノの総数は十以上あるだろう。
大の男より一回りほど大きく、そして、醜悪な見た目のバケモノだ。
頭には巨大な人のような口、しかも、縦に開く口がついており、肩

口からは長い棒のような、爪のような、なんとも形容し難い腕が四本、飛び出している。巨大な腕に反して、体や脚は細く上半身を支えることができるのが不思議に思えるモノだった。

不安定。

そのバケモノを一言で表すと、そうなるだろう。そのバケモノ、〝ラフム〟はあまりにも不安定なモノであった。地球上の全ての生命体の進化図から離れ、それ単独で顕れ出たような他とは相容れない彼らが〝他〟である人類によく似たキングゥに襲い掛かるのは当然だと言えた。

「クッ！」

ラフムはキングゥに向かって爪を振るう。遊ぶように振るわれた爪はキングゥの腕を切り裂き、赤い筋をキングゥの腕に残す。地面に転がりながらラフムの爪を避けて藪へと転がり込むキングゥだったが、すぐに立ち上がることはできない。

なぜなら、キングゥの逃げ道を防ぐようにラフムが一体、後ろで待機していたからだ。

「――アハ。見イ……ツケタ」

前にはラフムが十数体、そして、後ろにはラフムが一体。逃げることができる状況ではない。

精も根も尽き果てた。

そう感じる事ができるほどに、茫洋としたキングゥの表情。それを見て、ラフムたちは実に愉しそうに歯をカタカタと鳴らして悦ぶ。弱るキングゥを見るのが愉しくてしょうがない様子のラフムたちを悔しそうに見つめるキングゥだが、どうすることもできない。

――これが、終わりか。なんだ……人間たちみたいに、呆気ない。ボクも大した事はなかったんだ。壊されれば、動けなくなるだけなんだから。……ああ、こんな事なら。最後に、アイツに会いに行けば良かったのにね。

諦め、ラフムの爪を受け入れよう。自分には存在する価値がなかった。不要とされた自分は無意味に機能を止め、バラバラにされるのだろう。

――もう疲れた。
キングゥが項垂れた瞬間、ラフムの一体が動いた。その爪はケタケタと愉しそうに笑っていたラフムへと突き刺さる。一体のラフムが突然、周りのラフムに襲い掛かったのだ。しかし、周りのラフムたちもただ攻撃されるばかりではない。すぐに裏切り者へと反撃を加える。しかしながら、その裏切り者は強かった。
自分以外のラフム――キングゥの後ろで動かない一体は除くが――を全て倒したラフムは反撃されて負った致命傷を気に留めることなく、キングゥへと顔を向ける。
「え？　お、まえ……助けて、くれたのか？」
「――逃ゲ、ナ、サイ、エルキ、ドゥ。アナタ、モ、長クハ、ナイデショ、ウ、ケド」
「！」
キングゥは気づく。自分を助けたラフム、その元になった人物に。
「キミは――昨日、アイツらに連れて来られた……でも、どうして？　どうしてキミが、ボクを助け……」
「シアワ、セニ。ドウカ、シアワセニ、ナリナサイ。親愛ナル、友。エルキ、ドゥ」
機能が停止しかかっている。
そのことに気付いているキングゥだが、自分ではどうすることもできない。助けを求めるように後ろへと振り向く。
だが、後ろに控える無傷のラフムも打てる手はないことを理解しているのか、空を見上げていた。まるで、悲しみから涙を堪える人のようだとキングゥは突飛な考えをしてしまう。自分にも、そして、ラフムにも心などというものはないというのに。
そして、そのラフムの様子からどうあっても、自分を救ってくれたラフムへ手を差し伸べることができないのだと理解してしまったキングゥは、せめて最後の言葉だけは聞こうと救ってくれたラフムへと顔を戻す。
「私タチ、ウルクノ民ハ、アナタへの感謝を、忘レハ、しません。アナタハ、孤高ノ王ニ、人生ヲ、与エマシタ。偉大ナ王ヘノ、道ヲ、示シ

テクレマシタ。アナタノ死ヲ、嘆カナカッタ者ハ、いなカッタ。アナタノ死ヲ、忘レル者ハ、イナカッタ」

所々、持ち直したように言葉を紡ぐラフムだが、その命は確実に一言話す毎に削られて行っていることをキングゥは感じ取っていた。

「私、モ。私モ、トテモ、悲しカッタ。ダカラ、ドウカ、シアワセに、エルキドゥ。美シイ、緑ノ、ヒト。アア――良カッタ。アリガトウ、言エテ、良カッタ。アリガトウ、アリガトウ、アリガ、ト――」

その言葉を最期にキングゥを救ったラフムの機能は完全に停止した。体に入った亀裂が大きくなり、バラバラとラフムの体が大小様々な形に分かれていく。やがて、陶器が割れるような音も完全に止まり、キングゥを残し、密林は静けさを取り戻した。

土塊になったラフムを見つめるキングゥの脳裏にある人類の顔が思い浮かんでは消えていく。ギルガメッシュ王の隣にいた人間。キングゥの記憶にはない光景だ。

「なんだ、これは――キミの事なんて、知らないのに。どうしてキミの名前も、顔も、分かるんだ……ありがとう、なんて――キミに言われる資格は、ボクにはないのに――う、ぐ――うう――うううう……！　ううあぁぁぁぁぁぁぁぁ……!!!」

声の限りにキングゥは叫んだ。叫ばざるを得なかった。

神に創られた人形は、ただ只管に人のように叫ぶ。その行為に意味はないと知っていつつも、心が、体がキングゥにそうさせていた。

ひとしきり叫んだ後、キングゥはゆっくりと後ろに振り返る。

「……おまえは、なぜ動かない？　ボクを殺しにきたんじゃないのか？」

キングゥは後ろに佇んだまま動かないラフムへと声を掛ける。ラフムが動くことを期待していなかったキングゥだったが、彼の予想とは裏腹にラフムは口を大きく開いた。

「ｇｙｈ@４４４４４！」

理解できない言語で突如、叫び出すラフムにキングゥは目を丸くする。じりじりと寄ってくるラフムにキングゥは恐怖を覚えたものの、それは杞憂であった。キングゥへとにじり寄っていたラフムは、突

然、動きを止めたのだ。
「ｄｓ@ｌｘｙｙｙｙ！」
また叫び出すラフムにキングゥは再び目を丸くする。
――なんというか……コイツの行動は読めない。他のラフム以上に読めない。
しかし、少し前に動かなかったことといい、地面に跪き頭を下げている今といい、自分に攻撃を加える気はないのだとキングゥは判断した。
「ボクを攻撃する気はない、か。……くっ！」
胸に奔る痛み。
他のラフムに攻撃され壊れてしまい、土塊に還ったラフムの言うように自分も長くはないだろう。そう、あのウルクの民のように自分ももうすぐ死んでしまう。
――もう……どうでもいい。
キングゥの目から光が消えてしまった。
しかし、キングゥが諦めることを許さないものが傍には居たのである。
ラフムがキングゥに背中を向けた。
「ｋｚｗ」
キングゥは不思議そうに、自分に背を向けてしゃがみ込んだラフムに顔を向ける。このままでは埒が明かないと判断したのか、ラフムは立ち上がり、キングゥへと右腕を突き出した。
キングゥは思わず、体を震わせる。それも仕方のないことだろう。事実、今、キングゥの胸に空いている穴は目の前のラフムとそっくりな格好をしたラフムから傷つけられたもの。
しかし、ラフムが次にとった行動はキングゥの予想とは反するものだった。
地面に右腕の爪を突き立てたラフムは腕を動かしていく。何やら図形のようなものがいくつか組み合わさったものが出来ていく。その図形を見て、キングゥはラフムの言いたいことにピンときた。
「オマエに乗れ……ということか」

ラフムはキングゥの言葉に何度も首を縦に振る。
常人では到底、ラフムが描いた絵を正しく判断することはできないだろう。キングゥがその絵を正しく理解できたことは運命だと言えるのかもしれない。
かくして、ラフムの背に乗ったキングゥは密林から出ていくのであった。

—ＯＦＦ—
「どこに向かっている？」
「０ｔｙｕｅ」
「聞くだけ無駄か。どうせ、もう何もかも終わる」
うん、取り敢えず森の中から出ようと走り出したのが間違いだった。本当に無駄に時間を使ってしまった。ここはどこ？
他の危ないラフムは完全に撒けたみたいだけど、地理が全く分からない場所で走り回るんじゃなかった。そもそも、現代の日本に住んでる人でイラクの地理が分かる人なんてどの程度いるんだろうか？少なくとも、ラフムは分かんなぁい。
そんなこんなでキングゥを背中に乗せたままバビロニアを歩く。いい加減、何か建物が見えてこないかな。
「あっちだ。あっちに行ってくれ」
背中のキングゥが唐突に声を発した。身を乗り出すようにして指を右斜めの方向へと翳している。他に行く当てもないし、キングゥの指示に従って歩いていくと上り坂になった。
背中にいる無言のキングゥと共に登っていくと、日が落ちたらしく暗くなってくる。ハハァ、なるほど。分かったぞ。これはあれだ、いい場面に違いない。ムッツリスケベが考えそうなリヨ鯖に撮影を頼みたい所だ。思い出はもちろん、主人公補正も掛かるしいいこと尽くめ。
そう考えながら歩くと、丘の天辺についた。
上を見上げる。星が綺麗だった。
「ここが……天の丘……馬鹿みたいだ。最期になんで……こんな場所

に、来たんだろう。この体が、鮮明に記憶していた場所。……はじめての友人を得た、誓いの丘……無意味だ。こんなところも、ボク自身も。……何もかもを失った。もう機能を止めてしまえばいい。創造主に見捨てられ、始めから、帰る場所なんて、どこにもなかった、ただの偽物、なんだから」

綺麗な星空には似合わないキングゥの独白。

ラフムは何も言えなかった。生き方がラフムとは全く違う。誰かの偽物だと自分を定義する人間は余りいない。ラフムは前世でそんな人間とは会った事はなかった。だから、ラフムはキングゥに何も言えずに、ただ夜の空を見上げる。

キングゥに声を掛けるべきなのは、ラフムじゃない。

「何をしている。立ち上がらぬか、腑抜け」

「……！」

「まったく。今宵は忙しいにも程がある。ようやく人心地つこうかと思えば、この始末。無様に血を撒き散らし、膝を屈したまでは見逃そう。だが、ここで屍を晒すことは許さぬ」

今のキングゥに声を掛けることができるのは、賢王ギルガメッシュただ一人。

「疾く立ち上がり失せるがいい。そうであれば罪は問わぬ」

「ぁ……あ……」

「どうした。立てぬのか？　それでも神々の最高傑作と言われた者か？　何があったかは知らぬが、胸に大穴なんぞ開けおって。油断にも程があろう」

「な、にを、偉そうに……オマエに、見下される、ボクなもの、か……！」

キングゥが立った！　キングゥが立った！

「く、そ……！　こんな……こんな、ところ、を。オマエに、オマエなんかに、見られる、なんて……！」

「……ふん。そう言えば、こんなものが余っていたな。使う機会を逸してしまった。棄てるのもなんだ。貴様にくれてやろう」

「な……え、ええ!?」

惜しげもなくウルクの大杯をキングゥに与えるギルガメッシュ。中々、聖杯をくれない魔術王も少しは見習って欲しい。じゃんじゃん特異点作ってくれた方が聖杯をバンバン使えるのに。勿体なくてジャンヌオルタとライコーママにしか使ってない。ステイナイト組全員に聖杯を使うことができるぐらい聖杯が欲しい。

「ほう。聖杯を心臓にしていただけはある。ウルクの大杯、それなりに使えるではないか」

「ど、うして……？　なぜ、なんでこんなマネを!?　ボクはオマエの敵だ！　ティアマトに作られたものだ！　オマエのエルキドゥじゃない！　ただ、ただ違う心を入れられた、人形なのに！」

「そうだ。貴様はエルキドゥとは違う者だ。ヤツの体を使っている別人であろう。だが、そうであっても、貴様は我が庇護の……いや、友愛の対象だ」

「……」

「言わねば、分からぬか！　この大馬鹿ものが！　そこのラフム風情でも分かっていることだ！」

うんうん……うん？

「ラフムよ！　この大馬鹿者に説明してやれ！」

「g@・f,」

「人の言葉を話せぬのならば、そう言え！　たわけ！」

酷ッ（，・ω・、）

ラフムに関心をなくしたギルガメッシュは再びキングゥへと向き直る。

「たとえ、違う心、異なる魂があろうと！　貴様の体（それ）は、この地上でただ一つの天の鎖！　……フン。奴は己を兵器だと主張して譲らなかったがな」

ギルガメッシュは気持ち優し気な目付きでキングゥを見る。

「その言葉に倣うのなら、我が貴様を気に掛けるのも当然至極。なにしろ、もっとも信頼した兵器の後継機のようなもの！　贔屓にして何が悪い！」

最後に背を向けながらギルガメッシュは言葉を残す。

「ではな、キングゥ。世界の終わりだ。自らの思うままにするがいい」
「待って……分からない。それは、どういう……」
「母親も生まれも関係なく、本当に、やりたいと思った事だけをやってよい、と言ったのだ。かつての我や、ヤツのようにな。すべてを失ったと言っていたが、笑わせるな。貴様にはまだその自由が残っている。心臓を止めるのは、その後にするがいい」
その言葉を最後に、ギルガメッシュは姿を消した。
「何を……今さら。ボクには、成し遂げるべき目的なんて、なかった。オマエもそうだろう？」
ラフムは首を振る。
「７ｌｑｅｂｓ７；ｆ＠ｅｅ」
「なんだって？」
伝わらなかったので、ラフムはファイティングポーズを取る。その後にしたシャドーボクシングっぽい動きでキングゥは理解したらしい。
「ボクに……戦えというのか？　ティアマト神と戦えと？」
紫の目でキングゥはジッとラフムを見つめる。照れるぜ。
「オマエも母さんから切り離されたのか。だからこそ、ティアマト神と戦う意志を見せることができるのだろう」
しばらく、キングゥは考えた後、ギルガメッシュと同様に丘を降りていく。キングゥについて行こうとした足を踏み出したけど、キングゥに止められた。
「一人で考えたい。これから、ボクはどうしたいのかということを」
フッ……伝わったようだな。
ギルガメッシュに止められなかったら、ラフムも同じことを言っていた。だから、ラフムはキングゥに頷く。
「ありがとう」
最後にそう言い残して、キングゥは飛び去った。空飛べるのってやっぱり便利だな。
キングゥを見送りながら、ラフムは満天の星空を見つめる。
あ、道が分かんない。

どうしようかとうんうんと長い時間悩んでいると、後ろからガチャガチャという奇妙な音がした。
「見ツケタ見ツケタ見ツケタ」
「殺ソウ殺ソウ殺ソウ。バラバラ、ニ、ショウ」
ラフムが振り返ると、１０体近くのラフムが、そこにはいた。キングゥが飛んだのを見て、ラフムがやってきたのだろう。
まあ、あれだ。
……別に、アレを倒してしまっても構わんのだろう？
時間を稼ぐ必要はないけどネ！
となれば、先手必勝！　一番前にいたラフムを爪で突き刺す。けど、ラフムが優位に立てたのは一瞬だけだった。
抉り貫き、抉り貫かれ、体がバラバラになっていく。ラフムに転生してからまだ、２４時間も経ってないのに、死ぬって早すぎ。地面に落ちたラフムの首をめがけて敵のラフムが大きく爪を振りかぶる。
ここまで、か。
もう少し楽しみたかったと思いながら、ラフムの意識は消え去った。

―ＡＮＯＴＨＥＲ　ＰＯＩＮＴ―

自分に敵対するラフムを撒くためか、キングゥを背に乗せているラフムはバビロニア中を縦横無尽に走り回っていた。目的地というものを考えずに、ただ逃走を続けていたのだろうとキングゥは考えた。
目的のないまま走り続ける。今の自分とラフムは運命共同体であるのだろうとキングゥは自嘲する。ラフムの体は自分を参考にして造られた後継機だと考えていたキングゥだったが、それは間違いであったとラフムたちに攻撃された時に思い知った。
しかし、今、この広いバビロニアを二人きりで逃げ続ける状況は、まるでラフムと兄弟のようだと思い……そこで、キングゥの脳裏にあるイメージがチラついた。
美しかった。嬉しかった。とても楽しかった。
それは黄金色だった。

「クッ……！」
キングゥはその自分の記憶ではないイメージを、頭を振って追い出す。この記憶に価値はない。この記憶を価値あるもの言えるのは、この体の元々の持ち主と、その友だけだろう。
そうであるから、キングゥは記憶を頭の片隅に追いやり、これからどうするか自分の旅の相棒であるラフムに尋ねてみるのであった。
「どこに向かっている？」
「０ｔｙｕｅ」
「聞くだけ無駄か。どうせ、もう何もかも終わる」
ラフムが解読できない言葉を発するのは分かっていた。しかし、それでも尋ねざるを得なかった。それは記憶の影響か、自分も随分と無駄な行為をするようになってしまったと大きく息を吐く。
「……」
新人類は無駄な行為はしない。しかし、自分は新人類にはなれなかった孤児のようなもの。ならば、無駄な行為をしてもいいだろう。
「あっちだ。あっちに行ってくれ」
ラフムの背中の上からキングゥはある方向を指で指し示す。なぜ、その方向を示したのかは分からない。だが、その判断は正しいという感覚はあった。そして、ラフムも何も言わずに指示に従うことからキングゥはそれが正しいという確信を得た。
一路、キングゥが示した方向へとラフムの足は向かう。
段々と太陽が地平線の向こうに沈んでいき、程なくして、世界は夜に覆われた。満天の星空の中、キングゥを背に乗せたラフムは丘を登っていく。ラフムの足は速く、丘の頂上まで来るのには、そう時間は掛からなかった。
丘の頂上でキングゥはラフムの背から降り、バビロニアを見渡す。
「ここが……天の丘……馬鹿みたいだ。最期になんで……こんな場所に、来たんだろう。この体が、鮮明に記憶していた場所。……はじめての友人を得た、誓いの丘……無意味だ。こんなところも、ボク自身も。……何もかもを失った。もう機能を止めてしまえばいい。創造主に見捨てられ、始めから、帰る場所なんて、どこにもなかった、た

だの偽物、なんだから」
綺麗な星空には似合わないキングゥの独白。ラフムは何も言わず佇むのみ。
キングゥは思わず座り込む。ここに来れば、何か変わるのではないかという何の根拠もない期待が裏切られた。勝手に期待して、勝手に絶望する。しかし、その絶望感は如何ともし難いものであった。キングゥは目を閉じ、首を地面に向ける。
「何をしている。立ち上がらぬか、腑抜け」
「……！」
「まったく。今宵は忙しいにも程がある。ようやく人心地つこうかと思えば、この始末。無様に血を撒き散らし、膝を屈したまでは見逃そう。だが、ここで屍を晒すことは許さぬ」
前から聞こえてきた声に弾かれるようにキングゥは顔を上げた。
「疾く立ち上がり失せるがいい。そうであれば罪は問わぬ」
「ぁ……あ……」
「どうした。立てぬのか？　それでも神々の最高傑作と言われた者か？　何があったかは知らぬが、胸に大穴なんぞ開けおって。油断にも程があろう」
「な、にを、偉そうに……オマエに、見下される、ボクなもの、か……！」
目の前の男に見下されるのは嫌だ。子ども染みたプライドでキングゥは足に力を籠める。多少ふらついたが、キングゥは再び、その足で立った。
「く、そ……！　こんな……こんな、ところ、を。オマエに、オマエなんかに、見られる、なんて……！」
「……ふん。そう言えば、こんなものが余っていたな。使う機会を逸してしまった。棄てるのもなんだ。貴様にくれてやろう」
目の前の男は黄金の杯をキングゥの胸へと押し付ける。と、杯はキングゥの体の中に取り込まれるようにして消えた。それと同時にキングゥの胸の傷も消え去った。
「な……え、ええ!?」

胸の大穴を一瞬で消し去るほどの宝を持つ者はこのバビロニアに置いて唯一人。英雄王、ギルガメッシュ。彼、唯一人である。
惜しげもなく自身の財宝をキングゥに渡したギルガメッシュは愉快だと言うように笑みを浮かべる。
「ほう。聖杯を心臓にしていただけはある。ウルクの大杯、それなりに使えるではないか」
「ど、うして……？　なぜ、なんでこんなマネを!?　ボクはオマエの敵だ！　ティアマトに作られたものだ！　オマエのエルキドゥじゃない！　ただ、ただ違う心を入れられた、人形なのに！」
「そうだ。貴様はエルキドゥとは違う者だ。ヤツの体を使っている別人であろう。だが、そうであっても、貴様は我が庇護の……いや、友愛の対象だ」
「……」
「言わねば、分からぬか！　この大馬鹿ものが！　そこのラフム風情でも分かっていることだ！　ラフムよ！　この大馬鹿者に説明してやれ！」
「g@・f’」
「人の言葉を話せぬのならば、そう言え！　たわけ！」
ラフムに関心をなくしたギルガメッシュは再びキングゥへと向き直る。
「たとえ、違う心、異なる魂があろうと！　貴様の体（それ）は、この地上でただ一つの天の鎖！　……フン。奴は己を兵器だと主張して譲らなかったがな」
ギルガメッシュは気持ち優し気な目付きでキングゥを見る。
「その言葉に倣うのなら、我が貴様を気に掛けるのも当然至極。なにしろ、もっとも信頼した兵器の後継機のようなもの！　贔屓にして何が悪い！」
キングゥへと背を向けながらギルガメッシュは言葉を残す。
「ではな、キングゥ。世界の終わりだ。自らの思うままにするがいい」
「待って……分からない。それは、どういう……」
「母親も生まれも関係なく、本当に、やりたいと思った事だけをやって

よい、と言ったのだ。かつての我や、ヤツのようにな。すべてを失ったと言っていたが、笑わせるな。貴様にはまだその自由が残っている。心臓を止めるのは、その後にするがいい」
その言葉を最後に、ギルガメッシュは姿を消した。
丘に残されたのはキングゥとラフムだけ。来た時と同じ状況だ。しかし、キングゥの心は違っていた。だが、一歩が踏み出せない。
「何を……今さら。ボクには、成し遂げるべき目的なんて、なかった。オマエもそうだろう？」
キングゥの問いにラフムは首を振る。
「７ｌｑｅｂｓ７；ｆ＠ｅｅ」
「なんだって？」
ラフムの言葉が理解できないにも関わらず、問いかけてしまったキングゥに非はある。しかし、そのことを意に介す様子もなく、ラフムはジェスチャーで以って自身の考えをキングゥへと示した。
ラフムのジェスチャー。それは両腕を構え、交互に前へと突き出すというもの。
「ボクに……戦えというのか？　ティアマト神と戦えと？」
紫の目でキングゥはジッとラフムを見つめる。ラフムもまた、キングゥをどこにあるのか分からない目で見返した。
「オマエも母さんから切り離されたのか。だからこそ、ティアマト神と戦う意志を見せることができるのだろう」
――ボクは何をすれば……何をしたいのか？
キングゥは目を閉じる。
思うのは、ラフムの勝ち目のない戦いに挑む迷いのない決断。
そして、カルデアのマスターの姿。一見、どこにでもいる普通の少年だった。しかし、その心は古今東西の英雄にも引けを取らない。秩序の、善性の、そして、友愛の心を持った少年だった。
キングゥは目を開いた。
心は定まりかけている。しかし、後一歩、踏み出す勇気が必要だ。それを探しに行こうとキングゥは足を踏み出す。
そして、ラフムもキングゥの後を追おうとする。

「一人で考えたい。これから、ボクはどうしたいのかということを」
しかし、キングゥはラフムを止めた。そして、キングゥの気持ちを理解したのだろう。ラフムはキングゥに頷く。
「ありがとう」
最後にそう言い残して、キングゥは飛び去った。最期に向かう最後のピースを見つけに。

―ＯＦＦ―
「これが……オレの……サーヴァント？」
「ええ。多分、先輩のサーヴァントだと思われます」
死んだと思ったら、目の前には二人の人間。白い服を着た少年と盾を持った少女だ。となれば、問わねばなるまい。
「ｓ６４、３ｕｑｔ@０ｑｄｋｊｒｑ？ｔ？」
「マシュ、この人？　がなんて言ってるか分かる？」
「全く分かりません」

特異点F　炎上汚染都市　冬木

2．穢れ切った世界

―ON―

藤丸立香は普通の少年だった。黒髪青目、中肉中背で太っている訳でも痩せている訳でもない。これといった特徴を見つけられない少年だ。彼はどこにでもいそうな少年だった。

学業、運動、そして、性格に至るまで他人の評価は〝普通〟又は〝平凡〟である。しかし、藤丸少年にとって、それは面白くないことだった。誰かにとって、そして、世界にとって、自分は〝特別〟でありたい。

普通である彼は人並みに承認欲求があった。とはいえ、彼は自分から動くことはなかった。一般人らしく高校を卒業して就職し、やがて、結婚して子を成し、そして、妻や子、孫に囲まれて自宅の和室で眠るように息を引き取る。自分はそのような人生を歩んでいくのだと彼は考えていた。

どこまでも普通の少年。

だが、彼が普通の人間と異なっていたのはある適性だ。それこそ、たった一つのケースでしか役に立たないような適性。

それはレイシフトの適性だと言われた。

ハリー茜沢アンダーソンと名乗った白と薄いグリーンの色が入った服を着たどこかの施設の研究員に説明された藤丸は高校を卒業して半年ほど世話になっていた会社を辞めた。

どこからどう考えても胡散臭い人間の話。その上、研究員が話したのは概要だけであり、詳しく聞くことはできなかった。だが、研究員の目があまりにも真剣だったのと、研究員が言ったある言葉が藤丸の琴線に触れた。

――世界を救う――

『絵空事だ』『詐欺だ』『警察に相談しろ』

周りの人間はそう言った。そして、藤丸も周りの人間の言うことは

正しいと理解していた。しかしながら、自分の気持ちを止めることができなかった藤丸は、その日の内に荷物を纏め、日本を発った。普通である彼は普通でないことに憧れがあったのだ。彼は、その普通ではないことに出会う事ができるチャンスを逃したくなかった。

かくして、彼は特別な人と出会う。

薄い紫の髪をした自分と同年代の少女。ほんの少し年下かもしれない。

白く無垢。穢れを知らない肌。美しく艶めく菫色の髪、そして、煌めく髪と同じ菫色の瞳が自分の姿を映している。

それは間違いなく〝運命〟だった。彼が少女と会い、世界を救う機関（カルデア）で行われた破壊工作に巻き込まれ、そして、２００４年の日本の地方都市へと時間旅行をする。それは運命だった。他でもない〝普通の少年（藤丸立香）〟が世界を救うことは運命だったのだ。

＋＋＋

キュウ……キュウ……フォウ……フー、フォーウ……。

「んん……」

――この鳴き声は……？

「先輩。起きてください、先輩。……起きません。ここは正式な敬称で呼びかけるべきでしょうか……マスター。マスター、起きてください。起きないと殺しますよ」

「フォ!?」

微睡の中、物騒な言葉が聞こえた藤丸は慌てて身を起こす。どうやら、自分は地面に横たわっていたようだと気づいた藤丸は、自分の前に居た少女に視線を注いだ。

今、彼女は黒い鎧を着こんでいる。デザインは所々、煽情的ではあるが、これはこれでいいものだと回転数が低い頭脳で結論付ける。

藤丸は一度、瞬きをした。瞬間、脳裏に浮かぶのは赤い液体、血だ。

藤丸はもう一度、瞬きをする。その血は誰の物だったか？

「良かった。目が覚めましたね、先輩。無事で何よりです」

そこで、藤丸の脳は完全に覚醒した。

「マシュ、そっちこそ無事なのか!?」

慌てて目の前の少女、マシュに詰め寄った藤丸は彼女の両肩に手を置く。慌てた様子の藤丸とは裏腹に、マシュは冷静だった。マシュの冷静さに藤丸も落ち着きを取り戻す。

藤丸の脳裏に過った赤色は確かにマシュの血だった。巨大な地球儀があるホールで起こった爆発、そして、崩落に巻き込まれ、瓦礫に下半身が潰されていたマシュの血であった。

マシュは自分の左肩に置かれた藤丸の右手に自分の左手を乗せる。自分は大丈夫だとでも言うように。

「……それについては後ほど説明します。その前に、今は周りをご覧ください」

マシュの指示通りに藤丸は辺りをゆっくりと見渡す。見渡す毎に、驚愕で藤丸の目が大きく開いていった。

――あり得ない。

藤丸の目に映ったのはまたしても赤色。今度は炎だ。そして、熱さを感じさせる赤とは真逆で冷たさを感じさせる〝白〟もあった。そして、その〝白〟は動いている。

「言語による意思の疎通は不可能。敵性生物と判断します」

その〝白〟は人型だった。だが、人ではない。いや、正しくは人であったのだろう。人を人として形作る大元。その〝白〟は〝骨〟だった。

藤丸、そして、マシュの前にいるのは、人体の骨。それが独りでに動いている。俄かには信じる事のできない光景だ。

非現実的な光景を前に、思わず動きを止めてしまった藤丸であったが、マシュは違った。傍に置いていた人を完全に隠せるほど巨大な盾を手に持ち立ち上がった彼女はそれを素早く構える。

「マスター、指示を。わたしと先輩の二人で、この事態を切り抜けます！」

「え？　ああ、うん！」

「行きます！」

――指示って言われたって？

暴風が吹き荒れているかのように入れ替わる状況。今の藤丸の心

情は嵐の大海に浮かぶ笹船の如し。一人ならば、混乱の中、恥も外聞もなく一目散に駆け出していただろう。

だが、今の藤丸は一人ではない。カルデアに着いて初めて会った少女。自分を『先輩』と呼ぶ華奢な少女が前にいる。

逃げ出すことはできない。

それは藤丸の矜持であった。

女の子が戦っているのに、逃げ出すことができるか？　それは嫌だ！

自身の心に従い、藤丸は意識的に目を見開く。少しでも多くの情報を視覚から取り入れようとする無意識の行動だ。

敵は9体。全て動く人骨。手には剣らしきものを携えている。

味方は一人。マシュ。手には大きな盾を持っている。

「マシュ！　強撃（Buster）！」

「了解しました……マイマスター！」

藤丸の指示に、マシュは打てば響くように言葉を返した。それは信頼で繋がれた絆。会って間もない。しかし、時間は彼らの間には関係なかった。直感とも言うべきか、彼らはお互いにお互いを一目見た瞬間から信用できると感じていた。

そうであるから、マシュは躊躇わずに藤丸の指示に従うことができる。そうであるから、藤丸はマシュへ躊躇わずに指示を出せる。

盾で隠れてしまうマシュの視界。彼女の隠れた視界にあるスケルトンの動きを後ろから藤丸がマシュに伝えることで上手くサポートしている。二人の息が合った攻撃で動く人骨、スケルトンは確実にその数を減らしていった。

残りはあと、一体。

「マシュ！　強撃（Buster）！」

「了解しました……マイマスター！」

奇しくも、藤丸とマシュの最後の攻撃は最初に出した攻撃と全く同じものだった。

地面に転がり、動かなくなったスケルトンを確認して藤丸は大きく息を吐き出す。

「戦闘終了。お疲れ様です、先輩」
「ああ、マシュもお疲れ様。それにしても、コイツらは一体……？」
「……わかりません。この時代はおろか、わたしたちの時代にも存在しないものでした。あれが特異点の原因……のようなもの、と言っても差し違えはないような、あるような」
歯切れの悪いマシュの言葉に、藤丸はマシュも状況がよく分からないのだろうなと当たりをつける。できれば、この状況を説明できる、ブレーンのような人物がいれば……。
臍を噛む藤丸の耳に『ツツー』という電子音が届いた。
音の方向へと目を向けると、カルデアに入館した時に貰ったのだろう、右手首に着けたウェアラブル端末から音がしていた。藤丸は慌てて端末を操作する。
「ああ、やっと繋がった！　もしもし、こちらカルデア管制室だ、聞こえるかい!?」
空間に青白く映像が浮かび上がる。昔のＳＦみたいだなと、少し場違いな考えを持ちながら藤丸はその映像に映し出されている男を見ていた。カルデアのスタッフが身に着ける白衣と薄緑色のメディカルウェアを組み合わせたような不可思議な服装の男だ。更に言うと、彼は薄橙色のくしゃくしゃな髪を頭の後ろで一つに纏めている。目は少し垂れ気味で、どことなく惚けた印象を見る人に与える風貌である。
そして、藤丸はその男と特異点Ｆに来る前に出会っていた。カルデアに着いた後、自室へとマシュに案内された藤丸は割り当てられた自室で、映像の向こうにいる男が寛いでいる様子を目撃した。衝撃的な出会いと言えよう。なにせ彼の話を聞くと、カルデアへの到着が一番遅く、
ロマニ・アーキマン。
「こちらＡチームメンバー、マシュ・キリエライトです。現在、特異点Ｆにシフト完了しました。同伴者は藤丸立香一名。心身共に問題ありません。レイシフト適応、マスター適応、ともに良好。藤丸立香を正式な調査員として登録してください」

「……やっぱり藤丸くんもレイシフトに巻きこまれたのか。コフィンなしでよく意味消失に耐えてくれた。それは素直に嬉しい。それと、マシュ……君が無事なのも嬉しいんだけど……」
　と、Ｄｒ．ロマンの目が鋭くなった。
「その格好はどういうコトなんだい!?　ハレンチすぎる！　ボクはそんな子に育てた覚えはないぞ!?」
「……これは、変身したのです。カルデアの制服では先輩を守れなかったので」
「変身……？　変身って、なに言ってるんだマシュ？　頭でも打ったのか？　それともやっぱりさっきので……」
「わたしの状態をチェックしてください。それで状況は理解していただけると思います」
「キミの身体状況を？　お……おお、おおおぉぉおおお!?」
　素早く手元のディスプレイの情報を読み取ったロマニは驚きの声を上げる。
「身体能力、魔力回路、すべてが向上している！　これじゃ人間というより……」
「はい。サーヴァントそのものです」
　映像の向こうからロマニは真剣な表情でマシュを見つめた。
「経緯は覚えていませんが、わたしはサーヴァントと融合した事で一命を取り留めたようです。今回、特異点Ｆの調査・解決のため、カルデアでは事前にサーヴァントが用意されていました。そのサーヴァントも先ほどの爆破でマスターを失い、消滅する運命にあった。ですがその直前、彼はわたしに契約をもちかけてきました」
　マシュは寂しげな表情を浮かべて説明を続ける。
「英霊としての能力と宝具を譲り渡す代わりに、この特異点の原因を排除してほしい、と」
　彼女の説明に思うところがあったのだろう。ロマニは一度、目を閉じる。ゆっくりと目を開きながら、彼はそっと言葉を出した。
「英霊と人間の融合……デミ・サーヴァント。カルデア六つ目の実験だ。そうか。ようやく成功したのか。では、キミの中に英霊の意識が

あるのか？」
「いえ、彼はわたしに戦闘能力を託して消滅しました。最後まで真名を告げずに。ですので、わたしは自分がどの英霊なのか、自分が手にしたこの武器がどのような宝具なのか、現時点ではまるで判りません」
「そうなのか。だがまあ、不幸中の幸いだな。召喚したサーヴァントが協力的とはかぎらないからね。けどマシュがサーヴァントになったのなら話は早い。なにしろ全面的に信頼できる」
　ロマニは一つ頷いた後、マシュから藤丸へと目線を移した。
「藤丸くん。そちらに無事シフトできたのはキミだけのようだ。そしてすまない。何も事情を説明しないままこんな事になってしまった。わからない事だらけだと思うが、どうか安心してほしい。キミには既に強力な武器がある。マシュという、人類最強の兵器がね」
「……最強というのは、どうかと。たぶん言い過ぎです。後で責められるのはわたしです」
「まあまあ。サーヴァントはそういうものなんだって藤丸くんに理解してもらえればいいんだ。ただし藤丸くん、サーヴァントは頼もしい味方であると同時に、弱点もある。それは魔力の供給源となる人間……マスターがいなければ消えてしまう、という点だ。現在データを解析中だが、これによるとマシュはキミの使い魔（サーヴァント）として成立している。つまり、キミがマシュの主（マスター）なんだ。キミが初めて契約した英霊が彼女、という事だね」
「自分がマシュの、マスター……？」
「うん、当惑するのも無理はない。キミにはマスターとサーヴァントの説明さえしていなかったし。いい機会だ、詳しく説明しよう。今回のミッションには二つの新たな試みがあって……」
　ロマニの言葉は最後まで続かなかった。突然のノイズで映像と音声が途切れ途切れになる。
「ドクター、通信が乱れています。通信途絶まで、あと十秒」
「むっ、予備電源に替えたばかりでシバの出力が安定していないのか。仕方ない、説明は後ほど。二人とも、そこから2キロほど移動した先

に霊脈の強いポイントがある」
　乱れる映像の左下の辺りにマップが出て、そのマップに目的地が示される。
「何とかそこまで辿り着いてくれ。そうすればこちらからの通信も安定する。いいかな、くれぐれも無茶な行動は控えるように。こっちもできるかぎり早く電力を……」
『プツン』と軽い音と共に青く映るロマニの映像は瞬時に消えてしまった。
「……消えちゃったね、通信」
「まあ、ドクターのする事ですから。いつもここぞというところで頼りになりません。……先輩、行きましょう」
　マシュが足を踏み出そうとした瞬間、足元から音がした。
「キュ。フー、フォーウ！」
「そうでした。フォウさんもいてくれたんですね。応援、ありがとうございます」
　地面からフォウ、白く小さな犬によく似た動物をマシュは抱き上げる。
「……あ。でも、ドクターには報告し忘れてしまいました」
「キュ。フォウ、キャーウ！」
「ドクターなんて気にするな、だってさ」
　藤丸のフォウの言葉の通訳にマシュはフッと微笑む。
「そうですね。フォウさんの事はまた後で、タイミングを見て報告します。まずはドクターの言っていた座標（ポイント）を目指しましょう。そこまで行けばベースキャンプも作れるはずです」

3．GOING

―OFF―

FGO廃人だった元人間は歩きスマホでトラックにはねられた！

気がつくと、FGO廃人はFGO第七章に出てくるティアマト神の仔、ラフムになっていた！　そう、ラフムは悠●碧の子ども。やべェ、めちゃんこ興奮する。

と、話は逸れてしまったけど、転生したら醜悪な怪物ラフムで、裏切り者として他のラフムに殺されたと思ったら、目の前にはFGOの主人公であるぐだ男とマシュマロサーヴァントのマシュ・キリエライトがいた。

サーヴァントとして召喚されたんだね、わかるとも！

以上が前回までのラフムに転生したと思ったら、いつの間にかカルデアのサーヴァントとして人理定礎を復元することになった件……いや、タイトル長すぎ。とまあ、そんな感じでお送りしたあらすじ。

一言で言えば、サーヴァント・ラフムに転生した。

ラフムはゆっくりと首を回す。

ほうほう。燃える街、それも、現代の建築様式だ。ガラスが沢山使われていたであろう高層ビルに、鉄骨が中から出ている鉄筋コンクリート。根元から折れている高層ビルが燃えている様子を見て、ラフムは理解した。ついでに言うと、ラフムに対してリアクションを起こさなかったぐだ男とマシュを見てラフムは理解した。

ここ、ファスト風土化した冬木じゃね？　特異点Fじゃね？

更に言うと、お腹が見えるエロ鎧を付けているマシュの様子からFGOの物語が始まって間もないことも予測される。マシュは霊基再臨をするごとに鎧がグレードアップしていって、露出が減る、減ってしまう。だが、概念礼装で脱いでくれるから大好き。マシュケベ礼装は良い文明。けど、我が王はマシュと同じように霊基再臨をするごとに着込むくせに、概念礼装で脱いでくれない。カワイイ系統の概念礼装ばかりだ。やはり、王は人の心が分からない。

深い考えから浮上したラフムがぐるりと首を回して、ぐだ男とマ

シュを見つめると、後ろの方から『ヒッ！』という可愛らしい声が聞こえた。声を上げた人物をジッと見つめる。
「所長。このサーヴァント、所長の方を見つめていますが知り合いですか？」
「そんな訳ないでしょう！」
ぐだ男が話しかけるのは、ぐだ男とマシュの後ろに回り込んでいた白髪の女性。聖晶石召喚をガンガン回せる高貴な家の子であるオルガ……オルゴンエネルギー所長だ。ちなみに、フレンド召喚でしか出ないサーヴァントや概念礼装がある。そして、激レア☆０サーヴァントを引くためには多大なフレンドポイントが必要となる。皆も友達とは仲良くね！　勝利スクショを張るんじゃねェぞ、クソ野郎ども！
そんな悲しいガチャの話は置いといて……。
同時にラフムは先ほどの予想が当たっていたと確信した。オルガマリーは炎上汚染都市で別れた人物だし。それにしても、壮絶な最期を遂げた所長に会えるとは思ってもみなかった。これは形見としてタイツを頂くしかない。
ラフムは一瞬で足を何度も動かして彼女の後ろに回り込む。
「１：@」
「え？」
はやく脱いでください。まずはタイツから焦らすように。
そういう意志を籠めて、オルガマリーに鋭く尖った爪を突き付ける。
「待ってくれ！」
ラフムを止める声が聞こえた。冠位持ち（グランド）ガーチャーの声で待てと言われたら待つしかない。
「……仲間だ」
ぐだ男はじっとラフムを見つめてくる。
〝仲間〟か。
そうか、君も所長のタイツが欲しかったんだね、分かるとも！　そうと気づけば、ラフムは譲るしかない。だって、そうだろう？　未来ある若者にタイツを譲るのは世の習い。

ラフムが腕を下すと、ぐだ男はほっと息を吐いた。
「所長、大丈夫ですか？」
「な、なな……」
オルガマリーが狼狽するのも分かる。見知らぬ人間、もとい、見知らぬラフムから、いきなりタイツを要求されたら、そうなるだろう。
「しかし、なぜ、この召喚された方は所長に爪を突き付けたのでしょうか？　所長と顔見知りだったら……所長の様子からそうではなさそうですね」
ウサギのように震えているオルガマリー。カワ（・∀・）イイ！
ウサギ繋がりで、是非、バニー服を着たオルガマリーを概念礼装で実装して貰いたいものである。
震えるオルガマリーを見ながら、ラフムのマスター、ぐだ男は自分の考えを口にする。
「敵だと思ったんじゃないかな」
「つまり、マスターを守るため所長を排除しようとしたのだということでしょうか？」
「ああ。オレはそう思うよ」
なにやら、ラフムの行動は好意的に捉えられているみたいだ。しかし、困ったな。否定しようにも言葉を話すことができない。ラフムの口は人間とは違って縦についている。ついでに言えば、舌は人間と同じ方向、つまり、地面と水平についている。前世の感覚を覚えているラフムは、他の人間について学んだラフム（愉悦部所属）と違って上手く動かせないのは困った所だ。
「シーキュー、シーキュー。もしもーし！　よし、通信が戻ったぞ！」
と、突然、ぐだ男が手首に着けているウェアラブル端末から音がなった。同時に空中に展開される通信画面。セイバー・ウォーズの元ネタみたいだ。そこに映っていたのは、ラフムが心の底から会いたいと思っている人物、ロマニ・アーキマンだった。運営、実装はよ。明日からご飯がお茶漬けになろうが構わない。定期預金を解約する（宝具レベル5にする）覚悟はあるか？　オレはできてる。
そっとジョジョ立ちを決めていると、通信画面の先のロマニの口が

動いた。
「ふたりともご苦労さま、空間固定に成功した。これで通信もできるようになったし、補給物資だって……」
「はあ!?　なんで貴方が仕切っているのロマニ!?　レフは？　レフはどこ？　レフを出しなさい！」
「うひゃあぁあ!?」
　ずずいと進み出るオルガマリー。ラフムを見て、ぐだ男とマシュの後ろに隠れた人物と同一人物とは思えない。
「しょ、所長、生きていらしていたんですか!?　あの爆発の中で!?　しかも無傷!?どんだけ!?」
「どういう意味ですかっ！　いいからレフはどこ!?　医療セクションのトップがなぜその席にいるの!?」
「……なぜ、と言われるとボクも困る。自分でもこんな役目は向いていないと自覚してるし。でも他に人材がいないんですよ、オルガマリー。現在、生き残ったカルデアの正規スタッフはボクを入れて二十人に満たない」
　オルガマリーの目が大きく見開かれる。
　うん？　なんでオルガマリーの後ろにいたラフムがオルガマリーの表情を分かるかって？　決まっているでしょ。横からそーっとオルガマリーの左側に腰を曲げた状態で身を乗り出しているからだ。
　そんなラフムに気付くことなく、オルガマリーは通信先の人物と話を続ける。
「ボクが作戦指揮を任されているのは、ボクより上の階級の生存者がいないためです。レフ教授は管制室でレイシフトの指揮をとっていた。あの爆発の中心にいた以上、生存は絶望的だ」
「そんな――レフ、が……？」
　一瞬、呆けたオルガマリーだったが、悲しみを抑えて、疑問を口にする。
「いえ、それより待って、待ちなさい。生き残ったのが２０人に満たない？　じゃあマスター適性者は？　コフィンはどうなったの!?」
「……４７人、全員が危篤状態です。医療器具も足りません。何名か

は助ける事ができても、全員は――――」
「ふざけないで、すぐに凍結保存に移行しなさい！　蘇生方法は後回し、死なせないのが最優先よ！」
「ああ！　そうか、コフィンにはその機能がありました！　至急手配します！」
　ドタバタとする通信先を見ながら、マシュが呟く。
「……驚きました。凍結保存を本人の許諾なく行う事は犯罪行為です。なのに即座に英断するとは。所長として責任を負う事より、人命を優先したのですね」
「バカ言わないで！　死んでさえいなければ後でいくらでも弁明できるからに決まってるでしょう!?　だいたい４７人分の命なんて、わたしに背負えるハズがないじゃない……！　死なないでよ、たのむから……！　……ああもう、こんな時レフがいてくれたら……！」
　自分の腕で自分を抱き締めるオルガマリー。ラフムがこの逞しい４本の腕で抱き締めようと考えたけど、それじゃあ、話が進まなくなること請け合いなので、動かず黙って通信先の話を聞く。
「……報告は以上です。現在、カルデアはその機能の八割を失っています。残されたスタッフではできる事にかぎりがあります。なので、こちらの判断で人材はレイシフトの修理、カルデアス、シバの現状維持に割いています。外部との通信が回復次第、補給を要請してカルデア全体の立て直し……というところですね」
「結構よ。わたしがそちらにいても同じ方針をとったでしょう。……はあ。ロマニ・アーキマン。納得はいかないけど、わたしが戻るまでカルデアを任せます。レイシフトの修理を最優先で行いなさい。わたしたちはこちらでこの街……特異点Ｆの調査を続けます」
「うぇ!?　所長、そんな爆心地みたいな現場、怖くないんですか!?　チキンのクセに!?」
「……ほんっとう、一言多いわね貴方は」
　ラフムに怯えて部下の後ろに隠れるほどのオルガマリーだ。この炎上都市で行動するということはどれだけの恐怖を彼女に与えるのだろうか。愉悦部員ならば、きっと片手にワインを用意するに違いな

い状況だ。
「今すぐ戻りたいのは山々だけど、レイシフトの修理が終わるまでは時間がかかるんでしょ？　この街にいるのは低級な怪物だけだと分かったし、デミ・サーヴァント化したマシュがいれば安全よ。事故というトラブルはどうあれ、与えられた状況で最善を尽くすのがアニムスフィアの誇りです。これより藤丸立香、マシュ・キリエライト両名を探索員として特異点Ｆの調査を開始します」
「ＬＡＨＭＵ、ｆ？」
「ひひゃあ！」
　存在を無視されたので、オルガマリーの耳元で『ラフム、は？』と囁くと、とても可愛らしい声を上げてオルガマリーはぐだ男とマシュに抱き着いた。
「な、なな……」
「所長、こいつのことを忘れちゃダメですよ。オレとマシュと、それから、こいつで所長を守ります」
　ぐだ男はそう言いながら、足がガクガクしているオルガマリーを支える。
「ちょっと待って！　なんだい、そいつは？　さっきから所長の横にチラチラ映っていたけど、変な形のオブジェじゃなかったのかい？」
「えっと、オレのサーヴァントらしいです」
「サーヴァント!?　サーヴァントだって!?　……ホントだ。サーヴァント反応があった」
「……モニターを見ていなかったんですね、Ｄｒ．」
　肩を落としたマシュだったが、すぐに真剣な顔になって通信画面の向こうにいるロマニに向かって話を始める。
「この方はマスターが召喚したサーヴァントです」
「いやいやいや、そんなバケモノが……いや、待てよ。もしかしたら、スキル〝無辜の怪物〟で姿を――」
「召喚した時に一緒に出てきたマテリアルには、そんなスキルは書いてないですね」
「じゃあ、何なんだ！　バケモノだとでもいうのかい!?　というか真

名は？」
「あー。そう言えば、聞いてなかった。えっと、ごめんね」
　ラフムは気にするなというように肩を竦める。
『マテリアルを読み上げれば早いんじゃないかな？』とか言っている礼儀知らずのロマニは後で覚えていやがれ。貴様が隠しているお菓子を勝手に食ってやるからな。
「オレの名前は藤丸立香。君の名前を教えてくれ」
「ＬＡァ……」
「ラァ？」
「Ｈゥ……」
「フゥ？」
「ＭＵゥウウウウ！」
「ラフム！　あなた、ラフムっていうのね！」
「ｇ@ｆｆｆｆｆ！」
　ぐだ男と手を取り合って回ってみる。こやつ、思ったよりもノリがいい……いや、思った通りか。『ネロ……いいよね』って叔父上に言えるほどだもんな。
「ラフムというそうです！」
「凄いな、君は！」
　と、ロマニの言葉を遮り、オルガマリーが疑問を口にする。
「待ちなさい。こいつ、危険じゃないの？」
「あー、多分、大丈夫です」
「でも、わたしに爪を向けたのよ！」
「マスターである藤丸くんのことを認識して、その繋がりから同じマスターを持っているマシュも仲間だとラフムは判断したのでしょう。ですが、所長には藤丸くんとの直接的な繋がりがなかった。だから、敵だと判断したんでしょうね」
「それなら、わたしに攻撃してくるかもしれないってこと？」
「マスターの指示には従ってくれると思います。なにせ、カルデアの召喚システムは人理を救うことに賛同している英霊でないと呼べないようになっていますから。ですので、サーヴァントの責任者である

マスター、つまり、藤丸くんが所長に攻撃しないように言えば、聞いてくれるんじゃないかと」
「わかりました。ラフム、この人は味方だから攻撃しないように」
「ｑｅｚ……」
「分かってくれたみたいです」
「ちょっと待ちなさい！　そいつ、今、『分かった』という意味の言葉を発していないに違いありません！　そうでしょ、マシュ！」
「ラフムさんの言葉は分かりません」
「そうですけど！　でも、女性なら分かるでしょう！　こいつ、絶対に『タイツ……』って言っていたに違いありません、間違いなく！」
「そんなバカな……英霊が所長のタイツを狙ったっていうんですか？」
「だって……だって！　そんな感じがしました！」
　どうやら、オルガマリーは混乱の極みにいるらしい。この世界が存亡の危機にあるのに、そんな欲望を前面に押し出した言葉を発するような人間がいる訳ないでしょう。まあ、ラフムは人間じゃないんですけどねｗｗｗ
　それにしても、ラフムの言葉を理解できていないのに、気が付くとは流石はカルデアの所長。肩書は伊達じゃない。
「そんなことよりも、これからの方針について話しましょう」
「そんなことッ!?」
　ロマニの言葉に『やっぱり、わたしの味方はレフだけ……』と呟くオルガマリーだったが、気を取り直してロマニに指示を下す。
「現場のスタッフが未熟なのでミッションは、この異常事態の原因、その発見にとどめます。解析・排除はカルデア復興後、第二陣を送りこんでからの話になります。キミもそれでいいわね？」
「発見だけでいいんですか？」
「ええ。それ以上はあまりにも危険です」
　チラとオルガマリーはロマニへと目を向ける。オルガマリーを見つめたロマニは一つ頷いた。
「了解です。健闘を祈ります、所長。これからは短時間ですが通信も

可能ですよ。緊急事態になったら遠慮なく連絡を」
「……ふん。ＳＯＳを送ったところで、誰も助けてくれないクセ……顔を近づけるのは止めなさい！　あなたが守ってくれるの？　そう、なら、まずは、わたしから離れなさい！」
　拒絶は寂しい。寂しいとラフム死んじゃうの（ｉ・ω・ｉ）
「所長？」
「なんでもありません通信を切ります。そちらはそちらの仕事をこなしなさい」
「……所長、よろしいのですか？　ここで救助を待つ、という案もありますが」
「そういう訳にはいかないのよ。……カルデアに戻った後、次のチーム選抜にどれほどの時間がかかるか。人材集めも資金繰りも一ヶ月じゃきかないわ。その間、協会からどれほど抗議があると思っているの？」
　オルガマリーは億劫そうに長い髪をかき上げる。
「最悪、今回の不始末の責任としてカルデアは連中に取り上げられるでしょう。そんな事になったら破滅よ。手ぶらでは帰れない。わたしには連中を黙らせる成果がどうしても必要なの」
　オルガマリーはラフムたち三人を見つめる。
「……悪いけど付き合ってもらうわよ、マシュ、藤丸。そうね、あなたにも働いてもらいます、ラフム。とにかくこの街を探索しましょう。この狂った歴史の原因がどこかにあるはずなんだから」
『さっさと貯金全部パーッと使い切った方がいいですよ。このステージが終わる前に』と言いたいラフムだったが、残念ながら言葉は話せなかった。

4．燃える都市で顕れたる希望

―ＯＮ―

「先輩。もうじきドクターに指定されたポイントに到着します」

一路、ロマニに示された場所へと向かう藤丸とマシュの二人。歩きながら、マシュは周りを確認しながら呟く。

「しかし……見渡すかぎりの炎ですね。資料にあるフユキとはまったく違います。資料では平均的な地方都市であり、２００４年にこんな災害が起きた事はない筈ですが……」

「オレも聞いたことがないよ。もしも、こんな大災害があれば、ニュースになっているしね」

「ええ。その上、大気中の魔力濃度（マナ）も異常です。これではまるで古代の地球のような……ッ!?」

突如、二人の耳に絹を裂くような声が届いた。女性の声だ。

「今の悲鳴は!?」

「どう聞いても女性の悲鳴です。急ぎましょう、先輩！」

声は近い。声がした方向へと全速力で藤丸は走る。

「何なの、何なのよコイツら!?　なんだってわたしばっかりこんな目に遭わなくちゃいけないの!?」

建物の影から藤丸とマシュは飛び出す。そこには、スケルトンたちに囲まれた長い白髪の若い女性がいた。

「もうイヤ、来て、助けてよレフ！　いつだって貴方だけが助けてくれたじゃない！」

「オルガマリー所長……!?」

マシュの呟き通り、そこにいたのはオルガマリーだった。混乱に包まれたまま、彼女は叫ぶ。

「あ、貴方たち!?　ああもう、いったい何がどうなっているのよーっ！」

「マシュ、行けるか？」

「勿論です」

先ほどと同じように藤丸がマシュへと指示を出し、スケルトンたち

を倒していく。慣れたのか、戦闘にかかる時間は先ほどと比べ短かった。全てのスケルトンの活動が停止したことを確認したマシュはしゃがむオルガマリーへと話しかける。
「戦闘、終了しました。お怪我はありませんか、所長」
「……どういう事？」
「所長？　……ああ、わたしの状況ですね。信じがたい事だとは思いますが、実は……」
「サーヴァントとの融合、デミ・サーヴァントでしょ。そんなの見ればわかるわよ」
　ピシャリとオルガマリーは突き放すように言い放つ。
「わたしが訊きたいのは、どうして今になって成功したかって話よ！　いえ、それ以上に貴方！　貴方よ、わたしの演説に遅刻した一般人！　なんでマスターになっているの!?　サーヴァントと契約できるのは一流の魔術師だけ！　アンタなんかがマスターになれるハズないじゃない！　その子にどんな乱暴を働いて言いなりにしたの!?」
「えっと……」
「それは誤解です所長。強引に契約を結んだのは、むしろわたしの方です」
「なんですって？」
　藤丸に詰め寄るオルガマリー。それを止めようと藤丸とオルガマリーの間に体を滑り込ませながらマシュは口を開く。
「経緯を説明します。その方がお互いの状況把握にも繋がるでしょう」
　そうして、マシュは藤丸と共に特異点Ｆへとレイシフトした経緯を説明していく。
「……以上です。わたしたちはレイシフトに巻きこまれ、ここ冬木に転移してしまいました。他に転移したマスター適性者はいません。所長がこちらで合流できた唯一の人間です。でも、希望ができました。所長がいらっしゃるのなら、他に転移が成功している適性者も……」
「いないわよ。それはここまでで確認しているわ。……認めたくない

けど、どうしてわたしとそいつが冬木にシフトしたのかわかったわ」
「生き残った理由に説明がつくのですか？」
「消去法……いえ、共通項ね。わたしもあなたもそいつも、〝コフィンに入っていなかった〟。生身のままのレイシフトは成功率は激減するけど、ゼロにはならない。一方、コフィンにはブレーカーがあるの。シフトの成功率が９５％を下回ると電源が落ちるのよ。だから彼等はレイシフトそのものを行っていない。ここにいるのはわたしたちだけよ」
「なるほど……さすがです所長」
「落ち着けば頼りになる人なんですね」
「それどういう意味!?　普段は落ち着いていないって言いたいワケ!?」
「あ、そういう訳じゃ……。えっと、そう言えば、所長はレイシフトの予定はなかったんですか？」
　強引に話を変えようとする藤丸だったが、それは悪手だった。オルガマリーの眉は更に吊り上がる。
「悪い？　司令官が最前線に出るワケないじゃない。貴方たちはわたしの道具だって言ったでしょ。……フン、まあいいでしょう。状況は理解しました。緊急事態という事で、あなたとキリエライトの契約を認めます。ここからはわたしの指示に従ってもらいます」
　少し考えの時間を取ったオルガマリーは自分の考えを口に出す。
「……まずはベースキャンプの作成ね。いい？　こういう時は霊脈のターミナル、魔力が収束する場所を探すのよ。そこならカルデアと連絡が取れるから。それで、この街の場合は……」
「このポイントです、所長。レイポイントは所長の足下だと報告します」
「うぇ!?　あ……そ、そうね、そうみたい。わかってる、わかってたわよ、そんなコトは！　マシュ。貴方の盾を地面に置きなさい。宝具を触媒にして召喚サークルを設置するから」
「……だ、そうです。構いませんか、先輩？」
「いいよ、やってくれ」

「了解しました。それでは始めます」
マシュが盾を地面に置くと、青白い煙（エーテル）の奔流が沸き上がった。吹き荒れる風とエーテルの中、オルガマリーはどこからともなく取り出した星型八面体（ダ・ヴィンチの星）の形をした虹色の結晶を藤丸に渡す。
「これは……」
「それを盾の上に置きなさい。それで召喚が完了します」
藤丸はオルガマリーの指示通り、虹色の結晶を盾の上に置く。と、盾の上に召喚陣が現れ出た。
「これは……カルデアにあった召喚実験場と同じ……」
召喚陣が光り輝き、荒れ狂う風がマシュの言葉を飲み込む。一際大きく召喚陣が光ったかと思うと、その中に影が差した。
光が段々と収まっていく毎に影の姿が顕になっていく。
「これが……オレの……サーヴァント？」
「ええ。多分、先輩のサーヴァントだと思われます」
と、召喚されたモノが口を開く。
「ｓ６４、３ｕｑｔ@０ｑｄｋｊｒｑ？ｔ？」
「マシュ、この人？　がなんて言ってるか分かる？」
「全く分かりません」
そこにいたのは、およそ人ではない生物。腕は四本、二足歩行をしているが、とてもそれが可能とは思えないほどに足は細い。人でいう頭がある箇所には口がある。しかし、それは巨大だ。大体、人の顔を三つ縦に並べたほどの大きさ。そして、その口は縦についていた。
正しく異形の生物がそこにいた。人に生理的な嫌悪感を覚えさせるフォルムだ。
事実、オルガマリーは怯えたように藤丸とマシュの後ろに隠れるようにして気配を隠している。
召喚された時から辺りを見渡していたモノは突如、ぐるりと首を回し、オルガマリーへと視線を注いだ。その異形のサーヴァントの様子に合点がいったというように藤丸は手を打ち鳴らす。
「所長。このサーヴァント、所長の方を見つめていますが知り合いですか？」

「そんな訳ないでしょう！」
しかしながら、彼は人生経験が少ない。その少ない人生経験から導き出した答えは的外れなものだった。
藤丸へと怒鳴り、ラフムから目を離した一瞬。タンッと軽い音が自分の後ろからしたと認識したオルガマリーは次いで、自分の背中に硬いものが押し当てられていることを感じる。
「1：@」
「え？」
ぞくりと悪寒が背筋から首筋へと駆け上がった。それは根源的な〝死〟への恐怖。死神が鎌を自分の首筋に当てていることを幻視したオルガマリーは歯をカタカタと鳴らす。
彼女の背に当てられたのは槍とも取れるような鋭い爪。異形のサーヴァントがオルガマリーの背へと回り込み、その爪を彼女の背に押し当てていた。
「待ってくれ！」
振り返り、異形のサーヴァントがオルガマリーの背に爪を当てていることに気付いた藤丸は思わず声を出していた。異形のサーヴァントは震えているオルガマリーから、声を出した藤丸へと視線を向ける。その視線はどこか品定めをするような視線だ。
――たった一言。
一言で自分、ひいてはオルガマリーの命運が分かれると藤丸は感じていた。そもそも、なぜ、このサーヴァントはオルガマリーに対して敵対行動を示したのか？　それは多分、オルガマリーがマスターである自分に怒鳴ったため、オルガマリーを敵対視したのだろうと藤丸は思い至った。
では、この異形のサーヴァントにオルガマリーは自分たちに敵対するような人間ではないと説明することで敵対行動を止めるのではないか？
「……仲間だ」
振り絞るようにして出てきた言葉は一単語。だが、その単語だけで目の前のサーヴァントは理解したらしい。一度、頷いた後、サーヴァ

ントは爪を下げる。そこで、藤丸は自分が息をしていないことに気が付いた。緊張感からか知らず知らずの内に息を止めていたのだろう。藤丸は大きく息を吐き出した。
　緊張感から解放されたのは藤丸だけではない。異形のサーヴァントのプレッシャーがなくなったのだろう。動きを取り戻したオルガマリーは後ろに立つサーヴァントから離れようとフラフラとした足取りで歩みを進める。今にも転んでしまいそうだ。
　オルガマリーが怪我をしないように藤丸、そして、マシュはオルガマリーの両腕を掴み、彼女の体を支える。
「所長、大丈夫ですか？」
「な、なな……」
「しかし、なぜ、この召喚された方は所長に爪を突き付けたのでしょうか？　所長と顔見知りだったら……所長の様子からそうではなさそうですね」
　異形のサーヴァントがオルガマリーに爪を突き付けたことにマシュは疑問を持っているようだ。答えを得た藤丸はその答えをマシュに説明する。
「敵だと思ったんじゃないかな」
「つまり、マスターを守るため所長を排除しようとしたのだということでしょうか？」
「ああ。オレはそう思うよ」
　と、藤丸のウェアラブル端末から電子音が響いた。
「シーキュー、シーキュー。もしもーし！　よし、通信が戻ったぞ！」
　次いで、端末から出てくるのは音声、そして、空中に描かれる青白い映像だ。その映像にはオペレーターであるロマニの姿が映っていた。
「ふたりともご苦労さま、空間固定に成功した。これで通信もできるようになったし、補給物資だって……」
「はあ!?　なんで貴方が仕切っているのロマニ!?　レフは？　レフはどこ？　レフを出しなさい！」
「うひゃあぁあ!?」

ロマニの姿を見て、気を取り直したのだろう。オルガマリーは強い口調である者の名を呼ぶ。本来ならば、自分に代わってカルデアで指揮を取るべき者の名を。

しかし、ロマニの答えはオルガマリーが期待したもの、彼女が心から信頼しているレフ・ライノールの居場所を示すものではなかった。

「しょ、所長、生きていらしていたんですか!? あの爆発の中で!? しかも無傷!? どんだけ!?」

「どういう意味ですかっ! いいからレフはどこ!? 医療セクションのトップがなぜその席にいるの!?」

「……なぜ、と言われるとボクも困る。自分でもこんな役目は向いていないと自覚してるし。でも他に人材がいないんですよ、オルガマリー。現在、生き残ったカルデアの正規スタッフはボクを入れて二十人に満たない」

――二十人？

聞き間違いではないかとオルガマリーは目を大きく開いて映像の向こうのロマニを見つめる。

「ボクが作戦指揮を任されているのは、ボクより上の階級の生存者がいないためです。レフ教授は管制室でレイシフトの指揮をとっていた。あの爆発の中心にいた以上、生存は絶望的だ」

「そんな――――レフ、が……？」

だが、ロマニから受け取った情報は聞き間違いなどではなく、更に大きな衝撃をオルガマリーへと与えるものだった。

――レフが……死んだ？

混乱の渦中にいるオルガマリーではあるが、彼女の頭脳は回転を止めない。彼女の脳が弾き出したのはカルデアの使命に従事するための彼女の駒の安否だ。

「いえ、それより待って、待ちなさい。生き残ったのが２０人に満たない？ じゃあマスター適性者は？ コフィンはどうなったの!?」

「……４７人、全員が危篤状態です。医療器具も足りません。何名かは助ける事ができても、全員は――――」

「ふざけないで、すぐに凍結保存に移行しなさい！ 蘇生方法は後回

し、死なせないのが最優先よ！」
「ああ！　そうか、コフィンにはその機能がありました！　至急手配します！」
　映像の向こうが慌ただしくなる。ロマニがスタッフに向かって指示を矢継ぎ早に飛ばす様子を見て、オルガマリーは唇を噛み締める。
　オルガマリーの様子を横で見ていたマシュはポツリと呟いた。
「……驚きました。凍結保存を本人の許諾なく行う事は犯罪行為です。なのに即座に英断するとは。所長として責任を負う事より、人命を優先したのですね」
「バカ言わないで！　死んでさえいなければ後でいくらでも弁明できるからに決まってるでしょう!?　だいたい４７人分の命なんて、わたしに背負えるハズがないじゃない……！　死なないでよ、たのむから……！　……ああもう、こんな時レフがいてくれたら……！」
　体が震えている。
　そのことに気が付いたオルガマリーは自分の腕で自分を抱きしめる。が、どうにも体の震えは止まらない。
　失っていくという恐怖に気丈に立ち向かうオルガマリーは悔しそうに通信先のカルデアを睨みつけた。しかし、自分が出来る事は何もない。ただ、報告を待つだけ。
　数十秒というところか。短くも長く感じる時間だ。オルガマリーの心情では〝やっと〟現れたロマニの報告を受け取っていく。
「……報告は以上です。現在、カルデアはその機能の八割を失っています。残されたスタッフではできる事にかぎりがあります。なので、こちらの判断で人材はレイシフトの修理、カルデアス、シバの現状維持に割いています。外部との通信が回復次第、補給を要請してカルデア全体の立て直し……というところですね」
　現在のカルデアについての情報をロマニから聞き出したオルガマリーはロマニに頷く。
「結構よ。わたしがそちらにいても同じ方針をとったでしょう。……はあ。ロマニ・アーキマン。納得はいかないけど、わたしが戻るまでカルデアを任せます。レイシフトの修理を最優先で行いなさい。わ

たしたちはこちらでこの街……特異点Ｆの調査を続けます」
「うぇ⁉　所長、そんな爆心地みたいな現場、怖くないんですか⁉　チキンのクセに⁉」
「……ほんっとう、一言多いわね貴方は」
　憎々し気に言うオルガマリーだが、幾分、声のトーンはいつもの調子に戻っていた。医療に携わるロマニのメンタルケアの技のお陰だろう。
「今すぐ戻りたいのは山々だけど、レイシフトの修理が終わるまでは時間がかかるんでしょ？　この街にいるのは低級な怪物だけだと分かったし、デミ・サーヴァント化したマシュがいれば安全よ。事故というトラブルはどうあれ、与えられた状況で最善を尽くすのがアニムスフィアの誇りです。これより藤丸立香、マシュ・キリエライト両名を探索員として特異点Ｆの調査を開始します」
「ＬＡＨＭＵ、ｆ？」
「ひひゃあ！」
　男とも女とも、人とも機械とも取れるような声だ。その声はオルガマリーのすぐ近く、耳元で囁かれた声だった。ゾクゾクと震えが奔る。今度は恐怖ではなく、生理的嫌悪感からだ。しかし、その感情がオルガマリーに齎した影響は先ほどのように体の動きを弛緩させるもの。
「な、なな……」
「所長、こいつのことを忘れちゃダメですよ。オレとマシュと、それから、こいつで所長を守ります」
　咄嗟に近くにいた藤丸とマシュに抱き着くオルガマリー。そんな自分を見て、異形のサーヴァントが笑っているようにオルガマリーには見えた。
　と、ロマニが声を上げる。
「ちょっと待って！　なんだい、そいつは？　さっきから所長の横にチラチラ映っていたけど、変な形のオブジェじゃなかったのかい？」
「えっと、オレのサーヴァントらしいです」
「サーヴァント⁉　サーヴァントだって⁉　……ホントだ。サーヴァ

ント反応があった」
「……モニターを見ていなかったんですね、Ｄｒ．」
溜息を一度吐いたマシュはロマニに説明をする。
「この方はマスターが召喚したサーヴァントです」
「いやいやいや、そんなバケモノが……いや、待てよ。もしかしたら、スキル〝無辜の怪物〟で姿を――」
「召喚した時に一緒に出てきたマテリアルには、そんなスキルは書いてないですね」
「じゃあ、何なんだ！　バケモノだとでもいうのかい!?　というか真名は？」
「あー。そう言えば、聞いてなかった。えっと、ごめんね」
手首の端末に登録されているマテリアルを確認していた藤丸は顔を上げて、異形のサーヴァントへと向き直る。
「オレの名前は藤丸立香。君の名前を教えてくれ」
「ＬＡァ……」
「ラァ？」
一言一言、噛み締めるように異形のサーヴァントは言葉を口にする。
「Ｈゥ……」
「フゥ？」
「ＭＵゥウウウウ！」
「ラフム！　あなた、ラフムっていうのね！」
「ｇ@ｆｆｆｆｆ！」
通じ合った心。
そう判断した藤丸は何の迷いもなく〝ラフム〟と名乗ったサーヴァントの腕を取り、くるくると踊るように回る。
ややあって、同時に動きを止めた藤丸とラフムは映像に向き直った。
「ラフムというそうです！」
「凄いな、君は！」
ロマニの叫びは虚しく炎上都市に響いた。

心と心が通じ合った。そんな様子の藤丸とラフムを見て嬉しそうにするマシュとは対照的にオルガマリーの表情は固い。
「待ちなさい。こいつ、危険じゃないの？」
「あー、多分、大丈夫です」
「でも、わたしに爪を向けたのよ！」
「マスターである藤丸くんのことを認識して、その繋がりから同じマスターを持っているマシュも仲間だとラフムは判断したのでしょう。ですが、所長には藤丸くんとの直接的な繋がりがなかった。だから、敵だと判断したんでしょうね」
「それなら、わたしに攻撃してくるかもしれないってこと？」
「マスターの指示には従ってくれると思います。なにせ、カルデアの召喚システムは人理を救うことに賛同している英霊でないと呼べないようになっていますから。ですので、サーヴァントの責任者であるマスター、つまり、藤丸くんが所長に攻撃しないように言えば、聞いてくれるんじゃないかと」
「わかりました。ラフム、この人は味方だから攻撃しないように」
「ｑｅｚ……」
「分かってくれたみたいです」
「ちょっと待ちなさい！　そいつ、今、『分かった』という意味の言葉を発していないに違いありません！　そうでしょ、マシュ！」
「ラフムさんの言葉は分かりません」
「そうですけど！　でも、女性なら分かるでしょう！　こいつ、絶対に『タイツ……』って言っていたに違いありません、間違いなく！」
「そんなバカな……英霊が所長のタイツを狙ったっていうんですか？」
「だって……だって！　そんな感じがしました！」
　あり得ないことだとロマニは肩を竦める。
「そんなことよりも、これからの方針について話しましょう」
「そんなことッ!?」
　ロマニの言葉に『やっぱり、わたしの味方はレフだけ……』と呟くオルガマリーだったが、気を取り直してロマニに指示を下す。

「現場のスタッフが未熟なのでミッションは、この異常事態の原因、その発見にとどめます。解析・排除はカルデア復興後、第二陣を送りこんでからの話になります。キミもそれでいいわね？」
「発見だけでいいんですか？」
「ええ。それ以上はあまりにも危険です」
チラとオルガマリーはロマニへと目を向ける。
そもそも、特異点というのは何が起こるか全く予想できない状況だ。更に、本拠地であるカルデアは壊滅的な打撃を受けた直後。出来るだけ早く特異点の修復を終わらせ、カルデアの復旧に取り掛からなくてはならない。
オルガマリーの視線から彼女の言いたいことを察したロマニは映像の向こうの彼女へと頷いた。
「了解です。健闘を祈ります、所長。これからは短時間ですが通信も可能ですよ。緊急事態になったら遠慮なく連絡を」
「……ふん。ＳＯＳを送ったところで、誰も助けてくれないクセ……顔を近づけるのは止めなさい！　あなたが守ってくれるの？　そう、なら、まずは、わたしから離れなさい！」
いつの間にか近づいていたラフムへ威嚇するように声を荒げるオルガマリーを見つめたロマニは彼女へと声をかける。それは最終確認のため。
「所長？」
「なんでもありません通信を切ります。そちらはそちらの仕事をこなしなさい」
「……所長、よろしいのですか？　ここで救助を待つ、という案もありますが」
「そういう訳にはいかないのよ。……カルデアに戻った後、次のチーム選抜にどれほどの時間がかかるか。人材集めも資金繰りも一ヶ月じゃきかないわ。その間、協会からどれほど抗議があると思っているの？」
彼女の気持ちは固い。オルガマリーにとって、今回の事件を早急に解決しないことにはカルデアの所長という地位を取り上げられてし

まうという崖っぷちの状況だ。そのことをオルガマリーは十二分に理解していたため、元より引き下がるという手段は取ることが出来なかったのだ。
「最悪、今回の不始末の責任としてカルデアは連中に取り上げられるでしょう。そんな事になったら破滅よ。手ぶらでは帰れない。わたしには連中を黙らせる成果がどうしても必要なの」
　オルガマリーは藤丸とマシュ、そして、ラフムへと向き直る。
「……悪いけど付き合ってもらうわよ、マシュ、藤丸。そうね、あなたにも働いてもらいます、ラフム。とにかくこの街を探索しましょう。この狂った歴史の原因がどこかにあるはずなんだから」

5．出会い頭

「3．b―4、3．b―4、0qdf：@yg―♪」

「黙りなさい！」

歌を歌うラフムとそのマスター御一行は荒廃した冬木の街を歩き続ける。クールな顔で交配（漢字違い）とかいいですよね？

師匠の水着、剥ぎ取りたいし、ラフムに『黙りなさい』と怒った所長のタイツも剥ぎ取りたいなあと考えながら冬木の街を歩く。

今はクレーター、元は遠坂邸から一路、冬木大橋へと向かう。大橋を調べて、何かしらの手掛かりがないか調べるためだ。ラフムはどこに聖杯があるのか知ってるけど、言わない。

ラフムがオルガマリーの困り顔を見たいとかじゃなくて、実はしっかりとした理由がある。

マシュの宝具のためだ。

このまま、聖杯を回収しにオルタちゃんの所に行ったら、『いきなり聖杯を譲れとは何事だカリバァァァァァァー！』とか聖剣をブッパされて防げないということにもなりそう。サ●ー先生のイラストのような形相のオルタちゃんには勝てる気がしない。

だから、マシュの宝具で防ぐ。そして、カリバーを防ぐマシュの後ろ姿、特にマシュのピーチマシュマロをマスターとじっくり鑑賞するためには冬木を回って、ある人物を探さないといけない。

マスターを叱るオルガマリーを横目にラフムは炎上している橋の向こう側を見る。たくさんの人が生活していた冬木。その中でも高層ビルが立ち並ぶ新都は余りにも悲しい。それは終焉の始まりっぽい光景だった。

「67？」

まだ形が残っているビルの屋上で赤い光がピカッとした。ヤバイ、あれはヤバイ。

腕を伸ばして、マスターとマシュ、そして、オルガマリーを抱き留める。

「ラフ……ムッ!?」

説明する時間もない。
三人を抱えたラフムは前に向かって全速力で掛ける。と、それまで居た場所が爆発した。
新都のビルから放たれた矢が地面に突き刺さって爆発したためだ。ざっと、目測で５００ｍ。
空いている一本の腕で向かって来る矢を全部弾くのは無理だ。腕を自由にしなくちゃいけない。
「ＭＡＳＨ、ｔｊ５ｗ」
ラフムは余っている腕でマシュの盾を数回叩く。
「ラフムさん……わかりました」
マシュはラフムの言いたいことが分かったのだろう。高速で移動する中、マシュは盾を前に構えて、マスターとオルガマリーを守る体勢を取る。
残り２００ｍ。相手もなりふり構わずに攻撃してきた。進行方向の道路、そして、今来た道路全てを覆う軌道で矢が何本も放たれていた。先に進んでも、後ろに戻ってもダメだ。
ラフムは地面に腕を突き刺す。ラフムの体が浮き上がり、回転を始める。ぐるりと回る視界の中、ラフムは地面から腕を引っこ抜いた。勢いそのままに横の方向へと飛ぶラフムたちを待っていたのはビルとビルとの間の狭い隙間だ。ギリギリの隙間に体が入った後、前方、つまり、狙撃手がいる方向にあるビルの壁に爪を突き立てる。
ガクンと落ちたスピード。壁に深く突き立てたせいで、肩が痛い。いや、右の側腕だから肩と言えるかどうかは少し怪しいものだけど。壁を大きく削りながら、ラフムたちの動きは止まった。だけど、このままじゃマズイ。
腰を捻り、前の壁に爪を突き立てる。ちなみに、ラフムの筋力は結構あると思う。筋力Ｄではないハズだ。ビルの壁に罅を入れた後はマシュの出番。つまり、文字通りマシュを盾にして、罅が入ったビルの壁をタックルで壊そうという訳だ。
「くっ！」
「ｔ@ｙｆ@ｚｗ！」

「はい！」
ラフムの『頑張って』という掛け声にマシュはいい返事を返してくれた。
サーヴァントであるラフム、そして、デミサーヴァントであるマシュは別として、マシュが頑張ってくれなきゃマスターとオルガマリーが怪我をする。そして、ここでグズグズしていたら、ビルの崩壊に巻き込まれて死ぬ。いや、矢を爆発させるのはホント卑怯。ビルを爆破で壊すのは外道（ケリィ）だけで十分だというのに。
血は裏切れないということか。血は繋がってないけども。
狙撃手へと思いを馳せながらラフムとマシュはビルの壁を二枚、三枚とぶち抜いていく。後ろからは爆発音と建物が壊れる音。無茶苦茶、怖い。ついでに言うと、後ろから粉塵まで迫ってくる。
もう無理だろう。壁をもう一枚、穿ち破ってビルの一室に入った所で、すぐに横に飛び退く。それと同時に後ろから迫っていた粉塵がビルの中に一斉に流れ込む。とはいえ、すぐに横に飛び退いたから大きな破片などには当たらずに済んだ。
けど、埃でビルの中は酷い様子だ。
「ｅｓ@４ｄ９４」
「わかりました」
ラフムはマシュを腕から降ろし、ドアを示す。部屋を移動するためにはドアノブを開かなくちゃならないけど、ラフムには指がない。馬上槍みたいな感じの手だ。
ドアを開けたマシュに続いて、ラフムもドアを潜り抜ける。ラフムの急制動でブラックアウトしたらしいマスターとオルガマリーを休ませるためにソファに寝かして、近くにあった自動販売機に両側から爪を立てる。バキッという音を立てて前面を取り外したラフムはマシュを呼んで、飲み物を取らせる。ちなみに、ラフムとマシュとの意思疎通はほぼアイコンタクトだけ。残念だったな、マスター。将来的には、アイコンタクトだけで戦闘、炊飯、掃除、談話ができる……
そんな関係を一早く構築したのは、このラフムだァ！
「ラフムさん」

「？」
マシュの呼ぶ声に首を傾げる。
「マスターと所長は大丈夫なのでしょうか？」
『大丈夫』というようにラフムはマシュに力強く頷く。
彼らの意識が飛んでいるのは、安全が保証されていないジェットコースターに乗って気絶したのと同じ感じだから。見た所、怪我をしている様子もないしね。
自販機から取り出したつめた～い缶をラフムは器用に両手で摘まみ上げる。気分はクレーンゲーム。クレーンゲームのクレーンのように筋力Ｅ―などではないから、３５０ｍｌ缶もしっかりと持つことができる。
そして、持ち上げた缶をそっとオルガマリーの頬に当ててみる。
「ひゃっ！　……キャーッ、痛い！」
「所長、お静かに！　いつ、敵が来るか分かりません！」
缶を頬に当てられた後、ぼんやりと周りを見るオルガマリー。
ラフムと目が合った後、目を大きく見開くオルガマリー。
ラフムを確認した後、叫んでソファから転がり落ちたオルガマリー。
ソファから落ちた後、マシュに怒られて少し項垂れたオルガマリー。
すっごいカワイイ。
と、オルガマリーは涙目でラフムを睨みつけた。
「な、なんなのよ！　何でいきなり走り出したの!?　答えなさい！」
「ｃ；ｆ」
「ああ、結構です。あなたの言葉は分かりません」
（・・ω・、）
「マシュ、何が起こったか説明して頂戴」
「はい。私たちを狙った狙撃がありました」
「狙撃？」
「ええ。狙撃から身を隠すためにラフムさんは私たちを抱えて走り出し、ビルの隙間に逃げ込みました。それだけでは不十分だと思ったの

でしょう。壁を壊して、ビルを通り抜けて６つ目のビルの内部に逃げ込みました」
「それが今居る場所ということね。それにしても、狙撃されたということは……敵はアーチャー？」
「アーチャー。つまり、私と同じようなサーヴァントということですか？　しかし、サーヴァントはカルデアのシステムを使わずに存在できるものなのでしょうか？」
「ええ、可能よ。ここは特異点Ｆ、Ａ．Ｄ．２００４年の冬木。ラプラスによる観測で、私たちがいる同じ場所で、同じ時期で聖杯戦争という儀式が行われていたのよ。この儀式は七騎のサーヴァントを召喚し、競い合い、その勝者は万能の窯である聖杯を獲得できる」
『ともかく』とオルガマリーは肩を竦める。
「この冬木で行われた聖杯戦争のデータを基にお父さ……前所長は召喚式を作り上げたの。それがカルデアの英霊召喚システム・フェイト。こいつを召喚したシステムよ」
　オルガマリーがラフムに指を向けた。途中からややこしくて話を聞いてなかったけど、『ごちゃごちゃややこしい。ポチポチするだけで先に進むようにしてください』と心優しいラフムは言わずに取り敢えず頷く。
　ラフムから目を離したオルガマリーは爪を噛む。
「街は破壊される事なく、サーヴァントの活動は人々に知られる事なく終わったはずなの。……なのに、今はこんな事になっている。特異点が生じた事で結果が変わったと考えるべきね。２００４年のこの異変が人類史に影響を及ぼして、その結果として百年先の未来が見えなくなった。だから、わたしたちの使命はこの異変の修復よ。この領域のどこかに歴史を狂わせた原因がある。それを解析、ないし排除すればミッション終了。わたしもアナタたちも現代に戻れるわ」
「なら、早く先に進まないといけませんね。すみません、所長。オレはもう大丈夫です」
　ソファから身を起こしながら、そう力強く言うのはラフムのマスターだ。

「当然。さっさと行くわよ」
「はい」
「了解しました」
だけど、それは認められない。
ラフムは腕でバツ印を作りながら首を横に振る。
「何？　どういうこと？」
「ｊｚｗｗ」
「どうやら、ラフムさんは『待っていて欲しい』と言っているみたいです」
おお、マシュ凄い。ラフムの言いたいことが分かるなんて。そして、そう思ったのはラフムだけじゃなくてマスターもみたいだ。
「マシュ、ラフムの言っていることが分かるの？」
「ええ、なんとなく……ですが」
取り敢えず、気持ちは伝わったので来た道を戻ろうとする。だけど、ラフムをマスターが呼び止めた。
「ラフム……大丈夫なんだよな」
「ｍａ」
力強く頷いて、ラフムは……マシュ、ドア開けて。

6．狙撃手は赤で待つ

―ＯＮ―

「３．ｂ―４、３．ｂ―４、０ｑｄｆ：@ｙｇ―♪」

「黙りなさい！」

ラフムの鼻歌に怒るオルガマリーを見て藤丸は笑う。音階がずれているようなラフムの鼻歌。今の状況が特異点の修復ではなく、ピクニックならば、きっと心の底から楽しめただろう。そして、現在の緊迫した状況でもラフムの余裕を見せる態度で心は少し軽くなった。

ラフムはそれが狙いで鼻歌を歌ったのだろう。緊張が続いていれば体力は減ってしまう。それを防ぐために、ラフムは態と下手な鼻歌を歌ったのだろうと藤丸は当たりをつけた。

『しかし』と藤丸は気を引き締め、辺りを確認する。

それは終焉の始まりが顕現した光景。

赤い火は煌々と夜空を照らす。人の営みの象徴と言うべき高層ビルは死骸のように横たわっている。目の前の光景は地獄だと藤丸は唇を噛み締めた。

――誰が、何のために？

疑問が頭の中を回り続ける。

「６７？」

思考に沈む藤丸を現実に戻したのはラフムの声だ。恐らくは言葉。しかし、それを解読できない藤丸はただ斜め上の方向に顔を向け続けるラフムへと声をかける。

「ラフ……ムッ!?」

『どうしたの？』という言葉は後には続かなかった。一瞬にして体にかかる莫大なＧ。そして、後ろで光る何かよく分からないもの。それが爆発して赤い色の魔力を発したことだけは薄れ行く意識の中で理解できた。

その光景を目にした藤丸は子どもの頃、親に連れられて初めて乗ったジェットコースターを思い出す。あの時は小さくて恐怖しか感じなかった。体にかかるのは、この世のものとは思えないほどの圧力、

耳に横切るのは轟々と轟く風、女性たちと時々男性の悲鳴、そして、煌びやかな遊園地の風景、それに、何とも奇妙な造形をした猫のようなマスコットが四体。そこで、藤丸は目を閉じ、早く終われと心から願ったのだった。果たして、藤丸の願いが聖杯に届いたのか、恐怖の時間は終わった。

ジェットコースターから降りた後、父さんに抱かれて母さんにアイスを食べさせて貰ってて……あれ？　これって、もしかして走馬燈って奴？

体から魂が抜け出ているような感覚を最後に藤丸の意識は消失した。それとほぼ同時にオルガマリーの意識もまた消失してしまった。

二人が意識を失った原因はラフムにある。藤丸とオルガマリーの後ろにいたラフムが腕に彼らを抱え、猛烈な勢いで前へと走ったのだ。藤丸の端末に記録されているラフムのマテリアル、そこに記されているラフムの敏捷のステータスは〝A〟となっている。観測できる範囲内では最高のステータス。人間でしかない藤丸とオルガマリーにとって、ラフムが走る速さは無視できないものだった。ついでに言うと、後ろからは人の命を奪って余りある威力の爆発も起きている。ハリウッドも真っ青なアクションシーンだ。

ラフムの速さは不意打ちでは意識を消失させる。

だが、それはあくまでも〝人間〟という範疇でのこと。彼らと共にラフムの腕に抱えられたデミ・サーヴァントであるマシュにとって、体にかかるGは無視できる。

そして、そのことをラフムは理解していたのだろう。

「ＭＡＳＨ、ｔｊ５ｗ」

ラフムは余っている腕でマシュの盾を数回叩く。

「ラフムさん……わかりました」

マシュの返事にニヤリと歯を剥き出した後、ラフムの体勢は更に低くなる。前傾姿勢のままトップスピードに入ったラフムには、どこからか飛来してきた爆発物は追いつくことができない。射手の予測を超えたスピードで走るラフム。しかしながら、射手もまた規格外の腕を持つ者だ。

爆発物が放たれる位置からは何度も赤い光が瞬き、その度に空気を切り裂く音が響く。大体、２００ｍほど先にある一際高いビルの屋上から、こちらの動きを鷹の目で観察するのは、なるほど、人知を超えた力を持つものだろう。

爆発物――マシュの目はそれを矢だと捉えた――は調整を繰り返し、ラフムの進行方向へと位置を合わせてきている。

――このままでは……。

マシュが焦りを感じた次の瞬間、何の前触れもなく、ラフムは地面に右腕を突き刺した。と、体が浮き上がり、回転を始める。ぐるりと回る視界の中、ラフムは地面から腕を引っこ抜いた。気分は砲丸投げで使われる鉄球。砲丸投げとの違いは投げた者が共に飛ぶか否かの違いである。それに加えて、投げられる位置がビルとビルの隙間という狭い空間だという話だ。

しかし、ラフムの技量は秀でていた。

ラフムの狙い通りかギリギリの隙間に体が入った後、ラフムは前方、つまり、狙撃手がいる方向にあるビルの壁に爪を突き立てる。

ガクンと落ちたスピード。壁を大きく削りながら、ラフムたちの動きは一度、止まった。だが、その停止時間は一秒にも満たない。

ラフムは腰を捻り、前の壁に爪を突き立てる。ビルの壁に罅を入れた後、自分へと迫りくるビルの壁を大きな瞳で見つめながら、マシュは先ほどのラフムの言葉を思い返していた。

『ＭＡＳＨ、ｔｊ５ｗ』

――『マシュ、構えて』

ラフムの言葉を何故理解できたのか？　理由は分からない。それに、理解できた理論も分からない。だが、確信はある。信ずるに足る思いがある。

マシュは盾を持つ手に力を籠めた。

「くっ！」

手に奔る衝撃で思わず苦悶の声を漏らしてしまう。

「ｔ@ｙｆ@ｚｗ！」

「はい！」

『ｔ@ｙｆ@ｚｗ！』
――『がんばって！』
マシュはラフムの言葉に答えるかの如く魔力を籠める。
『保有する魔力量が多いほど性能は向上し、膨大な魔力を保有するならばその守りは国一つをも守護する聖なる壁と化す』と言われるマシュの魔力防御は正しく主人らを守る盾となった。
ラフムとマシュはビルの壁を二枚、三枚と崩していく。壁を壊し、ビルの一室に入った所で、ラフムは横に飛び退く。それと同時に後ろから迫っていた粉塵がビルの中に一斉に流れ込む。爆風で吹き飛んできた大きな破片から身を守るための行動だったのだろう。
濛々と砂煙が立ち上る中、ラフムは迷いのない動きで足を動かす。
「ｅｓ@４ｄ９４」
「わかりました」
どうやらラフムは移動するよう提案しているらしいとマシュはラフムの様子から感じ取った。ラフムの腕から降りたマシュは近くにあるドアを開け、ラフムを先に進ませる。ラフムの腕ではドアノブを回すことができないと判断しての行動だ。
電気の消えた廊下を進むと、ソファが見えてきた。その傍には自動販売機もあり、意識を失った藤丸とオルガマリーを休ませるにはお誂え向きだ。
「ラフムさん」
マシュは自動販売機の前面に手を当て、それを力任せに外したラフムへと声をかける。自分が呼ばれた理由が分からなかったのだろう。マシュの呼び声にラフムは首を傾げた。
「マスターと所長は大丈夫なのでしょうか？」
不安が滲んだ声色でマシュは呟く。不安からか一度、視線を床に向けたマシュはそっとラフムを見上げる。
『大丈夫』というようにラフムはマシュに力強く頷く。そして、それを証明するためか爪に引っ掛けて持ち上げた缶をそっとオルガマリーの頬に当てた。
「ひゃっ！　……キャーッ、痛い！」

「所長、お静かに！　いつ、敵が来るか分かりません！」
　缶を頬に当てられた後、ぼんやりと周りを見る、目を大きく見開く、ラフムを確認した後、叫んでソファから転がり落ちる、ソファから落ちた後、マシュに怒られて少し項垂れる。
　数秒で様々な表情を見せるオルガマリーへと優しい目付きを向ける保護者のような雰囲気を出すラフムに彼女は感情の赴くままに怒鳴る。
「な、なんなのよ！　何でいきなり走り出したの!?　答えなさい！」
「ｃ；ｆ」
「ああ、結構です。あなたの言葉は分かりません」
　落ち込んだように肩を落とすラフムに背を向けたオルガマリーはマシュへと向き直った。
「マシュ、何が起こったか説明して頂戴」
「はい。私たちを狙った狙撃がありました」
「狙撃？」
「ええ。狙撃から身を隠すためにラフムさんは私たちを抱えて走り出し、ビルの隙間に逃げ込みました。それだけでは不十分だと思ったのでしょう。壁を壊して、ビルを通り抜けて６つ目のビルの内部に逃げ込みました」
「それが今居る場所ということね。それにしても、狙撃されたということは……敵はアーチャー？」
「アーチャー。つまり、私と同じようなサーヴァントということですか？　しかし、サーヴァントはカルデアのシステムを使わずに存在できるものなのでしょうか？」
「ええ、可能よ。ここは特異点Ｆ、Ａ．Ｄ．２００４年の冬木。ラプラスによる観測で、私たちがいる同じ場所で、同じ時期で聖杯戦争という儀式が行われていたのよ。この儀式は七騎のサーヴァントを召喚し、競い合い、その勝者は万能の窯である聖杯を獲得できる」
『ともかく』とオルガマリーは肩を竦める。
「この冬木で行われた聖杯戦争のデータを基にお父さ……前所長は召喚式を作り上げたの。それがカルデアの英霊召喚システム・フェイ

ト。こいつを召喚したシステムよ」
　ラフムから目を離し、オルガマリーは爪を噛む。考えを纏める時に彼女がよく見せる仕草だ。
「街は破壊される事なく、サーヴァントの活動は人々に知られる事なく終わったはずなの。……なのに、今はこんな事になっている。特異点が生じた事で結果が変わったと考えるべきね。２００４年のこの異変が人類史に影響を及ぼして、その結果として百年先の未来が見えなくなった。だから、わたしたちの使命はこの異変の修復よ。この領域のどこかに歴史を狂わせた原因がある。それを解析、ないし排除すればミッション終了。わたしもアナタたちも現代に戻れるわ」
「なら、早く先に進まないといけませんね。すみません、所長。オレはもう大丈夫です」
　少し前から起きていたのだろう。全てを理解したような顔つきの藤丸が身を起こしていた。
「当然。さっさと行くわよ」
「はい」
「了解しました」
　意気軒高。異変の修復へと足を踏み出した一行を止めるモノがいた。ラフムだ。
　ラフムは腕でバツ印を作りながら首を横に振る。
「何？　どういうこと？」
「ｊｚｗｗ」
「どうやら、ラフムさんは『待っていて欲しい』と言っているみたいです」
「マシュ、ラフムの言っていることが分かるの？」
「ええ、なんとなく……ですが」
　突然、飛来した不安感。
　藤丸は自分の直感に従い、ラフムへと向き直る。
「ラフム……大丈夫なんだよな」
「ｍａ」
　自信有り気に頷くラフムの姿に言い様のない不安感を覚えた藤丸

だったが、ラフムを止めるための言葉は持ち合わせていなかった。マシュに開けさせたドアの向こうに姿を消していくラフムの後ろ姿を見つめ、藤丸はラフムの無事を祈る事しかできない自分に歯噛みするのであった。

7．帰還を目指して

―ＯＦＦ―

マシュたちと別れたラフムは今来た道を一人で戻る。ラフムが先ほど開けた穴から外に出ると、外はボロボロだった。

世紀末みたいな光景。

２１世紀が始まってまだそんなに経っていない冬木だけど、世紀末みたいな光景だ。２００４年の冬木の綺麗な街並みをこんなにした原因の一つであるアーチャーの姿を思い浮かべる。白髪に褐色の肌。人気投票常に上位の彼の姿を。

アニメではクラスがランサーのライダーさんが出てきたりしたけど、アーチャーは変更されていなかった。弁慶（偽）は七章で出番があったから、リストラをされたのかもしれない。で、アニメのライダーは誰なの、あれ。ダレイオス君っぽかったけど、細部は違ったし謎だ。

おっと、閑話休題。閑！　話！　休！　題！

一度使ってみたかった言葉だ、閑話休題。だってさ、使わないじゃん、閑話休題なんて。憧れを回収してラフムはそっと壁に爪を突き立てる。ビルの壁をまるで蜘蛛男のように登っていきながら敵について考えを巡らせる。

アーチャーがアニメＦｉｒｓｔ　Ｏｒｄｅｒでも続投して出てきたということは、どのような世界線でも変えられることのない確定事項であると考えられる。例えると、Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔのどのルートを選んだとしても言峰は死ぬというようなものと同じようなものだろう。そこ、言峰は第四次終了時点で死んでるってツッコミはいらないよ。もし、そんなツッコミされたら、ラフム泣いちゃうぞ。

まあ、そんな訳で目下、敵だとされるのがアーチャー・エミヤだ。チュートリアルのリニューアル後、初回十連でエミヤを引いた古参の方は驚いたに違いない。『なんで真名を出してるんだよ』と。

もはや、『君たちの知っている聖杯戦争ではないのだよ』と言わんば

かりのやり方。どちらかと言えば、真名よりもクラスの方を隠す方が有効なＦＧＯだ。ＦＧＯからｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔに入った方は逆に序盤でランサーと互角に戦うことができるアーチャーＴＵＥＥＥＥとなるだろう。

それほどまでに、ＦＧＯのクラス相性の差は大きい。だからこそ、ＦＧＯ配信直後は猛威を振るった。何せ、出発前の確認画面で敵の相性が見えない時期があったのだから。

弱点属性のエースがあっさり落とされてポカンとしたプレイヤーも多いと思う。リセマラを１００回ほどして手に入れた青王が消えていく光景を見て、『最優のサーヴァントじゃなかったんですか!?』と叫んだこともあった。

そんな初期のＦＧＯ。

そこで取られた手段は、全クラスに攻撃が有利相性である攻撃役のバーサーカーに加えて、ほとんどのクラスに防御が有利相性で回復もできるお守り役のジャンヌ（ルーラー）を連れて行くというもの。ラフムもよく『オレのバーサーカーは最強なんだ！』とか『やっちゃえ、バーサーカー！』とか言ってスマホをポチポチしてた。

ここまで言えば、勘付いた人もいるかもしれない。

そう、ラフムのクラスは〝ランサー〟である。ランサーのクラスはセイバークラスに弱く、そして、アーチャークラスに強い。もう一度、言おう。

ラ　ン　サ　ー　は　ア　ー　チ　ャ　ー　に　強　い　！

敢えて言おう。アーチャークラスはカスであると。

今のラフムはランサー。アーチャー相手には攻撃が増加し、相手からの攻撃は減少するクラスだ。つまり、負ける要素はない。命令とあらば、あのギルガメッシュにも勝ってみせよう。あ、賢王（キャスター）様は座っていてください。

ラフムの基本方針は〝俺より弱い奴に会いに行く〟というもの。態々、弱点クラスで向かうような蛮勇はラフムにはいらないのだ。

カチリと音を立てて、爪をビルの端に引っかける。今、ラフムがいるのは狙撃によって中ほどから上が完全に吹き飛んだビルの上の階。

天井から上が吹き飛んでいて、屋上テラスみたいな気分が味わえる。ちなみに、寛ぐと別のビルの屋上から矢が飛んでくる仕様です。
ぶらりとぶら下がっていても、話が進まない。息を大きく吐き出して、決意を固める。
引っ掛けた爪を支点にグイッと体を持ち上げて、死角となる壁へと素早く身を寄せる。気分はスネーク。段ボールはないけど。そっと、壁から顔を出してアーチャーがいるビルを見つめる。
まだ、気づかれていないようだ。
少し整理してから行動を始めよう。
—|—↑アーチャー
—　—
—ビ—　　—＼　↑ラフム
—ル—　　—ビ—
—　—　　—ル—
今のラフムとアーチャーの位置関係はこんな感じだ。
省略したけど、もちろんアーチャーがいるビルとラフムがいるビルの間にはいくつかビルがある。これからの目標は、ビルの上を飛び移ってアーチャーとの接近戦に持ち込む。その後、アーチャーの腹に爪を突き刺して『お前が墜ちろ』と言わなくちゃいけない。
けど、それを実行するためには、なるべくアーチャーに気付かれることなく接近しなくちゃ撃ち落とされる。
だが、問題はアーチャーが持つスキル：千里眼Cだ。
簡単に言えば、むっちゃ目が良い。今まではアーチャーの視界に入っていないから事なきを得ているけれども、一度でも視られたら即、矢を放たれるだろう。
ここに居ても、話が進まない。息を大きく吐き出して、決意を固める。
いや、もう少し様子を見よう。
なんでラフムが人間離れした動きを簡単に出来ているのか考えを整理することも大切だ。
実はラフム、ネットにアップしてるメアリースーな二次オリ小説が

ある。それでの妄想力が力の源だと思われる。二次オリ小説の中ではラフムはやるよ、かなりやる。むっちゃ強い敵の前で、両手に剣を持ってかっこいいポーズを取ったりすることもできるぐらいに妄想の中ではラフムは強い。

つまり、妄想でのイメージに体が完全について行っているラフムに敵はない！

ごめん、嘘。バビロニアで走り回った時に色々な動きを試していただけの話。一日にも満たない時間だったけど、運動量は半端なかったから大抵の動きには対応できる。

ここに居ても、話が進まない。息を大きく吐き出して、決意を固める。

いや、もう少し様子を見よう。

なんでラフムが人間の言葉を話せないのか考えを整理することも大切だ。

ラフムという種族は見た目から分かるように身体能力は高く、見た目から分からないように学習能力が半端ない。こんな悪の組織の下っ端怪人みたいなフォルムのラフムだけど、頭はすっごい良い。バビロニアで活動しているラフムたちは一日ほどで人の言葉を話せるようになっていた。

けど、ラフムは人の言葉が話せない。人の言葉を覚える機会がなかったからという可能性がある。実際、ラフムが出会った人間の言葉を話すのはキングゥぐらいのもの。さらに、キングゥはその時は胸に穴が開いていて満足に話すこともできない状態だった。こんなに少ない機会じゃあ、人の言葉を覚えられない。そして、今のラフムはサーヴァントだ。霊は極一部の例外を除いて成長できない。マスター適正などの外的要因でステータスは変動するものの、それは〝座〟に登録された状態に近づくだけの話。どれだけ時間をかけても、死んだ時以上の能力に成長することなんてできない。

更に言うと、トラックにはねられた時、ラフムは人間だった。その時の記憶から言葉を理解できるものの、その時に慣れていた人の体での言葉の理解の仕方だ。人とは全く違うラフムの体で言葉を話すこ

とは非常に難しい。だから、言葉を理解できても使いこなせないというのが今の状況だ。
ここに居ても、話が進まない。息を大きく吐き出して、決意を固める。
いや、もう少し様子を見よう。
……ちくしょう。話題が出てこない。もう引き伸ばせないじゃないか！
ああ、行きたくないなァ……。
けど、ここでアーチャーを仕留めて置くのが安全だ。大ボスであるオルタちゃんとアーチャー二人を同時に相手取りたくない。強力なサーヴァントと技巧派なサーヴァント、その二人と同時に戦うなんて勝ち目がない。
「ｅｈｃ@……」
……贋作者、武器の貯蔵は充分か？

―ＯＮ―

ラフムがビルから出て行った後、藤丸たちもビルの外へと移動する。彼ら、特に藤丸とマシュは何も出来ないなりに、せめて、遠くからラフムを見守ろうとしたが、彼らを止めたのはオルガマリーだった。
彼女曰く、狙撃手がマスターである藤丸を優先して狙うのは間違いないということで、ラフムと狙撃手の戦闘が始まるまでは狙撃手の死角であるビルの影に隠れながら移動する方針をオルガマリーは固めたのだった。
「まあ、ラフムに単独行動のスキルがあるなら君を囮にするのも手段の一つと成り得るでしょうけど」
「スキル？」
「サーヴァントは生前の逸話から、それぞれ固有のスキルと呼ばれる特殊能力があるの。そうね、調べておいた方が後々役に立つかもしれないし……。藤丸、マテリアルからラフムのステータスを調べなさい」

「はい」
オルガマリーの指示に従い、藤丸は手首の端末を調べていく。
見つけた。
藤丸は端末に表示されたラフムの情報を読み上げる。
「保有スキルは〝けたけた笑い〟というのが一つで、あとの二つはロックされています」
「霊基再臨をしたらアンロックされるわ」
「霊基再臨？」
「残念ですが、私のカルデアでもサーヴァントの本来の力を引き出すことはできません。サーヴァントを本来の力で呼び出すには超抜級の魔力炉を用意しなくてはならないほどの魔力が必要とされるの。それで、カルデアは召喚時の必要魔力をカットするために英霊をダウンスケールさせた状態で呼び出します。そのダウンスケールされた状態から通常の聖杯戦争で召喚される霊基状態、更に生前の状態へと近づけるために行うのが〝霊基再臨〟とカルデアで呼んでいるもの。その際に必要とするのが、サーヴァントそれぞれに合った魔力を持つ概念素材。尤も、これはさっきの戦闘を見ると、エネミーを戦闘不能状態にした時にエネミーから放出された魔力を端末が吸収して、その放出された魔力に合った素材の概念として変換しているようですから、手間はかかりそうにありません。けど、確率が低いのは少し心配ね。ちなみに、観測した魔力を概念素材へと変換する際に使用しているのは、宝石魔術と概念礼装の作成魔術のハイブリッド魔術。あら、その顔、あまり分かっていないのかしら？　これだから、素人は。仕方ありません。素人の君にも分かり易く、ありていに言ってしまうとレベルキャップの解放というのが近いわ。つまり、霊基再臨というのはサーヴァントを強くするための方法の一つという訳ね。というか、サーヴァントについて知ってる？　いえ、知らなそうね。仕方ないわ。私が説明してあげる。サーヴァントというのは、魔術世界における最上級の使い魔と思いなさい。人類史に残った様々な英雄。偉業。概念。そういったものを霊体として召喚したものなのよ。実在した英雄であれ、実在しなかった英雄であれ、彼等が〝地球で発生した情

報〟である事は同じでしょ。英霊召喚とは、この星に蓄えられた情報を人類の利益となるカタチに変換すること。過去の遺産を現代の人間が使うのは当然の権利であり、遺産を使って未来を残すのが生き物の義務でもある。分かる？　キミが契約したモノはそういう、人間以上の存在であるけれど人間に仕える道具なの。だからその呼称をサーヴァントというのよ。たとえ神の一因であろうとマスターに従うものにすぎないんだから」
「そうですか。ちなみに、ラフムのクラススキルというのが対魔力Ｅと神性Ａですね」
「ちょっと！　今、私の話を聞き流したでしょ!?」
「宝具が新しい人の形（アミノギアス・トポロジー）。ランクがＥで種別が対人宝具、括弧付きで自身と書いています」
「聞いてる!?　ねえ、聞いてる!?」
「パラメーターが筋力Ｂ耐久Ａ敏捷Ａ魔力Ｃ幸運Ｅ宝具Ｅ。あ、マシュも耐久Ａだ。凄い」
　マスターに褒められて頬を薄く染めるマシュを押しのけるようにしてオルガマリーは藤丸に掴みかかった。
「無視しないでちょうだい！　いいこと？　私は所長！　あなたはレイシフトの適性があるだけの素人！　一般枠での募集！　なら、役職が上の私の話を聞くのが常識でしょう!?」
「だって……」
　オルガマリーに揺らされながら藤丸は気の抜けた様子で彼女へと答える。
「……ごちゃごちゃ、ややこしいですし」
「ふざけないで！　そんなことで私の話を聞き流していたの!?　いい？　もう一回説明してあげるから、今度はしっかりと！　一字一句漏らさず！　崇め奉るように私の話を聞きなさい！」
「所長！　シャラップ！」
「マリー、話は後！」
　マシュの声と共に藤丸の端末からロマニの声がオルガマリーを制止する。

「あなたたちまで!?」
『裏切るの？』というオルガマリーの言葉は続かなかった。ロマニの声が緊迫した状況を端的に示していたからだ。
「すぐにそこから逃げるんだ三人とも！　反応がある！　しかもこれは……」
　オルガマリーの目が黒い靄を捉えた。その靄は人型だ。それから立ち上っているかの如く靄は周囲を黒く染めている。
「な!?　まさか、あれって!?」
「……そこにいるのはサーヴァントだ！」
　立ち上る靄に含まれる魔力は常識では計れない。魔術、そして、戦闘の素人である藤丸にも分かる。アレは常軌を逸している、と。
　トンと軽い足音と共に、黒いブーツが地面を鳴らした。ここから先は通さないというように藤丸たちの前に立ちふさがる黒い人型は柄の長い鎌を手に持っていた。鎌の先の刃が炎を移して赤と銀色に光る様子を見て藤丸は思わず喉を鳴らす。
　そして、危機感を覚えたのは藤丸だけではなく、ロマニもだった。
「戦うな、藤丸、マシュ！　君たちにサーヴァント戦はまだ早い……！」
「撤退よ、急ぎなさい！　とにかくここから離れるの！」
「……それも難しそうです」
　マシュは盾を構え、人型を見つめる。が、それは悪手だった。
　チャリと軽い金属音がした。
「鎖？」
　音を立てたものを見て藤丸は疑問の声を上げる。
「マスター！　危ない！」
　マシュが藤丸を押しのけた、その瞬間、鎖が独りでに動き藤丸のいた空間を猛烈な勢いをもって通り抜ける。藤丸が声を出さなければマシュは気づかずに、藤丸は鎖に絡めとられていたことだろう。
　ギリギリで生存を勝ち取った藤丸とマシュだったが、敵にとって、今の攻撃は小手調べ。弱者を甚振る時、特有の冷たく愉し気な声を黒い靄が滲ませる。

「見知らぬサーヴァントに見知らぬマスター。……ああ、なんて瑞々しい」
冷たい……余りにも冷たい声が目の前の黒い靄から発せられた。声と同時に靄は薄くなっていき、その人型の姿を現す。
妖艶な美女だった。
均整の取れた体つき。背は高くモデルとしても超一流になれるであろう美貌を持つ女だ。髪は長く、薄紫に艶めくソレは街の火を反射していた。しかし、その貌は見えない。その女がフードを被っているからだ。
ともすれば、魔女のよう。それは、彼女が持つ大鎌も相まって藤丸にプレッシャーを与えていた。物語から抜け出してきたかのような女だ。そして、物語の進行上、このような場面で出てくる者は〝敵〟であると藤丸は理解していた。
「サーヴァント反応、確認。そいつはランサーのサーヴァントだ！」
藤丸の端末からロマニの焦った声が聞こえる。ランサーと言えば、三騎士と呼ばれる強力なサーヴァントのクラスの一角とされる。三騎士――セイバー、アーチャー、ランサー――は大抵、逸脱した逸話を持つ。例えば、巨大で獰猛な竜を倒す。例えば、射った矢で国境を作る。例えば、敵兵全てを串刺しにする。
英霊の中でも屈指の実力者が当て嵌められるクラス。それが三騎士と呼ばれるクラスだ。
「なんでサーヴァントがいるの!?」
いや、例え三騎士クラスではなくとも、サーヴァントというのは、それだけで強力な兵器である。オルガマリーが慄くのも仕方のないことだ。
固有スキル、そして、サーヴァントが持ち得る最大の切り札である〝宝具〟を考えず、その身一つだけでいい。ただの魔術師を屠るには十分なお釣りが出るほどに、人とサーヴァントの間には大きな差がある。そのことを理解していたからこそ、オルガマリー、並びにロマニは焦燥に駆られる。
「そうか……聖杯戦争だ！　その街では聖杯戦争が行われていた！

本来なら冬木で召喚された七騎による殺し合いだけど、そこはもう〝何かが狂った〟状況なんだ！　マスターのいないサーヴァントがいても不思議じゃない。そもそも、サーヴァントの敵はサーヴァントだ！」

知らず知らずの内に早口になっていたロマニの言葉にマシュが反応した。

「……じゃあ……わたしがいるかぎり、他のサーヴァントに狙われる……？」

「マシュは聖杯とは無関係でしょう！　それにアレは……〝狂っている〟！」

静かに佇む黒いフード（ランサーのサーヴァント）の女性は優雅に笑う。

「あら、随分な言われ様。ですが……」

彼女の唇が邪悪に捲り上がった。

「……貴女の言葉は正しい」

空気が爆ぜた。

これまで味わったことのない衝撃が藤丸を襲う。それは、殺気を籠めた攻撃。普通に生きていれば、いや、人の道を外れた魔術の徒だとしても今し方、藤丸が味わった恐怖を感じることはまずない。藤丸と同じような状況を味わうとすれば、怨嗟の嘆きがピークになった戦場に好んで飛び込んでいく探究者や、自ら苦痛を味わうために身を投げ出す殉教者といったレアケースの人間のみだろう。

「くっ……」

だが、それほどまでの〝殺す〟という感覚を受けた中でもマシュの盾はランサーの攻撃を防いでいた。女性が持つ、鎌とも槍とも言える武器をマシュは盾で押し戻す。しかし、マシュの抵抗はそれで終わり。額に冷や汗を流しながら、マシュは目の前のランサーと自分の間にある力の差を理解した。

「私では敵いません。逃げてください、先輩！」

「マシュ……!?」

盾を構え続け、自分に撤退するよう進言したマシュを信じられないというように見つめる。藤丸も馬鹿ではない。目の前のランサーと

戦い、勝ちの目はないと理解している。そして、この場でもたついていると全滅の憂き目に合うであろうことも理解している。

――オレは逃げない！

だが、目の前で自分よりも華奢な女の子が命を賭して戦っているのだ。逃げられようか？　いや、逃げることなどできない。それに、ここで逃げたら一人で敵を倒しにいった自分の勇敢なサーヴァントに顔向けが出来るか？　いや、出来ない。

藤丸は唇を噛み締め、拳を握り締める。凛とした視線でサーヴァントを見つめ、藤丸は魔力回路を励起させる。右手が熱くなる。それは彼の右手に赤く刻まれた紋、令呪（切り札）を使用するという決意だ。令呪を魔力リソースとして使い、マシュの能力を向上させる。それが、逃げない選択をした藤丸の決意だった。

――令呪を以って命じる。

「小娘かと思えばそれなりに兵（つわもの）じゃねえか。なら放っておけねえな」

令呪の使用のために藤丸が口を開こうとした、その瞬間。何の前触れもなしに、声が響いた。熱くなった藤丸の頭を冷めさせる声だ。しかし、その声の主の姿はどこにも見えない。

藤丸と同じく、ランサーも声の主を見つける事が出来なかったようだ。あちこちに視線をやるが、やはり、声の主は見つからない。

「何者……？」

「何者って、見れば分かんだろご同輩！」

青い魔力が立ち上がる。そこから顕れるのは、長身の男性。

「なんだ、泥に飲まれちまって目ん玉まで腐ったか？」

青いフードの男がそこにいた。

「貴様……キャスター」

「はっ……」

〝キャスター〟と呼ばれた者もサーヴァントなのだろうと藤丸は当たりをつけた。では、彼は敵か、それとも味方か？　藤丸はランサーへと目を向ける。

鼻を擦り余裕を見せるキャスターと呼ばれた青髪の男とは対照的にランサーは狼狽していた。

「何故、漂流者の肩を持つのです？」
「あん？　テメエらよりマシだからに決まってんだろ。それとまあ、見所のあるガキは嫌いじゃない」
　ランサーと話をしながら、キャスターはマシュの前へと出る。キャスターの後ろ、そして、マシュの後ろ姿を見つめる藤丸は彼らの背中を目に焼き付ける。
「オレはキャスターのサーヴァント。故あってヤツラとは敵対中でね。敵の敵は味方ってワケじゃないが、今は信頼してもらっていい。そら、構えなそこのお嬢ちゃん。腕前じゃあアンタはヤツに負けてねえ。気を張れば番狂わせもあるかもだ」
「は……はい、頑張ります！」
「坊主がマスターかい？　なら指示はアンタに任せようか」
「はい！」
「おっ……いい返事だ」
　キャスターは杖を構える。
「ひとりで健気に戦ったあのお嬢ちゃんに免じて、仮契約だがアンタのサーヴァントになってやるよ！」
「……いいでしょう。仕留める予定が早まっただけのこと。貴方は生身のまま頂きましょう」
　再度、空気が爆発した感覚を藤丸は覚える。しかし、今度の藤丸は一味違った。
「マシュ！　前に出てランサーの間合いを潰せ！」
「はい！」
「キャスター！　動きが止まったランサーを追撃！」
「応よ！」
「それから……」
　藤丸の指示通りに動くマシュとキャスター。キャスター以外は何も出来ないと踏んでいただけに、ランサーは思わず動きを止めてしまう。
「くっ……」
　しかし、流石は歴戦の猛者。ランサーはすぐに体勢を立て直し、マ

シュとキャスターから距離を取った。
狙うのは一秒にも満たない時間。魔力をその魔眼に集めるための時間だ。
ランサーの頬が吊り上がったと同時に彼女の宝石にも似た黄金の眼が怪しく光る。
「女神(カレス・オブ・ザ……)の……!?」
――な……に、が……!?
宝具(切り札)の使用に踏み切ろうとしたランサーは予期せぬ場所からの反撃に頭を揺らされる。衝撃は右側頭部。衝撃で閉じた右目では何も見えない。ランサーは左目を動かし、下手人の姿を見つけた。
それは女だ。
マシュ、そして、彼女のマスターの少年の後ろで小動物のように震えていた女だった。
恐怖で震えながら、オルガマリーが右の人差し指で自分に呪いをかけたのだとランサーは気が付いた。
〝フィンの一撃〟とも呼ばれる強力な呪い(ガンド)である。人差し指を向けた相手を呪うガンドは通常ならば体調不良を引き起こす程度。しかし、卓越した使い手ならば物理的な干渉も出来得る強力な呪いとなる。
しかし、対魔力を備えるランサー。対魔力でガンドを軽減し、ダメージは全くないと言えども、宝具使用までのコンマ数秒を狙い撃ちされて宝具に意識を割けなかったのは痛手だ。
そして、目の前のキャスターからオルガマリーへと目を移したのは、更に手痛い失敗であった。
「アンサズ!」
「ッ!?」
対魔力を貫くほどの高火力の魔術がランサーの身体を焼く。体が焼失していく痛みを感じながらランサーは軽く息を吐き、笑った。それは憑き物が落ちたかのような貌であった。
「……」
ダメージの許容量を超えたのだろう。光の粒子へと体を分かれさ

せながら、ランサーの目が藤丸を捉えた。
確かに、ランサーに止めを刺したのはキャスターの魔術だ。しかし、それに至るまでの道筋を、魔術も戦闘も素人である少年が見出して指示を出した。
――貴方ならば……。
最期にランサーは藤丸に優しく微笑み、そして、消えたのだった。
「……いっちょ、あーがり」
消え行くランサーを見送ったキャスターは首を鳴らす。それを見て、戦闘終了だと考えたのだろう。マシュはキャスターへと近づく。
「あ、あの……ありがとう、ございます。危ないところを助けていただいて……」
「おう、おつかれさん。この程度貸しにもならねえ、気にすんな。それより自分の身体の心配だな。どれ……」
「ひゃん……!」
「おう、なよっとしてるようでいい体してるじゃねえか！　役得役得っと」
「ちょっと！　何してるんですか!?」
「ははは、悪ィ、悪ィ。何だ、坊主と良い仲だったか」
さりげなくマシュの柔らかな臀部を擦るキャスターを押して、藤丸は頬を赤く染めたマシュとキャスターの間に割って入る。
「と、お嬢ちゃんについてだが、どのクラスだ？　何のクラスだかまったくわからねえが、その頑丈さはセイバーか？　いや、剣は持ってねえけどよ」
そんなやり取りを呆れたような目つきで離れた所から見るオルガマリーの顔には疲労の色が浮かんでいた。
「……ちょっと、ロマニ。アレ、どう思う？」
「とりあえず事情を聞こう。どうやら彼はまともな英霊のようだし」
ロマニの声に反応したのだろう。キャスターは振り返り、映像の向こうのロマニを見つけた。
「おっ、話の早いヤツがいるじゃねえか。なんだオタク？　そいつは魔術による連絡手段か？」

「はじめましてキャスターのサーヴァント。御身がどこの英霊かは存じませんが、我々は尊敬と畏怖をもって……」
「ああ、そういう前口上は結構だ。聞き飽きた。てっとり早く用件だけ話せよ軟弱男。そういうの得意だろ？」
「うっ……そ、そうですか、では早速。……軟弱……軟弱男とか、また初対面で言われちゃったぞ……」
『気を取り直して……』と呟いたロマニは真剣な表情でキャスターを見つめる。
「実は……」
しかし、タイミングが悪かった。ロマニがカルデアについての説明をキャスターに行っている合間にも聖杯戦争は続いている。
突如、起きた爆発音が説明をしているロマニの声を遮った。その爆発は通常のものではないことを藤丸の感覚が感じ取る。
「キャスター」
「何だ？」
「何も言わずに力を貸して欲しい。仲間を助けたい」
ジッとキャスターを見つめる藤丸にキャスターは獰猛な笑みを浮かべる。
「いいねェ……男なら、そう来なくちゃいけねェ」
キャスターは拳を藤丸に向ける。間髪入れずに、藤丸もキャスターへと拳を向けた。
コツという音と共にキャスターとの間に何かが繋がった感覚を覚えた藤丸は、爆発が起きた方向へと顔を向ける。
――待っててくれ、ラフム。
そうして、藤丸は新たな仲間と冬木の街を駆けていくのだった。

8・一心不乱

―ＯＮ―

冬木の新都。その中でも最も高い建物の屋上に一人の男が佇んでいた。黒い服を着た褐色肌の男だ。白髪をビル風に揺らしながら、彼は今し方、自分が破壊した跡を何の感慨もなく見つめている。

彼の醸す雰囲気は常人のものではない。それもそのはず。彼はサーヴァントと呼ばれる存在だ。人と変わらない姿だというのにも関わらず、その戦闘力は戦闘機一機分とも言われる。事実、彼が破壊したのは高層ビル数棟にその周辺にあった中、小規模の建物。矮小なる人の姿でありながら、彼は瞬きの間に大規模破壊行為をしてみせた。

彼は弓に矢を番える。

〝弓〟そして〝サーヴァント〟という彼を露わす二つの要素。

サーヴァント・アーチャー。それが彼の正体だ。

物陰に隠れる獲物が間抜けにも姿を現すのを待つ彼だ。

アーチャーは目を細める。彼の目に映るのは赤と黒。目の前の赤い火と黒い闇に覆われた冬木の街は彼に己が主人のことを想起させた。

／／／

アーチャーはある人物に呼び出された。アーチャーが呼び出された先には黒い影が一人、佇んでいた。

洞窟の中、膨大な魔力が立ち昇る孔を見つめるアーチャーの主人は黒い甲冑を身に着けた人物だ。黒い甲冑の人物は冷徹な声で彼を叱咤する。

「遅いぞ、アーチャー」

「それは済まない。私にも色々と仕事があってね」

「キャスターは放っておけ」

「しかし……？」

主が自分の言葉を先読みすることは珍しいことではない。アーチャーの困惑はキャスターを放置するように指示した主の言葉から

だ。彼らにとって、唯一の敵であるサーヴァントのキャスター。それを放っておくように言った主人の言にアーチャーは当惑する。アーチャーのその様子を感じ取ったのだろうか。黒い甲冑の人物は振り返る。

細い金の髪と獣性を感じさせる黄金の瞳。だが、その貌はまだ年端もいかない少女だ。一種、蠱惑的且つ暴力的なカリスマ性――尤もカリスマ性は彼女と方向性を同じくしている者にしか作用することもなさそうではあるが――を感じさせる少女は目を細め、アーチャーへと宣言した。

「キャスターよりも先に仕留めなくてはならない奴が現れた」

「先に仕留めなくてはならない？　カルデアのマスターのことか？」

「いや、カルデアのマスターについては後回しでいい。それこそ、キャスターよりも、な。だが、一人……いや、一体だけ潰さなくてはならない」

「一体だけ？」

「見たら解る。行け」

「随分と辛辣な扱いだな。しかし、君がそう言うならば私は従うしかない。私は君の従者でしかないからな」

皮肉を口にしたアーチャーは肩を竦め、踵を返した。

「アーチャー」

「どうかしたか？」

去りゆくアーチャーへと声を掛けた黒い甲冑の少女は無表情ながらも、少しの迷いを見せていた。が、一度、口を閉じた彼女は常の様に力強く言葉を紡ぐ。

「武運を」

「君もな、セイバー」

主人の言を受けたアーチャーは颯爽と戦場へと繰り出すのであった。

／／／

アーチャーの唇が歪む。

通常の霊基状態の彼ならば、感情を表すことはない。特に、弓を番

えている時、彼は自己を自分で喪失させ虚無に近づくことで矢の命中率を引き上げる。
だが、今の彼は通常の彼ではない。泥に塗れ反転したアーチャーは愉しみを見つけた。
――潰すべき敵、だな。
アーチャーの鷹の瞳が影を捉える。と、間髪入れずに矢を放った。
バケモノに対し、慈悲を与えるような感情をひっくり返されたかのように、今の彼には見当たらない。
アーチャーは凄惨に嗤うのだった。

―ＯＦＦ―
壊れた壁から『トウッ』と出て走り出す。全速力で走れば、１０秒も掛からずにアーチャーの所まで行けるだろう。今は小指の先よりも小さな黒い影、遠くに見えるアーチャーだ。まあ、ラフムには小指とかないんですけどね。
ラフムがトップスピードに乗るために姿勢を低くした瞬間、ビルから赤い光が瞬いた。爪を顔の辺りに掲げると、重い衝撃を感じる。けど、構う暇はない。
爪で弾き飛ばした矢に注意を向けることなく、ラフムは足を止めずにビルの端から飛び降りる。
空中に跳び出したラフムを逃すような甘い相手じゃない。続け様に矢が何射も放たれるが、爪をしっちゃかめっちゃか振り回すことで弾き飛ばす。
ん？
矢の雨が止んだ。ラフムには矢など無駄だと思ったのだろうか？
いや、アーチャーのことだ。干将・莫耶でラフムを仕留めようという魂胆だろう。筋力Ｄの癖に。
まあ、いい。どちらにしろ、近づき易くなった。あとは、どこかから黄色い雨合羽を拾ってからエレベーターに乗って屋上まで行こう。着物も赤いジャケットもラフムの体には入らないし、それは仕方ない。諦めよう。

そんな訳で、全力で足を動かしてビルからビルへと近づいていく。大体、走り始めた場所からアーチャーの所まで半分の所まで来た。ビルの屋上を見上げる。赤い光が大きく輝いていた。

アカン。あれはアカン。

直感でしかないが、無防備に喰らったら死ぬ。ランサークラスでも死ぬ時は死ぬ。ランサーは死ぬのが役割だって？　そうかもしれないけどッ！

ラフムは足を止めて、両腕と両側腕を前に構える。腰を落として衝撃に備える準備を整えた瞬間、見つめる屋上の光が射出された。ミシリという腕。痛みに耐えながら腕を無理矢理開いて放たれた矢を弾き飛ばす。矢を弾き、再び走り出したラフムの耳に聞こえるのは空気が震えた音。どうやら、アーチャーが全力で放った矢は音速を超えていたらしい。怖い。

けど、あれだけのチャージ時間だ。もう一発、同じようなものを放つには、それ相応のチャージ時間が必要。その前に、ラフムの足ならアーチャーへと辿り着ける。

ビルの端から別のビルへと飛び移るべく、ラフムは足を曲げる。

「ｅｑｅ！」

体がぐらついた。原因は背中への衝撃。痛い。

空に投げ出されながら、首を後ろに回すと先ほど弾き飛ばしたハズの矢がラフムの背中に刺さっていた。浅くではあるものの、尖ったものが体に刺さっているという事実は精神衛生上よくない。側腕を動かして矢を取り外そうとした瞬間、矢が一際赤く輝きだす。

「３、７ｆ＠ｅ……」

ラフムの呟きは爆発音に掻き消された。背中の矢が爆発したからだ。オデノカラダハボドボドダァ！　というか、クラス相性は？　ないの？　すっごく痛いよ、これ！　こんなんなら、一人で来るんじゃなかった！

おかしい……こんなことは許されない。今回のゲームもラフムさんがガーッといってドバーッとして、『やったね、ラフムさん大勝利――！』のハズではなかったのですか!?

ぶっ飛びそうな意識をなんとか繋ぎ止めながら、上方向へとぶっ飛んでいく。壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）と呼ばれる技だ。宝具を爆弾として使うことができる技のようなもの。後ろからラフムを襲ったのは魔術で作った宝具、赤原猟犬（フルンディング）だろう。一度、放てば例え弾かれても何度でも敵を襲い続ける厄介な武器。

ラフムは意識を切り替える。

敵は強い。なら、全力で叩き潰す。

吹き飛ぶ体を素早く回転させて、ラフムは吹き飛んだ方向にあるビルの壁へと爪を突き刺して方向転換する。向かう先は上。壊れた幻想で後ろから前、つまり、アーチャーがいるビルの方向へと吹き飛ばしたのはアーチャーの慢心だ。

スピードが落ちてきた。

更に一回、二回と爪をビルに突き立てて、腕力で体を上へと弾き飛ばす。屋上が見えてきた。そして、驚愕に染まるアーチャーの顔も。

ガチリとビルの出っ張りに爪を引っかけて体を半回転させながらアーチャーの顔目がけて爪を繰り出す。しかし、それはアーチャーも予測していたのだろう。ギリギリで躱したアーチャーは魔術で創り出した手の弓を消して、新たに何かを創ろうと魔力で骨子を設定する。カウンターをしようという算段だろう。

けど、それは許さない。

ラフムの側腕が唸った。しかし、航空障害灯の光でアーチャーの顔に影が差したことで気づかれた。一瞬で身を翻してラフムの爪を避けるアーチャーを苦々しく思いながら、ラフムはアーチャーと同じビルの屋上へと降り立つ。

「貴様……」

アーチャーも苦々しくラフムを睨んでいた。その頬にはラフムの引っ掻いた傷による赤い線が一本、引かれていた。やはりと言うべきか、予想通りラフムの前に立つ男はアーチャー：エミヤだった。

「ｃｋ：Ｚｂ４ｕｚｏｔ@ｊ５ｗ@、９ｍ７０ｑｄｋ：ｙｔ@ｉ２@・ｍｋｓｇｑｅｄｗｆｅ．ｊｅｕ？」

相手は緑川光ボイスでもなくランサーでもないけど結構な面構え

な所は同じ。二槍流と二刀流な所も似てるしネ！　けど、ラフムは……悪いが四刀。
　両手と両側腕を掲げて見せる。女難の相持ちめ。１４送りにしてやる！
「何を言っているか分からんが……私と戦おうという気概は認めよう」
　アーチャーの魔力が高まる。
「Ｉ　ａｍ……うぉッ!?」
　あっぶねェ！　こいつ、いきなり宝具を使おうとしてきやがった。
慌てて爪をアーチャーへと向けるが紙一重で避けられた。
無限の剣製（アンリミテッドブレイドワークス）を使わせて、ＬＡＳＴ　ＳＴＡＲＤＵＳＴがＢＧＭで流れた後に『じゃない』とか言いながら戦ってもラフムの体は剣で出来ちゃいないから処刑用ＢＧＭ（エミヤ）は流れないと思う。
　だから、使わせない。魔術に集中する時間も与えない。けど、相手は英霊。自分の力を高め続けた英雄の現身だ。慌てたのはラフムの一撃目のみ。しかも、その一撃目も躱された。
「投影、開始（トレース　オン）」
「!?」
　余裕を取り戻したアーチャーは呟きながら魔術を発動させていく。
「工程完了（ローラルアウト）」
　させないように何度も爪を振るう。けど、避けられる。
「全投影、待機（バレット　クリア）」
　止まらない。アーチャーの後ろに次々と剣が現れていく。
「停止解凍（フリーズアウト）」
　四本全ての腕を使うが軽々とアーチャーは避けていく。
「全投影連続層写（ソードバレルフルオープン）……ッ!?」
　蹴りを繰り出したが、咄嗟に後ろへと飛んだアーチャーは上手く衝撃を逃がしたようだ。大したダメージは与えられていない。アーチャーが勝利を確信したように笑みを浮かべる。
　それもそうだろう。あの量の宝具の直撃を受けて耐えられるサーヴァントなんてスパルタクスぐらいだろう。やはり、筋肉（マッスル）は凄い。

ここまでか。
バビロニアでも同じことを思ったなと考えながらラフムは腕を下す。
「ラフム！」
「ＭＡＳＴＥＲ!?」
諦めかけた時、マスターの声がラフムの耳に届いた。顔を左へと向けると、そこにはマスターとマシュの姿。
アーチャーもマスターの姿に気が付いたようだ。しかし、まずはラフムを殺すつもりなのか投影した宝具の照準はラフムに向いたまま。
「遅い……！」
「マシュ！　第一スキル使用！」
「了解しました、マイマスター。今は脆き雪花の壁！」
飛んでくる武器に向かって爪で迎撃する。が、それは爆発した。籠める魔力が少なかったのか屋上が下に抜けるほどの爆発ではないものの、それは確実にラフムへとダメージを与えるものだった。
体に奔る衝撃。
洗濯機の中に入れられたようなそんな感覚だ。ラフムの周りで宝具が爆発している。だが、そんな絶体絶命の状況でもマスターはラフムを信じてくれていた。
「ラフム！　第一スキル使用！　けたけた笑い！」
「：ｑ：ｑ：ｑ！」
ラフムは爆発で起きた煙の中から高らかに笑う。
ＦＧＯの中では、敵単体の強化状態を解除＆防御力をダウン（３ターン）＆無敵貫通状態を自身に付与（３ターン）という効果でとても厭らしいと思ったラフムのスキルだったが、今、自分が使うとなると、とても素晴らしいものに思える。
「魔術礼装　カルデア第一スキル使用！　瞬間強化！」
敵へのデバフの次は自分へのバフ。それは鉄則だ。
マスターの魔術礼装によって、攻撃力が上がったラフムは一度、マスターと目を合わせる。
「ラフム、頼んだ」

「ｌ）４ｔｅ、ＭＹ　ＭＡＳＴＥＲ」
ラフムは右の爪を掲げてアーチャーへと迫る。アーチャーは避けるつもりはないのだろう。控えているサーヴァント・シールダーがいるため、短い時間でラフムを倒して次に備えなくちゃならないアーチャーは、ラフムの攻撃を防いだ後、ラフムを一刀の元に葬り去るという腹積もりだろう。投影した干将・莫耶がオーバーエッジ状態――刀身が伸びて鳥の羽のような細工が施される状態――になっていることからも確定的に明らか。
つまり、正面からのぶつかり合いだ。
腰を捻り、爪をアーチャーへと突き出す。それをアーチャーは双剣を交差させて防ごうとした。だが、今のラフムは身体能力がマスターにより強化されている状態。そして、今のアーチャーはラフムのスキルによって防御力という概念が弱体化されている状態だ。
ガラスが割れるような音が響き、ラフムの爪は双剣を叩き折った。そのまま、勢いを止めることなく、ラフムの爪はアーチャーの腹へと突き刺さる。
「カハッ……」
信じられないという目付きをして、ラフムを見つめるアーチャーだったが、視線を右に移して合点がいったように目を細めた。
「そうか、マスターか」
光の粒子へと変わっていくアーチャーは優しい目でマスターを見つめた。
「私は〝護りたい〟という意志がいつの間にか欠けていたようだ。皮肉なものだな。力を手に入れた故に意志を見失うとは。……ラフムとか言ったか？」
「ｃ４、ＬＡＨＭＵ」
「いいマスターを持ったな」
その言葉を最後にアーチャーの姿は消えた。
「敵性サーヴァントの消滅を確認。先輩、次はどうしますか？」
「まずは、ラフムに紹介しないと」
「そうでしたね。ラフムさん、こちらへ」

マシュが手招きをする。誰か紹介する人がいるようだ。
マスターとマシュの元に歩くと、ぐにゃりと空間がねじ曲がった。隠蔽の魔術だ。そこから出てきたのは、オルガマリーだ。魔術を使って姿を隠すことができるとは流石、所長だ。
そして、もう一人。青い服を着た男がいた。
「アイツを倒すなんて、やるじゃねェか。見た目じゃ分からねェもんだな」
「ＣＵ―ＣＨＡＮ！」
「今、なんつった？　焼くぞ」
怖ッわ……。
クーちゃん怖い。
ラフムを睨みつけるのはサーヴァント・キャスター。光の御子クー・フーリン、その人だった。

―ＯＮ―
ランサーを撃退した藤丸たちは走っていた。向かう先はビルの屋上。二段飛ばしで非常階段を駆け上がる。
脇腹が痛い。息が出来ない。だが、足は止めない。
「先輩、大丈夫ですか？」
「……ああ！」
歯を食いしばって藤丸は階段を上がっていく。
隠蔽の魔術を使って姿を隠すことを提案し、キャスターに抱えられたオルガマリーのようにマシュに抱えられた方が早く屋上に着くのだろう。しかし、それはマシュに負担を掛けてしまう。その上、自分はオルガマリーのように隠蔽の魔術を使う事なんて出来ない。文字通りお荷物になる。
それは嫌だとマシュに抱えられて階段を上るという提案に対して藤丸は首を縦には振らなかった。
非常階段は鉄製である。ならば、カンカンと靴が当たる度に音がしそうなものであるが、藤丸の耳にその音は聞こえてこない。上からは靴音以上の轟音が響いており、靴音をかき消しているからだ。そし

て、それは上の状況が逼迫したものだと考えられる。
――速く……もっと速く！
藤丸は必死に足を動かす。
かくして、藤丸の努力は報われた。屋上に辿り着いた時、藤丸のもう一人のサーヴァント、ラフムは健在だった。だが、その周りにはいくつもの剣が浮かんでおり、その切っ先は全てラフムの方を向いている。
「ラフム！」
「ＭＡＳＴＥＲ!?」
策はない。
しかし、思わずラフムを呼んだ藤丸へと――非常に分かり難いが――ラフムが驚いたように声を上げる。アーチャーも藤丸の姿に気が付いたようだ。しかし、まずはラフムを殺すつもりなのか投影した宝具の照準はラフムに向けたまま、アーチャーは冷たく言い放つ。
「遅い……！」
自分たちとカルデアのマスターの間には距離がある。盾を持つサーヴァントでも、すぐに詰めることが出来ない。そう判断したアーチャーは宙に浮かべた何本もの剣をラフムに向かって射出した。
「マシュ！　第一スキル使用！」
「了解しました、マイマスター。今は脆き雪花の壁！」
アーチャーには抜かりはなかった。
ラフムとの戦闘になる前、鷹の目で捉えた時に観察したカルデアのマスター、そして、盾のサーヴァントはどちらも素人であることを見抜いたアーチャーの計算では、彼らは何もできないと踏んでいた。
だが、彼は一つ見落としがあった。いや、通常の聖杯戦争ならば、これを見落としと言うことは出来ないだろう。
彼の見落とし、それは藤丸とマシュの成長速度にある。先ほど――ほんの数分前だ――アーチャーが彼らの姿を確認した時とは違い、藤丸とマシュにはランサーと戦ったという経験が蓄積された。その成長、たった一戦での成長を見抜くことが出来ようか？
「ラフム！　第一スキル使用！　けたけた笑い！」

「…q…q…q！」
それが出来なかったからこそ、アーチャーのラフムへの攻撃は敗北へと向かう道筋となってしまった。アーチャーが射出した剣による魔力の爆発。その向こう、爆発で起きた煙の中からラフムは高らかに笑う。
――防いだ……だと!?
「魔術礼装　カルデア第一スキル使用！　瞬間強化！」
その光景はアーチャーがいつか見た古い鏡にも似た光景で……。
驚きによる一瞬の硬直。
藤丸の魔術礼装によって、攻撃力が上がったラフムは一度、藤丸と目を合わせた。
「ラフム、頼んだ」
「l）４ｔｅ、ＭＹ　ＭＡＳＴＥＲ」
ラフムは右の爪を掲げてアーチャーへと迫る。アーチャーは避けるつもりはないのだろう。控えているサーヴァント・シールダーがいるため、アーチャーは短い時間でラフムを倒して次に備えなくてはならない。ならば、とアーチャーは両手に持つ夫婦剣に魔力を注ぐ。
アーチャーの考えはこうだ。ラフムの攻撃を防いだ後、ラフムを一刀の元に葬り去る。彼が持つ夫婦剣、彼が魔術で投影した干将・莫耶に注がれた魔力が剣の形を変える。オーバーエッジ状態――刀身が伸びて鳥の羽のような細工が施される状態――となった剣を交差させ、アーチャーは正面からラフムを睨みつける。
正面突破。
奇しくも、両者の考えは同じだった。
ラフムは腰を捻り、爪をアーチャーへと突き出す。ラフムの爪を迎え撃つアーチャーは双剣を交差させて爪を押し留めるために両腕に力を籠める。
だが、今のラフムは身体能力が藤丸の魔術礼装のスキルにより強化されている状態だ。更に、今のアーチャーはラフムのスキルによって防御力という概念が弱体化されている状態だ。
ガラスが割れるような音が響き、ラフムの爪は双剣を叩き折った。

そのまま、勢いを止めることなく、ラフムの爪はアーチャーの腹へと突き刺さる。
「カハッ……」
信じられないというように、アーチャーはラフムを見つめる。と、目の端に一人の男の姿が映った。視線を右に移したアーチャーは合点がいったように目を細める。
「そうか、マスターか」
光の粒子へと変わっていくアーチャーは優しい目で藤丸を見つめた。彼もまた、ランサーと同じように憑き物が落ちたような顔になっている。その表情を見つめ、藤丸は悲しそうに顔を歪めてアーチャーの言葉を聞く。
「私は〝護りたい〟という意志がいつの間にか欠けていたようだ。皮肉なものだな。力を手に入れた故に意志を見失うとは。……ラフムとか言ったか？」
「ｃ４、ＬＡＨＭＵ」
「いいマスターを持ったな」
その言葉を最後にアーチャーの姿は消えた。
「敵性サーヴァントの消滅を確認。先輩、次はどうしますか？」
マシュの言葉で藤丸は気を切り替えた。
「まずは、ラフムに紹介しないと」
「そうでしたね。ラフムさん、こちらへ」
マシュがラフムに手招きをする。
藤丸とマシュの近くにラフムが近づくと、ぐにゃりと空間がねじ曲がった。隠蔽の魔術だ。そこから姿を現したのは、オルガマリーとキャスターだ。
姿を現したキャスターはラフムに笑いかける。
「アイツを倒すなんて、やるじゃねェか。見た目じゃ分からねェもんだな」
「ＣＵ―ＣＨＡＮ！」
「今、なんつった？　焼くぞ」
どうやら、キャスターとラフムの相性はあまり良くないらしい。ラ

フムへと噛みつくように怒鳴るキャスターを見ながら藤丸だったが、
どう声を掛ければいいのか分からなかった。

9．光の御子

―ＯＦＦ―

ギロリとラフムを睨むクーちゃんことクー・フーリン。むっちゃ怖い。

「あの……Ｍｒ．キャスター？」

「ああ、悪ィ……。コイツの鳴き声で、ちっとばかし苦手な奴のことを思い出しちまってな」

マシュの声でクー・フーリン――今はキャスターのサーヴァントだ――は怒りを収めた。険しい顔を一転させたキャスターは笑みを浮かべる。

「オレはキャスターのサーヴァント。この冬木の聖杯戦争で呼ばれたサーヴァントだ」

名乗られたならば、返さなくてはならない。ラフムが話すことのできる数少ない単語を口にする。

「ＬＡＨＭＵ……」

「ラフム？　あり得ないだろ、それ」

ラフムの名を聞いたキャスターの顔がまた険しくなった。今度は嘘を吐いているんじゃないかとラフムを疑う顔だ。

じっとラフムを見つめるキャスターにマスターが尋ねる。

「あり得ないって、どういうことですか？」

「あ？　坊主、自分のサーヴァントについても知らねえのかよ」

「先輩はカルデアに来て、すぐに冬木にレイシフトしています。ですので、世界各地、古今東西の英雄についての知識は学ぶ時間もありませんでした」

「ま、そうなら仕方ねえか」

ラフムからマスターへと目線を移したキャスターはゆっくりと言葉を紡ぐ。

「ラフムっていやあ、バビロニア神話に出てくるモンだ」

「Ｍｒ．キャスターの言う通り、ラフムという存在はバビロニア神話の冒頭、父神アプスーと母神ティアマトから初めに産まれた神だと伝

わっています」
「それが……どうしたの？」
　マスターが首を傾げる。
「あり得ないことなんだよ。事実が伝承と違っていたとしてもだ。そこんとこはオレよりもアンタの方が詳しいだろ？」
　キャスターがオルガマリーへと目を向ける。オルガマリーがキャスターの言葉を引き取るように口を開いた。
「神話で伝わっているラフムはこんな形じゃない。いえ、キャスターの言うように事実を伝承という形で曲げていたとしても神は召喚できない。それはカルデアの召喚システムでも、冬木のサーヴァント召喚でも共通することよ。まあ、例外はあるけど」
「例外？」
「神をダウンスケールさせて、サーヴァントとして運用すること」
「ハッ……神がそんなことを受け入れる輩とは思えねえけどな」
「でも、そうとしか考えられません。ラフムが人語を扱えないことも、そのことが原因だと推測できますし」
　そもそも、神というのは気まぐれで自分の力に絶対の自信を持つ存在だ。上下姉様のように始めから力を持っていないというのならともかく、ラフムの名前が来ているバビロニア神話の〝ラフム〟は原初の神の一柱。神を産み出すこともできる神だ。相当、位が高い神が〝ラフム〟だ。そんな神が自分の力を削って人間に使役されるなんてことは、まずあり得ないこと。
　まあ、ラフムの場合はバビロニア神話の〝ラフム〟とは違う存在なんですけどね。どちらかと言えば、エルキドゥに近い存在だ。エルキドゥがガンダムだとするとラフムはザク……いや、なんか違うけど大体のニュアンスで言えば、そんな感じ。
『とにかく』と頭を振ったオルガマリーは厳しい顔付きで今後の方針を固める。
「今すべきことはラフムの正体よりも、大聖杯を手に入れること。バーサーカーは近寄らなければ大丈夫なのよね？」
「ああ。奴の通り道に出ない限りは大丈夫だ」

「なら、急ぎましょう。時間を掛ければ掛けるほど、こちらの体力は削られていく状況。この子もきつそうですし」
「フォーウ……」
お、どこに居たのやら、フォウくんがオルガマリーに抱えあげられていた。ぐでんとしたフォウくんは力なく鳴く。燃えている都市はふわもこの体は辛いのだろう。そんなフォウくん、そうオルガマリーに抱えあげられたフォウくんを見つめながらラフムは思う。
……どうせなら、ラフムよりもフォウくんに転生してマシュやぐだ子の胸元に潜り込みたかった。現実は隣にぐだ男しかいないけど。現実です……！　これが現実……！
畜生が、喰うぞ。ＨＰとＡＴＫの底上げをしちゃうぞ。
気持ちを切り替えて、息を大きく吐く。
気を取り直して情報を整理するとしよう。
この話の進みよう。ラフムがアーチャーと戦っている内に、キャスターが冬木の聖杯戦争について説明していたんだろう。大聖杯やバーサーカーについてまで話が進んでいる。ちなみに、０章クリア後、すぐにバーサーカーに凸って返り討ちにされたのは、この私ですｗｗｗ
復刻ネロ祭のバーサーカー以上の絶望を感じたね、あれは。あの時は邪ンヌもいなかったし。
バーサーカーについての説明、そして、大聖杯についての説明があった。
ということは既にマシュはクー・フーリンにセクハラされ済みか。
しまった。会った瞬間、マシュにセクハラをしておけばよかった。一番始めにマシュをマシュマシュしたかった。けど、ラフムには所長がいる。所長は冬木でお別れだし、ここでしかセクハラができない。つまり、所長の方が優先度は高い。一番槍は後輩（ディルムッド）の仕事でしょう？
ディルムッドなら土下座したら快く一番始めにマシュをマシュマシュすることを許してくれそうなのに。
光の御子め、令呪を以って命じる自害せよ。令呪ないけど。
がっくりと肩を落としたその時、ラフムの頭に天啓が舞い降りた。

逆だ、逆に考えよう。
クー・フーリンにセクハラをすればいいのではないか？
突如、舞い降りた名案。そうと決まれば、即、実行だ。アニメで上を脱いでくれたから、取り敢えず、下を脱がしてクーちゃんのクーちゃんをボロンさせよう。
そう思って、キャスターの後ろに立つ。と、肩口からこちらを睨みつけるようにキャスターの赤い目が輝いた。
「ほお……オレを試したいってことか？」
犬歯を剥き出して笑うキャスター。
「乗ってやるよ。ただし、後悔すんなよ！」
狂犬じゃん。怖い。
何か話が食い違っている……というか、完全に勘違いされているけど、弁解のための言葉をラフムは話せない訳で。
「ちょっと待った！　仲間同士で争うのはダメだ！」
「先輩の言う通りです。今は……」
「うるせえ！」
マスターかマシュに助けを求める前にマスターが助け舟を出してくれた。けど、キャスターの言葉の一撃であっという間に助け船が沈む。ラフムの体みたいに泥で出来た船だったのかもしれない。
「コイツの気持ちが分からねえなら、黙っとけ！」
ラフムの気持ちは二人と一緒なのに。戦いはダメ。痛いのは嫌い。
「それに、気づいているか？　コイツがオレと戦おうとしたのも、坊主。お前さんのためだ」
「オレ……の？」
「ああ。お前さんを護るに足る実力がオレにあるかどうかテストしたいんだろうさ。全く……見た目とは違って、いい奴じゃねえか」
すまない……。
実はパンツ降ろそうとしていただけで、本当にすまない。
むっちゃ褒められて居心地が悪い中、キャスターが杖を構える。槍の構えっぽいけど、ラフムは優しいから特に何も言わないでおく。流石はケルト式。

「坊主に嬢ちゃん。そこに突っ立ったままでいいのか？」
「え？」
「オレは全力でコイツを殺すぞ」
「!?」
「失いたくねえなら、しっかり守ってやんな」
「ッ！　マシュ！　頼む！」
「了解しました！」
マシュがラフムの前に出た瞬間、キャスターの声が響いた。
「アンサズ！」
マシュの盾に何度も火の玉が当たる。が、マシュの盾はそれを通さない。
タイミングを計って、ラフムはマシュの盾の後ろから走り出す。狙いはキャスター。取り敢えず、ラリアットをして意識を奪おうとジグザグに走り出す。
大きく左右に走って魔術による攻撃を避けたからか、キャスターは攻撃を一旦、止めて杖を持つ手に力を入れているのが見えた。真っ向勝負をしようという腹積もりだろう。
「ラフム！　止まれ！」
全ての腕を地面に刺して体を無理矢理止める。マスターの指示には従うのがサーヴァントだ。令呪を使ってないから強制力はないから自分で自分を止めるしかない。
しかし、なぜ、マスターはラフムを止めたのだろう。
と、地面が薄く光っているのに気が付いた。なるほどね、地面にルーンを刻んで地雷のようにしたんだね、分かるとも！
マシュが火の魔術（アンサズ）を防いだ一瞬の隙で、更に魔術を仕込むなんて流石はクー・フーリン。
「ラフム！　上から攻めろ！」
マスターの言う通り、跳び上がってキャスターへと迫る。
Ａｃｃｅｌ　Ｚｅｒｏ　ＯｒｄｅｒのＣＭで出てきた切嗣のようにキャスターへと上から襲い掛かるが、キャスターの杖でラフムの四本の腕による渾身の一撃は軽く受け止められた。

蟹ばさみにしとけば良かった。三條な●み監督の絵コンテならば、間違いなく蟹ばさみをしただろう。アライグマくん的に。
「アーチャーとの戦いがなけりゃ、もちっといい勝負ができたかもな」
キャスターの冷たい顔とは裏腹に杖が熱を持ち始める。
「これで倒れて！」
ナイス、マシュ！
マシュがキャスターの隙をついて、盾を振るう。キャスターはそれを軽々躱すが、同時にラフムからも距離を置いた。
地面に降りたラフムは、すかさず、マシュの腰に腕を回して全速力でその場から離れる。と、大きな火柱が背後から上がった。キャスターが仕込んでいたルーンから火が上がったのだろう。
アスファルト（アストルフォではない）を削りながら、戦闘が始まった時と同じ場所に戻る。けど、それはダメな選択だった。
「我が魔術は炎の檻、茨の如き緑の巨人。因果応報、人事の厄を清める社――倒壊するはウィッカーマン！　オラ、善悪問わず土に還りな！」
「あ……」
マシュが呆然と呟く。
先程のラフムにとって全力の攻防はキャスターにとって、ただの時間稼ぎ（NP溜め）だったのだろう。
目の前に顕現したのは木の枠組みで作られた巨大な人型。ちなみに、この人型をウィッカーマンと呼び、それはケルトのドルイド――大雑把にいうと魔術師――が行う儀式に使われる。このウィッカーマンの中に人間を閉じ込めて火を点けるという儀式だ。
ジャンヌも真っ青な儀式をやるとは、流石はケルト。スーパービッチ（メイヴ）を産み出した民族は一味も二味も違う。
ちなみに、この灼き尽くす炎の檻（ウィッカーマン）という宝具の種別は対軍宝具。ちょっと避けられないレベルで攻撃範囲が広い。
「ＭＡＳＨ……６，ｔ＠ｅ」
「ラフムさん……了解しました！」
こんな時は、私のかわいいナスビちゃんに頼るに限る。

「あああああ！」
マシュが叫びながら盾を地面に打ち付けた瞬間、盾の前に巨大な魔法陣が浮き上がった。
仮想宝具（ロード）　疑似展開（カルデ）／人理の礎（アス）。
絶対的な防御を誇るマシュの宝具だ。そうは言っても、ＦＧＯ内では無敵や回避を味方全員に与えはしない。味方全体の防御力を３ターン上昇＆ダメージカット状態を３ターン付与という今一パッとしない性能。進化しても自身以外の味方の攻撃力を上昇が追加されるぐらいなもの。
まあ、獅子王の無敵貫通相手にはマシュの宝具が他の防御系スキルに比べれば使えるものの、ラフムは高貴な家だったので、バーサーカー＋石コンテでぶっ飛ばすことができた。『バーサーカーは最強なんだから』が金平糖を齧ればできるし、ロ……ＦＧＯは最高だぜ。
「あああああ！」
マシュが叫びながら灼き尽くす炎の檻（ウイッカーマン）を防ぐ様子を横目に、ラフムは考える。
それにしても、スキップされないな。周回前提のゲームシステムを作るなら効率重視でスキップに加えてオートバトル機能までつけて欲しいものだ。骨集めで親の顔以上にスケルトンは見ているし。
２５６回ぐらいタッチしたらスキップされるかもしれないと思いついてマシュの頭を撫でる。
「ラフムさん……」
安心したような顔をするマシュ。無垢な瞳だ。
これからタッチされる場所が変えられるということを想像もしていないマシュに世間の厳しさを教えてあげようとした瞬間、目の前の炎が掻き消えた。
「宝具が使えねえって言ってた割には、やれば出来るじゃねえか、嬢ちゃん。それに、坊主もオレの魔術をよく見抜いた。……で、どうよ？　オレの力は？」
自信有り気にラフムを見るキャスターだ。
ＦＧＯをしていた時からキャスターの力は十二分に知っている。

言うことがないほどに強いレアリティ詐欺だということを知っている。強いて言えば、ストーリー召喚からしか排出されないのを直してくれたら最高。
そんな意思を籠めてニッコリと笑いかける。
「お、おう……。なあ、坊主？」
が、キャスターは引き攣った顔でマスターを呼んだ。
「はい」
「コイツの今の表情って笑顔でいいんだよな」
「当たり前じゃないですか」
「コイツの表情を読み取れるのは当たり前じゃねえよ！」
（・・ω・、）

―ＯＮ―
猛犬のような雰囲気を醸し出し、キャスターはラフムを睨む。並みの人間ならば、卒倒してもおかしくはない。しかし、キャスターが睨む相手は並みの人間ではない。サーヴァント、つまりは英霊である。人の範疇には入らない者だ。容が人とはかけ離れたモノだ。体型という形はもちろん、魂の容さえも異なるモノ。
それはいつもと変わらない表情――縦に割けた口を開け、まるで嗤うかのような表情だ――でキャスターを見つめる。
「あの……Ｍｒ．キャスター？」
「ああ、悪ィ……。コイツの鳴き声で、ちっとばかし苦手な奴のことを思い出しちまってな」
おずおずと話しかけたマシュの声でキャスター――光の御子、クー・フーリン――は怒りを収めた。険しい顔を一転させたキャスターは笑みを浮かべる。
「オレはキャスターのサーヴァント。この冬木の聖杯戦争で呼ばれたサーヴァントだ」
そう自己紹介したキャスターへ自分も言葉を返そうと口を開きかけた藤丸を止めたのは、何とも奇妙な音だ。この世のものとは思えない……何と表現していいか分からない音である。自分の後ろから聞

こえたことで藤丸はその音がラフムの声だったことに気が付いた。
「ＬＡＨＭＵ……」
「ラフム？　あり得ないだろ、それ」
　しかしながら、煩雑な音の中、微かに、そして、確かに聞き取る事のできる人語があった。どうやら、ラフムは人語を語ることが難しいものの、簡単な単語であれば、話すことが可能らしい。ラフムが自らの名を名乗ったことから考えるとキャスターの名乗りに対してラフムも名乗り返したという所か。
　と、〝ラフム〟という名を聞いたキャスターの顔が再び険しくなった。
　――嘘を吐いている。
　キャスターの表情は彼の心情を端的に表すものだ。元々、彼のサッパリとした性格上、自分の感情を完全に隠すということは特殊な事情がなければ行わない。
　じっと品定めをするように自分のサーヴァント（ラフム）を見つめるキャスターにおずおずと藤丸が尋ねる。
「あり得ないって、どういうことですか？」
「あ？　坊主、自分のサーヴァントについても知らねえのかよ」
「先輩はカルデアに来て、すぐに冬木にレイシフトしています。ですので、世界各地、古今東西の英雄についての知識は学ぶ時間もありませんでした」
「ま、そうなら仕方ねえか」
　マシュの言葉で藤丸の知識のなさに納得したキャスターは顎を擦りながら、ゆっくりと言葉を紡ぐ。
「ラフムっていやあ、バビロニア神話に出てくるモンだ」
「Ｍｒ．キャスターの言う通り、ラフムという存在はバビロニア神話の冒頭、父神アプスーと母神ティアマトから初めに産まれた神だと伝わっています」
「それが……どうしたの？」
　キャスターとマシュがお互いに理解している状況。それに置いて行かれた藤丸は首を傾げる。

「あり得ないことなんだよ。事実が伝承と違っていたとしてもだ。そこんとこはオレよりもアンタの方が詳しいだろ？」
キャスターがオルガマリーへと目を向ける。オルガマリーがキャスターの言葉を引き取るように口を開いた。
「神話で伝わっているラフムはこんな形じゃない。いえ、キャスターの言うように事実を伝承という形で曲げていたとしても神は召喚できない。それはカルデアの召喚システムでも、冬木のサーヴァント召喚でも共通することよ。まあ、例外はあるけど」
「例外？」
「その神が元々弱い権能を持たないという場合。又は神をダウンスケールさせて、サーヴァントとして運用すること」
「ハッ……神がそんなことを受け入れる輩とは思えねえけどな」
「でも、そうとしか考えられません。ラフムが人語を扱えないことも、そのことが原因だと推測できますし」
そもそも、神というのは気まぐれで自分の力に絶対の自信を持つ存在だ。バビロニア神話の〝ラフム〟は原初の神の一柱。神を産み出すこともできる神。神の中でも上位の存在だと現代にまで伝っている。
そして、そのような神が自分の力を削って人間に使役されることは有り得ない。
『とにかく』と頭を振ったオルガマリーは厳しい顔付きで今後の方針を固める。
「今すべきことはラフムの正体よりも、大聖杯を手に入れること。バーサーカーは近寄らなければ大丈夫なのよね？」
「ああ。奴の通り道に出ない限りは大丈夫だ」
「なら、急ぎましょう。時間を掛ければ掛けるほど、こちらの体力は削られていく状況。この子もきつそうですし」
「フォーウ……」
オルガマリーはフォウを抱え上げる。もこもことした毛皮が体を包むフォウだ。火災現場の中心とも言える炎上都市では体温調整が難しいのだろう。

オルガマリーに抱え上げられたフォウを見つめる藤丸とマシュの耳に微かな音が届いた。
ラフムが大きく息を吐いた音だ。
それとほぼ同時だ。キャスターの赤い目が突き刺すような視線に変わったのは。
肩口からラフムを睨みつけながらキャスターは剣呑な雰囲気を醸し出す。それは戦闘に向かう英霊の所作だ。
『何故？』
そう思い、藤丸がキャスターへと理由を尋ねようとした瞬間、キャスターが重々しく口を開いた。
「ほお……オレを試したいってことか？」
犬歯を剥き出して笑うキャスター。
「乗ってやるよ。ただし、後悔すんなよ！」
キャスターの雰囲気が一瞬にして変貌した。
それまでの頼りがいのある兄のような雰囲気から戦場に立つ戦士としての雰囲気へと瞬時に変わったのだ。
「ちょっと待った！　仲間同士で争うのはダメだ！」
「先輩の言う通りです。今は……」
「うるせえ！」
思わず声を上げた藤丸、そして、藤丸に追随するように口を開いたマシュはキャスターの一括で息を呑む。
「コイツの気持ちが分からねえなら、黙っとけ」
キャスターの一言で二人は何も言えなくなった。
ラフムが何を考えているのか分からないことが多くあった。もちろん、ラフムの奥の心は善なるものだと直感で藤丸とマシュは確信しているが、表面的な考えは非常に分かりづらい。今もそうだ。
なぜ、キャスターへとラフムが溜息をついたのか二人は全く思い至らなかった。
言葉を失った二人へとキャスターは言葉を続ける。
「それに、気づいているか？　コイツがオレと戦おうとしたのも、坊主。お前さんのためだ」

「オレ……の？」
「ああ。お前さんを護るに足る実力がオレにあるかどうかテストしたいんだろうさ。全く……見た目とは違って、いい奴じゃねえか」
犬歯を見せて笑うキャスターの様子に安心したのだろう。
「坊主に嬢ちゃん。そこに突っ立ったままでいいのか？」
「え？」
「オレは全力でコイツを殺すぞ」
「!?」
背筋が冷える。
そう、藤丸の前にいるのは歴史に名を遺した英雄、その一人。戦闘体勢に入ったクー・フーリンの前で茫洋とするなど本来は許されるべき行為ではない。クー・フーリンの優しさに甘えていたからこそ、今、息をすることを許されているということを藤丸はやっと気が付いた。
「失いたくねえなら、しっかり守ってやんな」
「ッ！　マシュ！　頼む！」
「了解しました！」
マシュがラフムの前に出た瞬間、キャスターの声が響いた。
「アンサズ！」
マシュの盾に何度も火の玉が当たる。が、マシュの盾はそれを通さない。
タイミングを計っていたのか、ラフムは一息置いてマシュの盾の後ろから走り出す。狙いを定まらせないようにとラフムは左右に大きくジグザグに走り出す。
自身の魔術による攻撃が防がれたからか、キャスターは杖を持つ手に力を入れている。そして、キャスターの様子に注目し彼の一挙手一投足を見逃さないようにしている非凡な戦闘の才を持つ者ならば、キャスターの次の攻撃は防ぐことが出来なかっただろう。
――あれは……!?
しかし、藤丸は非凡な才は持たない平凡な人間だ。
キャスターが杖を持つ手に力を入れていることに気付くことはなかったし、ラフムの動きを見切れる動体視力もなかった。

だからこそ、気づけた。
キャスターの前の地面に刻まれたルーンが光っていることに。
「ラフム！　止まれ！」
藤丸の指示は適切であった。もし、そのままラフムがキャスターへと向かっていたならば、その場でラフムは地面から湧き上がる火によって焼かれていただろう。
そして、ラフムの行動は速かった。藤丸の指示にラフムが従順に従う様子を見て、キャスターは目を細める。
――コイツらだったら……きっと……。
キャスターの思考は一瞬だけであったが、眼前の戦場から離れてしまった。その隙を突くという思考は藤丸にはない。いや、それどころか、藤丸はキャスターの僅かな変化に気付くことができない程に戦闘に対しては素人であった。
「ラフム！　上から攻めろ！」
しかしながら、全力でラフムへと指示を出す藤丸が出した答えは最適解を示すのものだった。
打てば響くというように、藤丸の指示に従ったラフムは跳び上がってキャスターへと迫る。
だが、寸前での急停止が仇となった。助走による攻撃力の向上を諦めざるを得ない状況。それは上に跳び上がり、重力加速度によって多少は賄われたものの、やはり足りない。
キャスターの杖でラフムの四本の腕による渾身の一撃は軽く受け止められた。
「アーチャーとの戦いがなけりゃ、もちっといい勝負ができたかもな」
キャスターの冷たい顔が光に照らされる。杖が熱を持ち始めた証拠だ。
そこから今にもキャスターの火の魔術（アンサズ）が放たれようとした瞬間、横槍が入れられた。
「これで倒れて！」
マシュがキャスターの隙をついて、盾を振るう。キャスターはそれを軽々躱すが、同時にラフムからも距離を置かざるを得なかった。

その隙は大きく、藤丸の素人目からしても追撃のための絶好の好機。
だが、ラフムはそうは捉えなかったらしい。
地面に降りたラフムは、すかさず、マシュの腰に腕を回して抱え上げた後、その場から離れる。と、大きな火柱が先ほどまで彼らが居た場所から上がった。
藤丸の背中に再び寒気が奔る。
――追撃の指示を出していたら……。
キャスターが仕込んでいたルーンから火が上がったのだろう。任意のタイミングで地面に仕込んだ術式を開放できるということは、先のランサーとの戦いで理解できてもおかしくはなかったというのにと藤丸は自分の見通しの甘さに歯噛みをする。
昨日まで戦闘に触れる機会がない平和な日本で暮らしてきた藤丸に戦略眼を求めるのは酷である。だが、当の本人が心から欲している。ラフムへ……そして、マシュへ自分もマスターとしての責務を全うしなければならない。そのために、全力以上で頭を、そして、心を強く保たなければいけない。
それがせめてもの彼（自分のサーヴァント）らにできる唯一のこと。
藤丸には落ち込んでいる時間はなかった。
落ちかけた顔をキッと上げ、そして、藤丸の青く大きな目が見開かれた。
「我が魔術は炎の檻、茨の如き緑の巨人。因果応報、人事の厄を清める社――倒壊するはウィッカーマン！　オラ、善悪問わず土に還りな！」
「あ……」
藤丸と同じ気持ちだったのだろう。顕現した存在に茫然としたマシュが呟く。
目の前に顕現したのは木の枠組みで作られた巨大な人型。藤丸の知識にはないことではあるが、この人型をウィッカーマンと呼び、それはケルトのドルイド――大雑把にいうと魔術師――が行う儀式に使われる。このウィッカーマンの中に人間を閉じ込めて火を点ける

という儀式だ。
その儀式を再現するかの如く、ウィッカーマンから煌々とした灯りが辺りを照らす。
火達磨になった２０ｍほどもあろうかという人型。それが独りでに動き、自分たちの方へと真っ直ぐ向かって来るのだ。
逃げ出すべきだ。しかし、どうやって？
藤丸が顔を向ける先には腰が抜けたように地面にへたり込むオルガマリーの姿。対軍宝具の開帳を目の当たりにした人間の反応としては彼女のそれは実に正しいものだった。
自分を押し潰し焼き殺さんとする巨大な塊を見て、立ち向かうことができる者は英雄、又は反英雄などと呼ばれる人の枠から逸脱した者だけであろう。
そう、英雄の力をその身に宿そうともマシュはまだ人間、小娘であった。ウィッカーマンに立ち向かえる勇気など、ほんの一片も持ち合わせていない。
「ＭＡＳＨ……６，ｔ＠ｅ」
そのハズだった。
――お願い。
そう、声が聞こえた気がした。
その声は信じていた。誰を？　藤丸を。何を？　守れると。
……誰が？　自分が！
「ラフムさん……了解しました！」
チラと守るべきものに視線を向けた後、マシュは戦うべきものに向き直り、自身を鼓舞する。
「あああああ！」
マシュが叫びながら盾を地面に打ち付けた瞬間、盾の前に巨大な魔法陣が浮き上がった。
仮想宝具　疑似展開／人理の礎。
ここに、彼女の宝具が未完成ながらも発現した。
絶対的な防御を誇るマシュの宝具だ。
「あああああ！」

マシュが叫びながら灼き尽くす炎の檻を防ぐ。
ラフムはマシュを信じているのだろう。彼女の隣から動くことはなかった。そっと腕を伸ばし、まるで壊れ物を扱うかの如く優しく彼女の頭を撫でるラフムの姿は慈愛に満ち溢れているかのように藤丸には見えたのだった。
「ラフムさん……」
安心した顔をラフムへとマシュは向ける。
これならば、キャスターの宝具を耐えられそうだとマシュは気を取り直す。先ほどまでの不安が嘘のように晴れ渡っていた。
と、マシュの心の内のように目の前に広がる炎が一瞬にして消え失せる。
「宝具が使えねえって言ってた割には、やれば出来るじゃねえか、嬢ちゃん。それに、坊主もオレの魔術をよく見抜いた」
炎が消えた向こうに立っていたキャスターが笑う。今度の笑みは快活な笑いだ。先ほどまでの獣然とした雰囲気はもうない。
戦闘終了だと言外で告げたキャスターはマシュと藤丸に続いてラフムを見遣る。
「……で、どうよ？　オレの力は？」
キャスターは自信有り気にラフムを見る。
そんなキャスターへとラフムは歯を剥き出しにして歯と歯を合わせる。
「お、おう……。なあ、坊主？」
――笑って……る……んだよ……な？
今一、自分の考えに自信を持つことが出来なかったキャスターは引き攣った顔で藤丸を呼んだ。トコトコと近づく藤丸の肩を抱き寄せて、キャスターは藤丸へと小さい声で尋ねる。
「はい」
「コイツの今の表情って笑顔でいいんだよな」
「当たり前じゃないですか」
「コイツの表情を読み取れるのは当たり前じゃねえよ！」
一転、大きな声を出したキャスターを寂しそうにラフムが見ていた

と藤丸は後日、マシュから聞くのだった。

１０．アーサー王

―ＯＦＦ―

マシュが宝具を使えるようになったよ、やったね！

本来ならお祝いするべきなんだろうけど、生憎、炎上しまくっている（比喩じゃない）冬木じゃケーキを売っている店なんてものはない。そんな冬木で出来るようなことと言えば、骨集めとダイエットのためのマラソンぐらいなもの。

つまり、冬木から一刻も早くカルデアに戻らないといけない。でも、その前に立ち塞がるのは、あのアーサー王。今でこそアーサー王と言えばセイバーが出てくるようになったけど、昔はアーサー王と言えば男が出てくるものだったのじゃ。え？　知ってる？

まあ、ともかく、冬木最大の脅威のアーサー王に立ち向かって勝って冬木の大聖杯を手に入れなくちゃいけない訳で……。

アーサー王に勝つためには体調をしっかり整えなくてはいけない。

そのための小休止をとる。マシュが用意した蜂蜜のたっぷり入ったお茶（意味深ではない）と所長のドライフルーツ（意味深ではない）を食べて準備は万全。

これは余談だけど、休憩途中で出会った黒っぽくて怪物っぽいのとは気が会いそうだったのに、所長の命令で撃破させられてしまった。ラフムは悲しい（ポロロン）

怪物っぽいのを撃破したラフムたちは洞窟の中を進む。変動座標点０号とカルデアでは定義されていた場所だ。洞窟の中を進んでいくと、とても開けた場所に出た。体育館ほどの広さだ。いや、本当に大きい。

そして、その中心には上へと魔力っぽいのが立ち上がっている大きな穴。ラフムは魔術師でも何でもないし、魔術の素養もなかったから魔力かどうかは分からない。けど、なんとなくヤバみを感じる。直感スキルとかないけど、ラフムの勘は型月限定でよく当たる。例えば、オルガマリーにビンビンに死亡フラグが立っていることを彼女のデータが出た直後に見抜いたりしたし。

と、隣にいる所長の喉がゴクリと鳴った音がラフムの耳に聞こえた。それにしても、耳は見当たらないのに、なぜ、聴覚があるのだろうか？　教えて、ティアマトベルン相談所！

ラフムがバブみとドスケベルン感を感じているのは置いといて、なぜ、所長が喉を鳴らしたのか。原因は目の前に見える大聖杯だ。

「これが大聖杯……超抜級の魔術炉心じゃない……なんで極東の島国にこんなものがあるのよ……」

呆然と呟く所長に答えるようにマスターのウェアラブル端末から音がした。Ｄｒ．ロマンだ。

「資料によると、制作はアインツベルンという錬金術の大家だそうです。魔術協会に属さない人造人間（ホムンクルス）だけで構成された一族のようですが」

「悪いな、お喋りはそこまでだ。奴さんに気付かれたぜ」

チャチャッチャ、チャッチャン！

セイバーが現れた！

ＲＰＧっぽく頭の中でＢＧＭ（エマージェンシー）を鳴らす。

皆！　サントラは予約したかい？　ラフムは勿論した。けど、サントラが発売される前にトラックに轢かれた。歩きスマホはダメ、絶対！

そんな思考を全く表に出すことなく、ラフムは洞窟の広間の中、ちょっとした丘のようになっている場所に立つアーサー王（オルタちゃん）を見上げる。第三再臨後の姿ならば、下から覗けばドレスの中まで見れたかもしれないというのに、今のオルタちゃんは第二再臨後の姿。やはり、王は人の心が分からない。

『セイバー。何も訊かずに鎧を脱げ』と宣いたい。

「なんて魔力放出。あれが、本当にあのアーサー王なのですか？」

「間違いない。何か変質しているようだけど、彼女はブリテンの王、聖剣の担い手アーサーだ。伝説とは性別が違うけど、何か事情があってキャメロットでは男装をしていたんだろう。ほら、男子じゃないと王座にはつけないだろ？　お家事情で男のフリをさせられてたんだよ、きっと。宮廷魔術師の悪知恵だろうね。伝承にもあるけど、マーリン

はほんと趣味が悪い」
「え……？」
ラフムとキャスニキを前にして、マシュとロマンが話している。
『マーリンはほんと趣味が悪い』……よく分かる。一体、マーリンにどれだけの諭吉が理想郷に永久に閉ざされたというのか。思い出したくもない。
ロマンの言葉に何度も頷きそうになった自分を止めて、オルタちゃんから目を離さないようにする。あわよくば、鎧の隙間からという感じの目線をやるが、流石はアーサー王。アヴァロンを持ってきてないのにも関わらず鉄壁だ。おい、誰だ？　絶壁って言ったのは。カリバーすっぞ。
隣でカチャリと軽く鎧が触れ合うような音がした。マシュだ。
ラフムの隣に並んだマシュも気を取り直したようにオルタちゃんを見つめる。
「あ、ホントです。女性なんですね、あの方。男性かと思いました」
『ええー？　ほんとにござるかぁ？』とマシュに言おうとしたけど、生憎、ラフムの口からは人語は出てこない。ミニクーちゃんみたいに可愛くデザインして欲しかったなとティアマトを恨むけど、あとの祭り。
仕方ないから隣のクーちゃんが話すのを聞く。
「見た目は華奢だが甘く見るなよ。アレは筋肉じゃなく魔力放出でカッ飛ぶ化け物だからな。一撃一撃がバカみてぇに重い。気を抜くと上半身ごとぶっ飛ばされるぞ」
「ロケットの擬人化のようなものですね。……理解しました。全力で応戦します」
「おう。奴を倒せば、この街の異変は消える。いいか、それはオレも奴も例外じゃない。その後はお前さんたちの仕事だ。何が起こるかわからんが、できる範囲でしっかりやんな」
と、こちらを見つめたまま動かなかったオルタちゃんの口が動いた。
「ほう……面白いサーヴァントがいるな」

「なぬ!?　テメェ、喋れたのか!?　今までだんまり決め込んでやがったのか!?」
「ああ、何を語っても見られている。故に案山子に徹していた。だが……面白い。その宝具は面白い」
　ゆっくりと、ラフムたちを威圧するようにオルタちゃんが剣を構えた。慌ててマシュが盾を構え直す。
「構えるがいい、名も知れぬ娘。まずはお前からだ。その守りが真実かどうか、この剣で確かめてやろう！　そして、その後は……貴様だ、化物」
　オルタちゃんと目があった。ライオンを思わせるような目だ。隣のクー・フーリンがランサーなら、『この人でなし』と言われようが彼を餌として彼女の前に投げ込むことをラフムは辞さない。それほどに怖い。
「化物。貴様は……貴様だけは生きては返さん」
「ラフムが何をしたって言うんだ！」
「ソレは廃さなくてはならないものだ」
「え？」
「カルデアのマスターよ。貴様の隣のソレは人類と共にはあってはならないものだ。いや、この世にあってはならないものだ」
「でも……ラフムはいい奴だ！　こんな見た目だけど、オレたちを守ってくれた。今もこうやって――」
「それが何の保証になる？　断言しよう。ソレはピクト人と同様に排除しなければならない……〝敵〟だ」
　マスターは唇を噛み締める。反論の材料を探しているのだろう。
　出会って数時間しか経っていないラフムに対して凄い信頼を覚えているマスターに首を横に振って見せる。信頼していた弟子にアゾられるいい人（うっかりさん）もいることだし……アレは信頼とか関係なくて愉悦部の部長が仕向けたようなものだとも言えそうだけれども。
　まあ、ラフムがマスターに向けた首振りの意味は『人を簡単に信用したら痛い目を見るよ』という親心のようなものだ。
「ラフム……そうだよな」

「^ ?」
「セイバー、オレはラフムを信じる！　ラフムは『自分は人類の敵じゃない』って首を振ってくれた。お前の言うことは間違っている！」
「マスターの言う通りです。見た目で判断するような方にはラフムさんのことは何一つ分かりません！」
「……まあ、なんだ。一応、オレは坊主のサーヴァントとしてやってるから、坊主の方針には従う」
　皆……ラフム、嬉しい（　*ﾟ 艸ﾟ）
　あと、キャスニキ（YARIOじゃない奴）は黙っとれ――。
「所長！　所長も言ってやってください！」
「へ？　え？　私？」
「はい！　所長です！　お願いします！」
　マスターとマシュの言葉で退けなくなったのだろう。心底、嫌そうな顔をしながら、所長も言葉を口にした。
「えっと……その……えーっと……そう！　人理を守る意志がサーヴァントにないと召喚されないからコイツは大丈夫！　……だと思う」
　全く信用されていない。ラフムは悲しい（ポロロン）
「話は平行線を辿る、か。なら、問答は終わりだ」
　剣を腰に構え直したオルタちゃんの体から黒い魔力が放出された。
　オルタちゃんの魔力（気）が高まるぅ……溢れるぅ……。
　カリバーだね、わかるとも！
「来ます……マスター！」
「ああ、一緒に戦おう！」
「はい！　マシュ・キリエライト、出撃します！」
　マシュが一歩前に出て盾を構える。それとオルタちゃんが剣を振るのは同時だった。
「エクスカリバー・モルガァァアアン！」
「マシュ！　宝具を！」
「了解しました！　宝具展開します！」
　マシュの前に巨大な魔法陣が描かれる。

「あぁあああ！」
　洞窟の中にマシュの声が響く。いやはや、こうやって聞くと女の子の悲鳴っていいものだね。青髭の旦那や龍ちゃんの気持ちが分からないでもない。漫画版にはトラウマを植え付けられたけど。あれはＲ１８Ｇじゃない？
「耐えた……か」
　少しブルーになっていると、極光が止まった。マシュが耐え切ったようだ。
　マシュの頭を撫でてあげるべきか、それとも、オルタちゃんへの攻撃を優先させるべきか悩んでいると後ろから指示が聞こえた。マスターだ。
「ラフム！　ケタケタ笑い！」
「：ｑ：ｑ：ｑ！」
「キャスター！　宝具使用！」
「応ッ！　灼き尽くす炎の檻！」
「くっ……」
　セイバーが纏う魔力が消え、それを狙ったようにキャスニキの灼き尽くす炎の檻が襲い掛かった。けど、流石は最優のセイバー。炎の巨人の攻撃をも耐え切ったが、それを予期していたかの如くマスターの指示は続いていた。
「ラフム！　即撃！」
（・ω・）「うー！（／・ω・）／にゃー！
　という感じでラフムはオルタちゃんへと爪を振り下ろす。
「キャスター！　技撃」
　キャスニキが魔力の弾を打ち出す。
「マシュ！　強撃！」
「了解しました、マイマスター」
『これで倒れて！』という掛け声と共にマシュが盾でオルタちゃんへとタックルする。
　マシュの攻撃で地面に転がされたオルタちゃんだったが、何ともないように立ち上がる。けど、その体は黄金色の粒子へと変わっていっ

ていた。なんて我慢強い方だ。
「フ……知らず、私も力が緩んでいたらしい。最後の最後で手を止めるとはな。聖杯を守り通す気でいたが、己が執着に傾(かぶ)いたあげく敗北してしまった。結局、どう運命が変わろうと、私一人では同じ末路を迎えるという事か」
「あ？　どういう意味だそりゃあ。テメェ、何を知っていやがる！」
「いずれ貴方も知る、アイルランドの光の御子よ。グランドオーダー。聖杯を巡る戦いは、まだ始まったばかりだという事をな」
　そう言い残してオルタちゃんの体は光の粒子となって消えた。
「オイ待て、それはどういう……おぉお!?」
　そして、それはキャスターも同じ。
「やべえ、ここで強制帰還かよ!?」
　彼の体も金色に光り消えていく。
「チッ、納得いかねえがしょうがねえ！　坊主、あとは任せたぜ！　次があるんなら、そん時はランサーとして喚んでくれ！」
　いい笑顔を最後に浮かべてキャスターも消えた。
「セイバー、キャスター、共に消滅を確認しました。……わたしたちの勝利、なのでしょうか？」
「ああ、よくやってくれたマシュ、藤丸くん！　所長もさぞ喜んでくれて……あれ、所長は？」
　後ろでブツブツ呟いていた所長にマスターが声を掛ける。
「所長？」
「え？　そ、そうね。よくやったわ、藤丸、マシュ。不明な点は多いですが、ここでミッションは終了とします。まず、あの水晶体を回収しましょう。セイバーが異常をきたしていた理由……冬木の街が特異点になっていた原因は、どう見てもアレのようだし」
「はい、至急回収……な!?」
　水晶体を回収しようと足を踏み出したマシュだったが、突然、足を止めて上を見上げる。それは、オルタちゃんが始めに立っていた場所と同じ場所。
「いや、まさか君たちがここまでやるとはね。計画の想定外にして、私

の寛容さの許容外だ。４８人目のマスター適正者。まったく見込みのない子どもだからと、善意で見逃してあげた私の失態だよ」
緑色の服に身を包み、柔和な微笑みを浮かべた男がそこに立っていた。

―ＯＮ―
一目で藤丸は理解した。アレはヤバイと。
燃える冬木の街を進み、目的地である変動座標点０号――自然にできた洞窟に人の手が加えられているホール――についた藤丸たちを待っていたのは〝見慣れない景色〟であった。
洞窟の中心にクレーターがある。普通ならあり得ない光景だ。クレーターができるのは、活火山が噴火して山の上の部分が吹き飛ばされる、または、宙（そら）から隕石が落ちてくるなどの非常に大きなエネルギーが動く場合のみである。
２００４年の冬木に、そのような大きなエネルギーが発生することなどは聞いたことがない。
とはいえ、それはあくまで常識の範囲内、藤丸の知り得る知識の範囲内だ。
だが、オルガマリーは違う。彼女は知っている。非常に大きなエネルギーを、２００４年の、冬木で、扱う儀式があったということを彼女は知っている。
〝聖杯戦争〟
オルガマリーの喉が鳴る音が洞窟の中に響いた。
「これが大聖杯……超抜級の魔術炉心じゃない……なんで極東の島国にこんなものがあるのよ……」
呆然と呟く彼女に答えるように藤丸のウェアラブル端末から音がした。Ｄｒ．ロマンからの通信だ。
「資料によると、制作はアインツベルンという錬金術の大家だそうです。魔術協会に属さない人造人間（ホムンクルス）だけで構成された一族のようですが」
「悪いな、お喋りはそこまでだ。奴さんに気付かれたぜ」

「!?」
キャスターの声に慌ててオルガマリーは前方へと目を凝らす。
地面から盛り上がり、まるで小山のように円状に開いたクレーターからは魔力が立ち昇っている。その魔力が放つ光をバックに人影が立っていた。逆光でその表情はよく見えない。しかしながら、その吹き出す魔力を背にした人影が醸す迫力は正しく超常のものであった。
その人影の目が黄金色に怪しく光る。
「なんて魔力放出。あれが、本当にあのアーサー王なのですか?」
キャスターから聞いた情報では、ここで待ち構える者は、あのアーサー王。英雄譚と言えば、アーサー王と円卓の騎士のことを思い浮かべることが多いだろう。しかしながら、藤丸たちの前に立つアーサー王は伝承とは違っていた。汚染されたような黒い鎧。その上……。
「間違いない。何か変質しているようだけど、彼女はブリテンの王、聖剣の担い手アーサーだ。伝説とは性別が違うけど、何か事情があってキャメロットでは男装をしていたんだろう。ほら、男子じゃないと王座にはつけないだろ? お家事情で男のフリをさせられてたんだよ、きっと。宮廷魔術師の悪知恵だろうね。伝承にもあるけど、マーリンはほんと趣味が悪い」
「え……?」
アーサー王は女だった。いや、少女と言ってもいい風貌である。もちろん、彼女が引き抜いた聖剣の影響から歳を取らない上に聖杯に呼ばれたサーヴァントであるならば、全盛期の肉体で召喚されることが多い。精神年齢で言えば、彼女がカムランの丘で没した時のものだと推察できる。
精神は乱世を駆け抜けた王。そうは言っても〝王〟という責務に押しつぶされそうな華奢な体躯である。
「あ、ホントです。女性なんですね、あの方。男性かと思いました」
だが、醸す雰囲気が騎士王の姿を大きく見せている。その佇まいは野獣とも言えそうだ。
そして、そのことを相対したキャスターは十二分に理解していた。
「見た目は華奢だが甘く見るなよ。アレは筋肉じゃなく魔力放出で

カッ飛ぶ化け物だからな。一撃一撃がバカみてぇに重い。気を抜くと上半身ごとぶっ飛ばされるぞ」
「ロケットの擬人化のようなものですね。……理解しました。全力で応戦します」
「おう。奴を倒せば、この街の異変は消える。いいか、それはオレも奴も例外じゃない。その後はお前さんたちの仕事だ。何が起こるかわからんが、できる範囲でしっかりやんな」
　と、こちらを見つめたまま動かなかった黒い騎士王の口が動いた。
「ほう……面白いサーヴァントがいるな」
「なぬ!?　テメェ、喋れたのか!?　今までだんまり決め込んでやがったのか!?」
「ああ、何を語っても見られている。故に案山子に徹していた。だが……面白い。その宝具は面白い」
　こちらを威圧するかのような緩慢な動きでアーサー王が剣を構えた。それだけだった。しかし、場に与える影響は絶大だ。息をすることすらも許されないほどの緊張感が藤丸たちを襲う。
　戦闘態勢へと移った騎士王を見たマシュが慌てて盾を構え直す。冷や汗を流すマシュをどこか懐かしそうに眺めた騎士王は竜の息吹の如き魔力放出をやや抑えた。
「構えるがいい、名も知れぬ娘。まずはお前からだ。その守りが真実かどうか、この剣で確かめてやろう！　そして、その後は……貴様だ、化物」
　マシュに向けていた厳しくも優し気な雰囲気を一転させ、敵に向けるものと変えた騎士王は鋭い目付きでラフムを見つめる。そこには一切の慈悲もなかった。従者（アーチャー）を屠った者へと向ける怒りの感情が入った視線ではない。それは義務感、使命感という感情から来る視線だ。
　世界のため、人類のため騎士王は聖剣を持つ手に力を籠める。
「化物。貴様は……貴様だけは生きては返さん」
「ラフムが何をしたって言うんだ！」
　藤丸立香という人間は自分の従者（ラフム）へと謂れのない感情を向けられ

て黙っていられるような人間ではなかった。
「ソレは廃さなくてはならないものだ」
「え？」
　声を大にして騎士王へと食って掛かる藤丸だったが、冷静な騎士王の声に藤丸は面食らう。それは騎士王の性質が伝承とは違っていたとしても、彼女の判断には合理性があるのだと藤丸に思わず考えされるような声色だった。
「カルデアのマスターよ。貴様の隣のソレは人類と共にはあってはならないものだ。いや、この世にあってはならないものだ」
　しかし、藤丸も引くことはできない。なぜなら、自分たちの窮地を救ってくれた友の命が狙われているのだ。マスターとしてではない。ラフムの友だと自負している藤丸にとって、今の状況は見過ごせる訳がなかった。
「でも……ラフムはいい奴だ！　こんな見た目だけど、オレたちを守ってくれた。今もこうやって――」
「それが何の保証になる？　断言しよう。ソレはピクト人と同様に排除しなければならない……〝敵〟だ」
　そうであるから、藤丸は必死に騎士王を説得しようとしたのだ。だが、それは無意味に終わった。そもそも、キャメロットで一癖も二癖もある騎士たちを纏め上げた騎士王にとって、藤丸の感情論が先だった説得など児戯に等しい。彼女を納得させるには完璧な理論で以てラフムが無害であることを証明しなければならなかった。
　たった数度、藤丸たちを救ったからと言って、それがラフムを信頼できる保証にはならない。初めは信用させ、信頼させ、依存させ、そして、最後に取返しのつかない状況に陥れた所で裏切る。そのような話が古今東西にあるのだから。
　だが、それは違うというようにラフムは首を振った。
　――自分は人類の敵じゃない。
　言葉にせずとも解る。その通りだ。何をオレは迷っていたんだ？
「ラフム……そうだよな」
「^？」

「セイバー、オレはラフムを信じる！　ラフムは『自分は人類の敵じゃない』って首を振ってくれた。お前の言うことは間違っている！」
「マスターの言う通りです。見た目で判断するような方にはラフムさんのことは何一つ分かりません！」
力強く宣言する藤丸とマシュ。
二人に続いて――渋々といった様子ではあるが――キャスターも頷いた。
「……まあ、なんだ。一応、オレは坊主のサーヴァントとしてやってるから、坊主の方針には従う」
と、藤丸はオルガマリーへと顔を向ける。
「所長！　所長も言ってやってください！」
「へ？　え？　私？」
「はい！　所長です！」
藤丸に続いてマシュもオルガマリーへと振り返りながら言葉を掛ける。
彼らの言葉で退けなくなったのだろう。心底、嫌そうな顔をしながら、オルガマリーも口を開いた。
「えっと……その……えーっと……そう！　人理を守る意志がサーヴァントにないと召喚されないからコイツは大丈夫！　……だと思う」
一度、目を閉じた騎士王はゆっくりと、その瞼を持ち上げる。
「話は平行線を辿る、か。なら、問答は終わりだ」
剣を腰に構え直した騎士王の体から黒い魔力が放出された。
「来ます……マスター！」
「ああ、一緒に戦おう！」
「はい！　マシュ・キリエライト、出撃します！」
マシュが一歩前に出て盾を構える。それと騎士王が剣を振るのは同時だった。
「エクスカリバー・モルガァァァアン！」
「マシュ！　宝具を！」
「了解しました！　宝具展開します！」

マシュの前に巨大な魔法陣が描かれる。
「あぁあああ！」
洞窟の中にマシュの声が響く。常人、いや、サーヴァントであっても正面から騎士王の宝具を受けて耐えられる者はほぼいない。だからこそ、アーサー王は常勝の王と讃えられたのだから。
「耐えた……か」
しかし、マシュの展開した宝具は騎士王の宝具を正面から受けたにも関わらず、その威力を完全に押し留めた。だが、マシュの疲労は相当のもの。
だからこそ、藤丸は〝信頼できる〟自身のサーヴァントへと指示を下すのであった。
「ラフム！　ケタケタ笑い！」
「：q：q：q！」
「キャスター！　宝具使用！」
「応ッ！　灼き尽くす炎の檻！」
「くっ……」
セイバーが纏う魔力が消え、それを狙ったようにキャスターの宝具灼き尽くす炎の檻が襲い掛かった。だが、先のランサー以上に騎士王の対魔力は高かったようだ。
炎の巨人の攻撃をも耐え切ったが、それを予期していたかの如く藤丸の指示は続いていた。
「ラフム！　即撃！」
「キャスター！　技撃」
そして、藤丸は最後の指示を隣にいた少女へと下した。
「マシュ！　強撃！」
「了解しました、マイマスター」
『これで倒れて！』という掛け声と共にマシュが突撃する。騎士王の右手が微かに動いた。そして、その動きは指揮官である藤丸、そして、歴戦の猛者であるキャスターの死角。マシュの盾に阻まれて彼らには見えない位置だ。
――未熟だな。

だが、騎士王は迎撃の準備を整えていながらも騎士王の体はそれ以上、動くことはなかった。
マシュの全力の攻撃が阻まれることなく騎士王へと当たる。受け身を取る事もなく、地面に転がされた騎士王だったが、何ともないように立ち上がった。
「……」
だが、その体は黄金色の粒子へと解かれていく。自分の手を見て、敗北を悟ったのだろう。
「フ……知らず、私も力が緩んでいたらしい。最後の最後で手を止めるとはな。聖杯を守り通す気でいたが、己が執着に傾(かぶ)いたあげく敗北してしまった。結局、どう運命が変わろうと、私一人では同じ末路を迎えるという事か」
「あ？　どういう意味だそりゃあ。テメェ、何を知っていやがる！」
「いずれ貴方も知る、アイルランドの光の御子よ。グランドオーダー。聖杯を巡る戦いは、まだ始まったばかりだという事をな」
そう言い残して騎士王の体は光の粒子となって消えた。
「オイ待て、それはどういう……おぉお!?」
そして、それはキャスターも同じ。
「やべえ、ここで強制帰還かよ!?」
彼の体も金色に光り消えていく。
「チッ、納得いかねえがしょうがねえ！　坊主、あとは任せたぜ！　次があるんなら、そん時はランサーとして喚んでくれ！」
笑顔を最後に浮かべてキャスターも消えた。
残されたのは藤丸と彼のサーヴァント、そして、オルガマリーのみ。
「セイバー、キャスター、共に消滅を確認しました。……わたしたちの勝利、なのでしょうか？」
「ああ、よくやってくれたマシュ、藤丸くん！　所長もさぞ喜んでくれて……あれ、所長は？」
後ろでブツブツ呟いていたオルガマリーへと藤丸が声を掛ける。
「所長？」
「え？　そ、そうね。よくやったわ、藤丸、マシュ。不明な点は多いで

すが、ここでミッションは終了とします。まず、あの水晶体を回収しましょう。セイバーが異常をきたしていた理由……冬木の街が特異点になっていた原因は、どう見てもアレのようだし」
「はい、至急回収……な!?」
水晶体を回収しようと足を踏み出したマシュだったが、突然、足を止めて上を見上げる。それは、騎士王が始めに立っていた場所と同じ場所。
「いや、まさか君たちがここまでやるとはね。計画の想定外にして、私の寛容さの許容外だ。４８人目のマスター適正者。まったく見込みのない子どもだからと、善意で見逃してあげた私の失態だよ」
緑色の服に身を包み、柔和な微笑みを浮かべた男がそこに立っていた。

11．強制終了

―ＯＦＦ―

いつの間に現れたのだろうか？　立ち上がる魔力の前に居た緑色の服を着込んだ男が冷たい目付きでラフムたちを見下ろす。しかし、目付きとは裏腹に、その顔は笑顔のままだ。

彼に見覚えのあったマシュが声を上げる。

「レフ教授!?」

「レフ!?　レフ教授だって!?　彼がそこにいるのか!?」

「うん？　その声はロマニ君かな？　君も生き残ってしまったのか。すぐに管制室に来て欲しいと言ったのに、私の指示を聞かなかったんだね。まったく……」

柔和な笑みが醜悪な笑みに変わった。

「……どいつもこいつも統率のとれていないクズばかりで吐き気が止まらないな。人間というものはどうしてこう、定められた運命からズレたがるんだい？」

危険を感じる声。『そうだろう？』と言うようにマスターを見下す彼の視線。ついでに言うと、マスターの近くに戻っていたラフムを蟲でも見るかのような目付きを一瞬だけ向けてきた。外見だけで判断しやがって……。ＣＶ的に死んだ魚のような目だったら許せたというのに。

素早くマシュが前に出て盾を構える。

「――！　マスター、下がって……下がってください！　あの人は危険です……あれは、わたしたちの知っているレフ教授ではありません！」

が、状況判断ができない者が一人いた。

マシュの注意も聞かず飛び出す影。オルガマリーだ。

「レフ……ああ、レフ、レフ、生きていたのねレフ！　良かった、あなたがいなくなったらわたし、この先どうやってカルデアを守ればいいか分からなかった！」

「所長！　いけません、その男は……！」

マシュの制止も耳に入れずにオルガマリーは緑色の服の男、レフ・ライノールへと駆け寄って行く。
「やあ、オルガ。元気そうでなによりだ。君もたいへんだったようだね」
「ええ、ええ、そうなのレフ！　管制室は爆発するし、この街は廃墟そのものだし、カルデアには帰れないし！　予想外の事ばかりで頭がどうにかなりそうだった！　でもいいの、あなたがいれば何とかなるわよね？　だって、今までそうだったもの。今回だってわたしを助けてくれるんでしょう？」
「ああ。もちろんだとも。本当に予想外のことばかりで頭にくる。その中でもっとも予想外なのが君だよ、オルガ。爆弾は君の足元に設置したのに、まさか生きているなんて」
「――、え？　……レ、レフ？　あの、それ、どういう、意味？」
「いや、生きている、というのは違うな。君はもう死んでいる。肉体はとっくにね。トリスメギストスはご丁寧にも、残留思念になった君をこの土地に転移させてしまったんだ。ほら、君は生前、レイシフトの適性がなかっただろう？　肉体があったままでは転移できない。わかるかな。君は死んだ事ではじめて、あれほど切望した適性を手に入れたんだ。だから、カルデアにも戻れない。だって、カルデアに戻った時点で、君のその意識は消滅するんだから」
「え……え？　消滅って、私が……？　ちょっと待ってよ……カルデアに、戻れない？」
「そうだとも。だがそれではあまりにも哀れだ」
ニッコリとオルガマリーだけを見つめて親愛を表すように笑うレフ。改めて言うけど、表情とは裏腹に彼の目付きは冷たい。
「生涯をカルデアに捧げた君のために、せめて今のカルデアがどうなっているか見せてあげよう」
手に聖杯を引き寄せたレフの背後の空間が歪んだ。そこには真っ赤な巨大地球儀、カルデアスの姿。
「な……なによあれ。カルデアスが真っ赤になってる……？　嘘、よね？　あれ、ただの虚像でしょう、レフ？」

「本物だよ。君のために時空を繋げてあげたんだ。聖杯があればこんな事もできるからね。さあ、よく見たまえアニムスフィアの末裔。あれがおまえたちの愚行の末路だ。人類の生存を示す青色は一片もない。あるのは燃え盛る赤色だけ。あれが今回のミッションが引き起こした結果だよ。良かったねぇマリー？　今回もまた、君のいたらなさが悲劇を呼び起こしたワケだ！」
「ふざ――ふざけないで！　わたしの責任じゃない、わたしは失敗していない、わたしは死んでなんかいない……！　アンタ、どこの誰なのよ!?　わたしのカルデアスに何をしたっていうのよぉ……！」
「アレは君の、ではない。まったく――最期まで耳障りな小娘だったなぁ、君は」
　と、オルガマリーの体がレフの腕の動きと共に空中に浮いた。
「なっ……体が、宙に――何かに引っ張られて――」
「言っただろう、そこはいまカルデアに繋がっていると。このまま殺すのは簡単だが、それでは芸がない。最後に君の望みを叶えてあげよう」
　弱者を虐げる愉悦を感じさせる笑みでレフは宣言する。
「君の宝物とやらに触れるといい。なに、私から慈悲だと思ってくれたまえ」
「ちょっ――なに言ってるの、レフ？　わたしの宝物って……カルデアスの、こと？　や、止めて。お願い。だってカルデアスよ？　高密度の情報体よ？　次元が異なる領域、なのよ？」
「ああ。ブラックホールと何も変わらない。それとも太陽かな。まあ、どちらにせよ。人間が触れれば分子レベルで分解される地獄の具現だ。遠慮なく、生きたまま無限の死を味わいたまえ」
「いや――いや、いや、助けて、誰か助けて！　わた、わたし、こんなところで死にたくない！　だってまだ褒められてない……！　誰も、私を認めてくれていないじゃない……！　どうして!?　どうしてこんなコトばっかりなの!?　誰もわたしを評価してくれなかった！　みんなわたしを嫌っていた！　やだ、やめて、いやいやいやいやいやいや……！　だってまだ何もしていない！　生まれてからずっ

と、ただの一度も、誰にも認めてもらえなかったのに――！」
――トウッ！
ブシュッと水風船を針で突っついた時のような音がする。それはラフムの手元からの音だ。更にいうと、目の前の男の体がビクンビクンとしている。気配遮断スキルなんてものは持っていないけど、オルガマリー（デコイ）に注目していたレフの後ろに回り込むなんてのは簡単だった。洞窟の薄暗さとラフムの体の色が合っていたことも幸いしたしネ。
「カッ……ああ……クカッ……」
右前腕で聖杯（水晶体）を取りながらラフムは口を開く。
「９：ｅｕ６ｐ０ｗ@ｒ」
我が師よ（師じゃないけど）。もとより石以外の配布に期待などしておりませんので。
アゾット剣じゃなく、ラフムの腕がレフの胸を貫いていた。そもそも、オルガマリーに視線を向けていたレフだ。ラフムの姿なんて文字通り目に入らなかった。多分、レフはオルガマリーを殺す時に狂気を見せることでラフムたちが動けなくなると考えたのだろうけど、考えが甘い。チョコラテぐらい甘い。
お約束？　知らんなァ！
そんな感じで、上に浮かぶオルガマリーに気を取られているレフにそっと近づき、後ろから左前腕の爪をレフの背中に突き刺した訳だ。敵の前で慢心するとは……。
「ｑ０：」
「貴ッ様……」
「!?」
怖ッ！
胸を爪で貫いているのに、言葉を発したレフは怖かった。
うおおおお、幽霊こわい――！　こわい――！　こわい――！
多分、理系で更に顔芸までしてくるレフが怖い。裸で豹と戦えるラフムでも、胸を貫かれて口から血を流して振り返るレフは怖かった。
感情のままに腕を振り切る。

ぐしゃりと嫌な音がしたと同時に赤い染みが洞窟の中に広がった。ラフムが腕を振ってレフの体が吹き飛ばされた後に壁にぶつかったんだね、わかるとも！

罪悪感を覚えるものの、上から絹を裂くような音で意識を切り替える。レフの魔術で浮き上がった所長だ。レフの魔術が止まれば落ちるのは当然だろう。事実、繋がった空間の縁は縮んでいるし、その向こうには所長が落ちている姿が目に映った。

「ラフム！　所長を！」

一瞬の迷い。マスターとマシュを特異点に残して置くことと、所長を怪我なく受け止めることを天秤に掛けた瞬間、マスターの声がラフムの耳に届いた。

「３ｅ—@６６６６！」

『なあ、優勝したら一緒に暮らさないか』とオルガマリーに言った覚えはないしデコトラに乗ってもいないけど、どこまでも落ちていくオルガマリーになんとなく既視感を覚える。

既視感を振り切り、地面を蹴った。マスターの指示に従い、閉じていく時空の孔に飛び込み落ち行くオルガマリーの体を優しく受け止める。ザビ子を受け止めた無銘みたいに『すまない、救出が遅くなった。これに懲りたら単独行動は控えたまえ』と言って……ダメだ、結局、殴られる。悲しいです……なんでみんな幸せになれないんでしょうね……。

何のことか分からない人は、そのまま聞き飛ばしてくださぁーい（ロリブルマ並感）

オルガマリーの体を抱えてシュタッと地面に降り立った。

腕の中のオルガマリーも無事だ。ショックを受けた顔をしているものの、サルベージをしなくても救えたので、よしとしてくれることだろう。

ラフムが降りた先はカルデアだ。カルデアスがあるレイシフトするための部屋。地面は罅割れそこかしこにある陥没には水が溜まっている。ぶっちゃけ、酷い状況。

だけど、レフのテロによる火事は収められたのか火は消えていて安

全そうだ。
「所長！」
腕からオルガマリーを下すと同時にカルデアのスタッフが駆け寄ってきた。Ｄｒ．ロマンでもダ・ヴィンチちゃんでもない。レフの攻撃から生き残った２０余名の内のＦＧＯでは名も語られることもなかった一人だろう。
駆け寄ってきたスタッフに何も言葉を返さずにオルガマリーはガタガタと震えている。それも仕方のないことだろう。信じていた人に裏切られて、更に残酷な殺され方をされそうになったのだ（余談ではあるが彼女はもう死んでいる）。
スタッフへ返事もできないのも妥当であることだろう。
けど、逆に考えるとこれはチャンスだ。
傷心のオルガマリーを慰める→撫でる→ステキ！　抱いて！→ラフムさん、大勝利
そんな計算式を頭の中で組み上げたラフムはオルガマリーに向かって右前腕を伸ばす。歯を鳴らしてカルデアのスタッフの注目を集めようとしたけど、逆に一歩後ろに退かれた。私は悲しい（ポロロン）
しかし、光の粒子になっていくオルガマリーを救うためには、スタッフさんに頑張って貰わなくちゃ困る。
そんな訳で、右前腕に引っ掛けている黄金色の水晶体、聖杯をスタッフに見せてオルガマリーに視線を向けた後、歯をカタカタ鳴らす。
聖杯を使ってオルガマリーを救って欲しいという意志表示だ。
しかしながら、スタッフはとても悲しそうな顔を浮かべてオルガマリーの前に跪く。
「所長。申し訳ございません」
「……」
「我々には所長を救う手立てがありません」
……え？　嘘だ。だって、聖杯があるし。
歯をカタカタ鳴らした後、首を横に振る。しかし、スタッフの答え

は首を横に振り返すというものだった。
「この聖杯は魔力リソースでしかない物体です。伝説で語られるように万能の力を持つようなものではありません。そして、今の所長の状態は残留思念というべきもの。死亡している状態です。所長を助けるには、生き返らせるという奇跡が必要になりますが、その奇跡を実現させるためには魔法であっても、できないことです」
「２６４……」
思わず、フォウくんみたいな鳴き声が口から出てしまってスタッフの意見を否定したラフムとは裏腹に、所長は唇を噛み締めながらもスタッフの意見に頷いた。
「ええ、分かっています。分かっているのよ。けど、けど！　なんで私が！　なんで！　なんでレフが！　なんで私がレフに殺されなくちゃならないのよ！　信じてたのに！　信じてたのに！　……信じてたのに！」
嗚咽混じりに言葉を繋げるオルガマリーに何も言えなかった。正直、彼女の命を聖杯で簡単に救えると思っていた。現実は非情である。
薄くなっていくオルガマリーの体。せめて、彼女の精神だけは安らかになるようにと彼女の肩を軽く叩く。
「何よ？」
すすり泣きながら振り返るオルガマリーへとラフムは上を指し示す。ラフムの腕が指すのは真っ赤に染まった巨大地球儀、カルデアスだ。
アニメ版では思わず愉悦を感じれなくなるぐらいドン引きな凄い悲鳴を上げていたほどに痛そうなカルデアスタッチを決めなくて、まだ幸運だったとオルガマリーに示した。
と、オルガマリーの顔が変わる。これまでの泣き顔から一転して戦う人の表情だ。
「通信を開きなさい」
「え？」
「早くしなさい！　私には時間がないの！」

「は、はい！」
スタッフは手に付けたウェアラブル端末を操作して、通信画面を開く。空中に浮かび上がるのは色々な作業をしているカルデアのスタッフたちの映像だ。
「全スタッフに通達！　これから、私はカルデアからいなくなります！　ええ、分かっているでしょう？　私は死んでいるのですから！　だから、これは所長としての最後の命令（ラスト・オーダー）！　我々の最後の希望、藤丸立香を全力で……全力以上でサポートしなさい！」
オルガマリーは右腕を大きく振って見せる。
「逃げることは許しません。負けることは許しません。世界の命運は貴方たち一人一人の肩に掛かっているのですから。一人として欠けることなく世界を救いなさい！」
次いで、オルガマリーは一つの映像の画面に着目した。
「ロマニ・アーキマン！　貴方にカルデアの全権を任せます。私の後任として役目を果たしなさい！　以上です！」
空中の映像の一つ、Ｄｒ．ロマンが映る映像。ゆるふわ系三十路男子のロマニが真剣な表情でオルガマリーを見つめ返す。
「人理継続機関フィニス・カルデア〝所長〟、オルガマリー・アニムスフィア。貴女の命令（オーダー）は必ず果たしてみせます」
空中に浮かんだ数々の映像。ロマニの声に頷いた通信先のたくさんのカルデアのスタッフたち――幾名かはオルガマリーの命令を守って作業をしっかりと続けている者もいる――が敬礼をしていた。
それは、オルガマリーを認めたという所作だ。
そのことに気が付いたのだろう。
呆けたように一瞬、目を大きく開けた後、オルガマリーは何度も頷き、そして、嬉しそうに涙を流している。
と、袖で涙を拭ったオルガマリーはラフムに振り返った。
「ラフム。アナタがカルデアスを示すことがなければ、〝所長〟として命を下すことがなかった。それに、私が認められることもなかった。……ありがとう」
その言葉を最後に、オルガマリーの体は金色の粒子になって消えて

しまった。
遺されたのは彼女に使うことのできなかった聖杯という名のレベル上限の限界突破アイテムのみ。なんともやるせない心持ちだ。
「ラフム、ありがとう」
項垂れていると目の前のスタッフの端末から空中に描かれた映像にいるロマンに声を掛けられた。ロマンに顔を向けて首を傾げる。何か礼を言われることをした覚えはない。オルガマリーを救えなかったし。
「君のお陰で冬木の特異点は修復された。君があのアーチャーを倒してなかったらと考えると、藤丸くんたちにより大きな危険が襲っていたかもしれない。君の行動が彼らを救った」
「ＭＡＳＴＥＲ……ＭＡＳＨ……」
「ああ、心配しなくても大丈夫。藤丸くんとマシュはレイシフトから……無事帰還した。今はバイタルチェックをしている最中だけど、パッと見た所、特に問題はなさそうだしね」
「９ｔｚｑ」
「うん、君の言葉は分からないけど気持ちは解った。二人とも無事で本当に良かった。それに、〝所長〟も君に救われた」
もう一回、ロマンに首を傾げる。
「〝オルガマリー〟の独白を聞いていて思ったよ。思い知らされたという方が正しいかな？　カルデアスタッフは誰一人として彼女を理解しようともしていなかった。カルデアの所長という立場から皆、彼女のことを所長としてあるべきだと考えていたんだろうね。そして、そのことはオルガマリー・アニムスフィアという女性も同じ考えだった。カルデアの所長として相応しい人物でなければならないと行動していた。彼女も彼女のことを認めてあげることが出来なかったんだと思う」
『けど……』とロマンは続ける。
「君は違った。君だけはオルガマリーという人物を見ていた。所長という肩書もアニムスフィア家という家名も関係なく、オルガマリーを見ようとしていた。そして、彼女にカルデアスを示すことで、彼女が

心の底から何をしたかったのか思い起こさせた。それが、マリーのじゃなくてカルデアの所長としての行為だというのは皮肉なものだけど」

少し寂しそうに笑ったロマン。

「〝オルガマリー〟が最後に選択したのは自分の遺し方。彼女は〝所長〟としての最後を遺した。彼女の遺志を継ぐ覚悟を、彼女を認めたボクたちカルデアの全スタッフにさせてね。だから、全スタッフを代表して、改めて君に言おう」

椅子から立ち上がったロマンは深々と頭を下げる。

「ラフム、ありがとう」

その言葉はまだ早い。

聖杯を掲げ、赤く染まったカルデアスへと顔を向ける。

「そうだね。これから、何度も君には戦って貰わなくちゃならない。ありがとうというのは早かったかな。じゃあ、こう言わせて貰うよ。ラフム、これからもよろしく」

『前に進むのをやめたらそこで終わりですもの』

オルガマリーの声がしたような気がした。

これから先、辛く怖い戦いの日々に巻き込まれていくのだろう。けど、立ち止まらない。その勇気。それが、オルガマリーからラフムに遺されたものだと思うから。

力強くロマンに頷いた。

―ON―

その目は冷たかった。もはや、この世の者とは思えない。藤丸は生唾を飲み込む。

その者は冷たかった。纏う空気が違う。藤丸は目を大きく開く。

そこに立つモノは異形を内包した人のカタチだった。

緑色の服を着込んだ男が冷たい目付きで藤丸たちを見下ろす。しかし、目付きとは裏腹に、その顔は笑顔のままだ。

彼に見覚えのあったマシュが声を上げる。

「レフ教授!?」

レフ・ライノール。
カルデア随一の技師である男だ。そして、その男はここに居てはならない存在だった。
「レフ!?　レフ教授だって!?　彼がそこにいるのか!?」
ロマニが声を上げる。
爆発が起きた時、管制室に居たレフの生存は絶望的だとロマニは先に語っていた。だというのに、レフは藤丸たちの前に、そして、余りにも不可思議なタイミングで顕れた。疑うなという方が無理な話だろう。
自分の存在をロマニへと確認させるためにレフは口を開く。
「うん?　その声はロマニ君かな?　君も生き残ってしまったのか。すぐに管制室に来て欲しいと言ったのに、私の指示を聞かなかったんだね。まったく……」
レフの柔和な笑みが醜悪な笑みに変わった。
「……どいつもこいつも統率のとれていないクズばかりで吐き気が止まらないな。人間というものはどうしてこう、定められた運命からズレたがるんだい?」
危険を感じる声。『そうだろう?』と言うように藤丸を見下す彼の視線。レフは順々に下にいる者たちへと視線を向ける。一瞬だけマシュへと憐憫の目を向けたレフの視線はオルガマリーを通り過ぎ、最後にラフムを蟲でも見るかのような目付きを寄越す。
マシュの背筋が凍った。
焦燥に駆られながらもマシュは前に出て盾を構える。
「――!　マスター、下がって……下がってください!　あの人は危険です……あれは、わたしたちの知っているレフ教授ではありません!」
が、状況判断ができない者が一人いた。
マシュの注意も聞かず飛び出す影。オルガマリーだ。
「レフ……ああ、レフ、レフ、生きていたのねレフ!　良かった、あなたがいなくなったらわたし、この先どうやってカルデアを守ればいいか分からなかった!」

「所長！　いけません、その男は……！」
　マシュの制止も耳に入れずにオルガマリーは緑色の服の男、レフ・ライノールへと駆け寄って行く。
「やあ、オルガ。元気そうでなによりだ。君もたいへんだったようだね」
「ええ、ええ、そうなのレフ！　管制室は爆発するし、この街は廃墟そのものだし、カルデアには帰れないし！　予想外の事ばかりで頭がどうにかなりそうだった！　でもいいの、あなたがいれば何とかなるわよね？　だって、今までそうだったもの。今回だってわたしを助けてくれるんでしょう？」
「ああ。もちろんだとも。本当に予想外のことばかりで頭にくる。その中でもっとも予想外なのが君だよ、オルガ。爆弾は君の足元に設置したのに、まさか生きているなんて」
「――、え？　……レ、レフ？　あの、それ、どういう、意味？」
「いや、生きている、というのは違うな。君はもう死んでいる。肉体はとっくにね。トリストメギスはご丁寧にも、残留思念になった君をこの土地に転移させてしまったんだ。ほら、君は生前、レイシフトの適性がなかっただろう？　肉体があったままでは転移できない。わかるかな。君は死んだ事ではじめて、あれほど切望した適性を手に入れたんだ。だから、カルデアにも戻れない。だって、カルデアに戻った時点で、君のその意識は消滅するんだから」
「え……え？　消滅って、私が……？　ちょっと待ってよ……カルデアに、戻れない？」
「そうだとも。だがそれではあまりにも哀れだ」
　今度はオルガマリーだけを見つめて親愛を表すようにレフは嗤う。
「生涯をカルデアに捧げた君のために、せめて今のカルデアがどうなっているか見せてあげよう」
　と、レフが手を掲げる。その手に吸い寄せられるかのように地面に放置されていた金色の水晶体――聖杯――が独りでに浮かび上がった。
　手に聖杯を引き寄せたレフの背後の空間が歪んだ。そこには一面、

赤色に染まった巨大地球儀、カルデアスの変わり果てた姿があった。
「な……なによあれ。カルデアスが真っ赤になってる……？　嘘、よね？　あれ、ただの虚像でしょう、レフ？」
　それは人類の生存が否定された証拠。それはアニムスフィア家の理想が否定された証拠。
　唇を震わせながら『嘘』だという希望に満ちた言葉をレフから引き出そうと、オルガマリーは焦点の合わない目でレフを見つめる。
「本物だよ。君のために時空を繋げてあげたんだ。聖杯があればこんな事もできるからね。さあ、よく見たまえアニムスフィアの末裔。あれがおまえたちの愚行の末路だ。人類の生存を示す青色は一片もない。あるのは燃え盛る赤色だけ。あれが今回のミッションが引き起こした結果だよ。良かったねぇマリー？　今回もまた、君のいたらなさが悲劇を呼び起こしたワケだ！」
　だが、レフはその希望を悪魔の如く嘲笑う。
「ふざ――ふざけないで！　わたしの責任じゃない、わたしは失敗していない、わたしは死んでなんかいない……！　アンタ、どこの誰なのよ!?　わたしのカルデアスに何をしたっていうのよぉ……！」
　限界だったのだろう。ヒステリックに叫ぶオルガマリーを心底、嫌そうな表情を浮かべて見つめるレフはそっと言葉を口にする。
「アレは君の、ではない。まったく――最期まで耳障りな小娘だったなぁ、君は」
　と、オルガマリーの体がレフの腕の動きと共に空中に浮いた。
「なっ……体が、宙に――何かに引っ張られて――」
「言っただろう、そこはいまカルデアに繋がっていると。このまま殺すのは簡単だが、それでは芸がない。最後に君の望みを叶えてあげよう」
　弱者を虐げる愉悦を感じさせる笑みでレフは宣言する。
「君の宝物とやらに触れるといい。なに、私から慈悲だと思ってくれたまえ」
「ちょっ――なに言ってるの、レフ？　わたしの宝物って……カルデアスの、こと？　や、止めて。お願い。だってカルデアスよ？　高密

度の情報体よ？　次元が異なる領域、なのよ？」
「ああ。ブラックホールと何も変わらない。それとも太陽かな。まあ、どちらにせよ。人間が触れれば分子レベルで分解される地獄の具現だ。遠慮なく、生きたまま無限の死を味わいたまえ」
「いや――いや、いや、助けて、誰か助けて！　わた、わたし、こんなところで死にたくない！　だってまだ褒められてない……！　誰も、私を認めてくれていないじゃない……！　どうして!?　どうしてこんなコトばっかりなの!?　誰もわたしを評価してくれなかった！　みんなわたしを嫌っていた！　やだ、やめて、いやいやいやいやいやいや……！　だってまだ何もしていない！　生まれてからずっと、ただの一度も、誰にも認めてもらえなかったのに――！」
　人は誰も動けない。オルガマリーは言わずもがな、マシュと藤丸は目の前で進む状況へと置いて行かれたように立つだけ。
　だが、突如、ブシュッと水風船を針で突っついた時のような音が洞窟の中に響き渡った。次いで、洞窟の中に木霊す音は水が地面に投げ落とされたボタボタという音。
　――な……に、が……!?
　レフは大きく目を開ける。
　痛みが胸に奔る。それこそ、死に至るほどの痛みだとレフは認識した。そして、レフの感覚は実に正しかった。
　レフの胸からは茶色と紫色が混じったと言えるような鋭い爪が見えていた。いや、彼の背から胸へと抉り貫いていたという方が正確だ。そして、その爪はレフの血で赤く染められている。
「カッ……ああ……クカッ……」
　苦悶の声を上げるレフの右手から聖杯が取り上げられた。
「９：ｅｕ６ｐ０ｗ@ｒ」
　聞くに堪えない雑音が聞こえる。
　レフは下手人の正体に思い至った。レフの薄れ行く意識が怒りによって覚醒を促される。
「ｑ０：」
「貴ッ様……」

振り返るとそこにはレフの予想通りの姿があった。害虫のような、その姿。
ラフムがそこにいた。
レフがラフムの姿を確認した瞬間、ラフムの口が少し開いた。それはまるで胸を貫かれていても生きているレフに驚いているようで……そして、ラフムの口が閉じた。
「!?」
同時にレフの視界が歪む。全ての景色が左へと飛んでいく。そして、レフの視界は黒に染まった。痛みが胸だけではなく全身に奔る。最後に自分の内臓が潰れた感覚を覚えたレフはラフムが自分の身にしたことを理解した。
ぐらりと体が傾く。洞窟の壁から離れ、地面へと叩きつけられたレフの周りは赤い。潰された羽虫の如く地面に横たわるレフの身に起きたことは、ラフムが腕を振り切りレフの身体を洞窟の壁へと叩きつけたという単純なもの。レフはもう動くことは不可能だろうと藤丸は判断する。
――これで終わ……
「キャーッ！」
――……っていない！
上から絹を裂くような音で藤丸は意識を切り替える。レフの魔術で浮き上がったオルガマリーだ。レフの魔術が止まれば落ちるのは当然。落ち行くオルガマリー。そして、その手前には自分を見つめるラフムの姿。
動かないラフムと目が合ったような気がした。
――オレの指示を待っている。
「ラフム！　所長を！」
そう感じた藤丸は声を上げる。どこまでもマスターである自分を立てる奴だと藤丸は心の中で苦笑した。
「３ｅ―@６６６６！」
地面を蹴り、繋がった空間の向こうへと雄叫びを上げながら姿を消していくラフムを見送りながら、藤丸は思う。オルガマリーをラフム

は助けてくれるのだと。
そして、今度こそ終わったのだと。
「無駄なことを……」
終わってなどいなかった。
残された藤丸とマシュの表情が凍り付いていく。

―ＡＮＯＴＨＥＲ　ＰＯＩＮＴ―

絶望の中にオルガマリーは居た。信じた者に裏切られる。これはまだいい。信じた者に殺される。これもまだいい。だが、信じた者にオルガマリーが考え尽く限り最も残酷な殺され方をされる。それは駄目だった。オルガマリーの目からは光が消え、まるで死人のようであった。
いや、〝まるで〟という表現は間違っている。なぜなら、彼女はもう死んでいるのだから。
カルデアの管制室での爆破で彼女の身体はなくなり、今は残留思念と呼ぶべき微かで不安定な存在。そのような彼女が現世に留まり続けることなどできようハズがなかった。
オルガマリーの身体が金色の粒子へと分解されていく。
「所長！」
自分がラフムの腕から下されたことも、カルデアのスタッフが駆け寄ってきたこともオルガマリーは気づいていないほどに茫洋としていた。
ただただオルガマリーはガタガタと震えているのみ。だから、彼女はラフムとカルデアのスタッフとのやり取りに無言でいるのだった。
オルガマリーが口を噤んでいる間にラフムとスタッフの話が進んでいく。
「この聖杯は魔力リソースでしかない物体です。伝説で語られるように万能の力を持つようなものではありません。そして、今の所長の状態は残留思念というべきもの。死亡している状態です。所長を助けるには、生き返らせるという奇跡が必要になりますが、その奇跡を実現させるためには魔法であっても、できないことです」

「２６４……」
彼らの話を聞き流すオルガマリーだったが、悪意がないとはいえ絶望を再度突き付けられるのは多大なフラストレーションが溜まっていく。
「ええ、分かっています。分かっているのよ。けど、けど！　なんで私が！　なんで！　なんでレフが！　なんで私がレフに殺されなくちゃならないのよ！　信じてたのに！　信じてたのに！　……信じてたのに！」
それはオルガマリーの感情を爆発させるという結果になった。
身体を空に還しながらすすり泣くオルガマリーだったが、肩にトントンという軽い衝撃を感じた。
「何よ？」
すすり泣きながら振り返るオルガマリーへとラフムは上を指し示す。ラフムの腕が指すのは真っ赤に染まった巨大地球儀、カルデアスだ。
ラフムに示されたカルデアスを見てオルガマリーは思い知る。人類の終わりを。オルガマリーは唇を噛み締める。
そして、前に進んでいなかった至らない自分の姿を思い知る。
――前に進むのをやめたらそこで終わり！
このままでは終われない。諦める前にやるべきことがある。
私には責任がある。世界を歴史を地球を守る、星詠（アニムスフィア家）みとしての責任が！　星詠（カルデアの所長）みとしての責任が！
それは彼女の想いを再起させる結果となる。
オルガマリーの顔付きが変わる。
――戦う。
かくして、命を失った彼女は立ち上がった。
〝戦う〟という意志を籠め、オルガマリーはスタッフへと声を掛けた。
「通信を開きなさい」
「え？」
「早くしなさい！　私には時間がないの！」

「は、はい！」
スタッフは手に付けたウェアラブル端末を操作して、通信画面を開く。空中に浮かび上がるのは色々な作業をしているカルデアのスタッフたちの映像だ。
「全スタッフに通達！　これから、私はカルデアからいなくなります！　ええ、分かっているでしょう？　私は死んでいるのですから！　だから、これは所長としての最後の命令（ラスト・オーダー）！　我々の最後の希望、藤丸立香を全力で……全力以上でサポートしなさい！」
オルガマリーは右腕を大きく振って見せる。
「逃げることは許しません。負けることは許しません。世界の命運は貴方たち一人一人の肩に掛かっているのですから。一人として欠けることなく世界を救いなさい！」
次いで、オルガマリーは一つの映像の画面に着目した。
「ロマニ・アーキマン！　貴方にカルデアの全権を任せます。私の後任として役目を果たしなさい！　以上です！」
空中の映像の一つ、ロマニ・アーキマンが映る映像。ロマニが普段では決して浮かべないような真剣な表情でオルガマリーを見つめ返し、宣言した。
「人理継続機関フィニス・カルデア〝所長〟、オルガマリー・アニムスフィア。貴女の命令（オーダー）は必ず果たしてみせます」
空中に浮かんだ数々の映像。ロマニの声に頷いた通信先のたくさんのカルデアのスタッフたち――幾名かはオルガマリーの命令を守って作業をしっかりと続けている者もいる――が敬礼をしていた。
それは、オルガマリーを認めたという所作だ。
そのことに気が付いたのだろう。
呆けたように一瞬、目を大きく開けた後、オルガマリーは何度も頷き、そして、嬉しそうに涙を流している。
と、袖で涙を拭ったオルガマリーはラフムへと振り返った。
「ラフム。アナタがカルデアスを示すことがなければ、〝所長〟として命を下すことがなかった。それに、私が認められることもなかった。……ありがとう」

その言葉を最後に、オルガマリーの体は金色の粒子になって消えた。
オルガマリーを見送り、項垂れるラフム。ラフムの様子を見てロマニが声をかける。
「ラフム、ありがとう」
何のことか分からない。
首を傾げるラフムを見て、ロマニは思う。その在り方は英霊というよりも兵器に近いものだと。マスターの命令――オルガマリーを救うこと――を聞き、それを守れなかったからこそ、ラフムは礼を言われる理由が分からないのだろうとロマニは当たりをつけた。
「君のお陰で冬木の特異点は修復された。君があのアーチャーを倒してなかったらと考えると、藤丸くんたちにより大きな危険が襲っていたかもしれない。君の行動が彼らを救った」
「ＭＡＳＴＥＲ……ＭＡＳＨ……」
「ああ、心配しなくても大丈夫。藤丸くんとマシュはレイシフトから……無事帰還した。今はバイタルチェックをしている最中だけど、パッと見た所、特に問題はなさそうだしね」
「９ｔｚｑ」
「うん、君の言葉は分からないけど気持ちは解った。二人とも無事で本当に良かった。それに、〝所長〟も君に救われた」
再度、ラフムはロマニに首を傾げた。
中々、伝わらないなとロマニは心の中で苦笑しながら言葉を続ける。
「〝オルガマリー〟の独白を聞いていて思ったよ。思い知らされたという方が正しいかな？　カルデアスタッフは誰一人として彼女を理解しようともしていなかった。カルデアの所長という立場から皆、彼女のことを所長としてあるべきだと考えていたんだろうね。そして、そのことはオルガマリー・アニムスフィアという女性も同じ考えだった。カルデアの所長として相応しい人物でなければならないと行動していた。彼女も彼女のことを認めてあげることが出来なかったんだと思う」

『けど……』とロマンは続ける。
「君は違った。君だけはオルガマリーという人物を見ていた。所長という肩書もアニムスフィア家という家名も関係なく、オルガマリーを見ようとしていた。そして、彼女にカルデアスを示すことで、彼女が心の底から何をしたかったのか思い起こさせた。それが、マリーのじゃなくてカルデアの所長としての行為だというのは皮肉なものだけど」
　ロマニは少し寂しそうに笑う。どうせなら、オルガマリーが最期にする選択は彼女自身のものであって欲しかったというように。
　その考えを頭の隅へと追いやるロマニはラフムへと意識を戻す。
「〝オルガマリー〟が最後に選択したのは自分の遺し方。彼女は〝所長〟としての最後を遺した。彼女の遺志を継ぐ覚悟を、彼女を認めたボクたちカルデアの全スタッフにさせてね。だから、全スタッフを代表して、改めて君に言おう」
　椅子から立ち上がったロマニはラフムへと深々と頭を下げた。
「ラフム、ありがとう」
『その言葉はまだ早い』
　そう言うようにラフムは聖杯を掲げ、赤く染まったカルデアスへと顔を向けた。そして、ラフムの考えを理解したのだろう。映像の向こうの赤く染まったカルデアスを鋭く見つめながらロマニは言葉を訂正した。
「そうだね。これから、何度も君には戦って貰わなくちゃならない。ありがとうというのは早かったかな。じゃあ、こう言わせて貰うよ。ラフム、これからもよろしく」
『当然だ』
　ロマニは力強く自分へと頷いたラフムの声が聞こえた気がした。

―ＯＮ―

　ポタポタと早いペースで命の元である血液を流しながら男は立っていた。
　本来ならば、とても立てるような状態ではない。証拠にフラフラと

前後に体が揺れて男の頭から帽子が落ちる。
「ッ!?」
「あ……」
藤丸とマシュは思わず息を呑む。
動きが止まった彼の顔の皮膚はベロリと半分ほど?がれており、そこから表情筋が見えている。トレードマークの緑の服の大部分が赤色に染まっていることから、服の下も酷い状態だろう。
だが、それでも男は立っていた。
何故立つのかと問われれば、〝怒り〟のためと男は答えることだろう。血を流しながら血走った目で男、レフ・ライノールはその場に残された藤丸とマシュを睨みつける。
「な……なんで……?」
「『何故、生きているのか?』そう言いたいのか?」
言葉に詰まった藤丸にレフは強い口調で詰るように声をかける。
「私があの程度で死ぬとでも?」
「先輩! 下がってください!」
レフの声を浴びた瞬間、マシュが藤丸の前に出た。その表情はランサーの時以上に、キャスターの時以上に、反転したアーサー王の時以上に緊張感に満ちたもの。
それほどまでに満身創痍のレフから放たれるプレッシャーは重かった。
が、レフは足を止める。
「……ここまでだな」
「!?」
レフが呟いた瞬間、地面がぐらりと揺れる。
「心配するな。特異点が解消された反応だ。……時間がない。一言も発するな、最後のマスター」
不安定な足場の中、藤丸とマシュはお互いがお互いを支え合うように抱き合う。しかし、一人で、更に大怪我を負っているにも関わらず、不気味なほどにレフは微動だにしない。
「結末は確定した。貴様たちの時代はもう存在しない」

それは宣告。
「だが、貴様らカルデアは焼却される一歩手前で踏み止まっている。つまり、貴様らには世界を救う機会が残されている。今回のように特異点を解消するという形でな」
レフは藤丸をジッと見つめる。
「救うのだろう？　……いや、一言も発するなと言ったのは私だ。何も言わなくていい。貴様（カルデア）らは世界を救うために動くに違いないのは理解出来ている。次の特異点に来い、藤丸立香。そして、あのサーヴァントを連れて来い。そう、私の胸を貫き、壁に叩きつけたあのサーヴァントだ！」
冷静に話していたレフは怒りを増大させ、藤丸へと怒鳴る。
「許さん！　奴は、奴は私がこの手で……殺す！」
が、一転してレフは怒りを収めた。藤丸とマシュの体が宙に浮かぶ光景を目にしたことで時間がないということを再認識したのだろう。
「改めて自己紹介をしようか。私はレフ・ライノール・〝フラウロス〟。貴様たち人類を処理するために遣わされた、２０１５年担当者だ。……貴様はこう問うだろう。『なぜ、こんなことを？』と」
上へと落ちて行く藤丸とマシュを見上げながらレフは叫ぶ。
「答えよう！　自らの無意味さに！　自らの無能さ故に！　我らが〝王〟の寵愛を失ったが故に！　何の価値もない紙クズのように、跡形もなく燃え尽きるのさ！」
薄れ行く意識の中、その手を強く……握り……。
―ＦＯＲＣＥＤ　ＴＥＲＭＩＮＡＴＩＯＮ―

0から1のインタールード

―SLEEP―

それは、未来を取り戻す物語。

空に孔が開いていた。光輪が空に大きな穴を描いていた。

ソレを見て、私は思う。『救いたい、世界を救いたい』と。私は手を伸ばす。

夏の終わり、あの日に私は彼女の手を取った。白百合の姫の手を取った。いや、どうだったろうか？　私は姫の手を取れたのか、それとも取ることが出来なかったのか？

結末はどちらも正解。剪定事象ではなく、それが私の本質であり、純然たる事実である。私は白百合の姫の手を取り、そして、取る事が出来なかったのだから。

……目の前が開けた。

孔の開いた蒼穹の下、若草萌ゆる戦場に集うは英雄。

矢を番えるは弓兵――

大笑するのは魔術師――

身軽に舞い踊るは騎兵――

赤枝を軽やかに操る槍兵――

光る刃と共に微笑む暗殺者――

白の向こう寂寥を見せる剣士――

遥か昔の敵と拳を合わす狂戦士――

私が見ている未来は……そうだ。私が見ている未来は一つだけだ。

私は救世を求めるに足る器ではなかった。

器を変え、魂（カタチ）を変え、私は……。

――結末は確定した。貴様たちの時代はもう存在しない。

男だ。

緑の服を着た男が立っていた。その後ろには魔力が立ち上る〝聖杯〟の姿。それは藤丸がほんの少し前に見た光景だ。

「う……ん……」

――次の特異点に来い、藤丸立香。

「ラ……」
――許さん！　奴は、奴は私がこの手で……殺す！
「フ……」
――改めて自己紹介をしようか。私はレフ・ライノール・〝フラウロス〟。貴様たち人類を処理するために遣わされた、２０１５年担当者だ。
「ム……」
――自らの無意味さに！　自らの無能さ故に！　我らが〝王〟の寵愛を失ったが故に！　何の価値もない紙クズのように、跡形もなく燃え尽きるのさ！

―ＯＮ―
「ラフムッ！　……ハァッ！　ハッ、ハッ」
悪夢から飛び起きるように少年はベッドの上から体を起こした。悪夢の影響からか、彼の呼吸は荒く、そして、酷く不規則だ。
「随分、魘されていたね。変な夢でも見たかい？　例えば……空を飛ぶ夢とか」
「フォウ！　フォフォウ！」
顔を顰めて頭を押さえる少年、藤丸立香の耳に二つの声が届いた。一つは知らない女性の声。そして、もう一つの声は藤丸がよく知る小動物、フォウの鳴き声だ。フォウの声から自分の傍にいる女性は敵ではないと判断した藤丸はゆっくりと顔を女性の方へと向ける。
亜麻色の長く緩く巻いた髪に、華美でありながらもどことなく気品を感じられる服を身に着けた美女が彼のベッドの傍に立っていた。
「えっと……貴女は？」
――綺麗だ。
これまでの人生で見た事がないほどに美しい人だと藤丸は常よりも鈍い頭で考えを纏める。が、前の美女に気を取られている時間はないと藤丸は無意識に考えていた。
何か、何か大切なことが自分にはあったハズだ。だというのに、自分の思考が緩慢であることに藤丸は歯噛みする。

寝ぼけ眼を擦りながら、大切なことを思い出そうとする藤丸へとベッドの隣に立つ女性は話しかけた。
「んー、まだ思考能力が戻ってないのか。こうして直接、話をするのは初めてだね。なに？　目を覚ましたら絶世の美女がいて驚いた？　わかるわかる。でも慣れて」
　ニコリと軽く微笑んだ美女は自信に溢れた声で自己紹介を始める。
「私はダ・ヴィンチちゃん。カルデアの協力者だ。というか召喚英霊第三号、みたいな？」
　〝英霊〟
　そのワードにピンと来た藤丸は素早く顔を上げる。しかし、ダ・ヴィンチと名乗った英霊、つまり、サーヴァントは藤丸を止めた。
「とにかく話は後。キミを待っている人がいるんだから、管制室に行きなさい」
「……ラフム。そう言えば、ラフムはどこですか？　それに、マシュも。オレ……マシュの手を握っていたのに。それに、ドクターもいない」
「詳しい話は後、後。ほら、立った立った」
「え？　わっ！」
　藤丸の手を引っ張ってベッドから彼を放り出したダ・ヴィンチは藤丸の足に靴を引っ掛けさせて、彼の背をドンと押す。いつの間に済ませたのだろうか？　反応できない間に上着を着せられていたことに藤丸は気が付いた。
　それと同時に軽い空気音と共に開いたドアの先へと藤丸は進ませられていたことを藤丸は認識する。思わず、彼が振り返ると、ダ・ヴィンチはとてもいい笑顔で藤丸を見つめ、右腕をそっと上げた。
「さあ、行きたまえ！　若人よ！」
「行くって……どこにですか？」
「まだまだ主人公勘ってヤツがなってないなあ」
「フォウ、フォウ！」
「ほら、この子だってそう言ってる。ここからはキミが中心になる物語だ。キミの判断が我々を救うだろう。人類を救いながら歴史に残

らなかった数多無数の勇者たちと同じように。英雄ではなく、ただの人間として星の行く末を定める戦いが、キミに与えられた役割だ」
ダ・ヴィンチがそこまで言った瞬間、またもや軽い音がしてドアが閉まった。自動ドアに阻まれた藤丸は部屋のドアを一瞥した後、踵を返す。何はともあれ、探さなくてはいけない。自分のサーヴァントであるラフム、そして、意識を失う寸前まで手を握ったことを記憶している自分のサーヴァントを。

―ＯＦＦ―
さて、と。
……ここはどこ？
右。大きな窓の向こうには雪がじゃんじゃか降っている白銀の世界。
左。壁。以上。
首をあちこちに動かすが、『金のなる木』と名付けられそうな観葉植物しか見当たらない。無機質な廊下だけだ。
きっと、キングゥがここにいたら、こう言うと思う。
『迷子だね、わかるとも！』
うるせぇ！　ライオンの着ぐるみを着たラフムの前に放り投げて『ランサーが死んだ。この人でなし！』ってするぞ！
キングゥにラフムが噛みついた光景――人、それを妄想と呼ぶ――を振り払って、涙目で辺りを見渡す。
ブーディカママ、助けて！
心の中で助けを呼ぶものの、誰も来ない。まあ、当たり前だと言えば当たり前だ。例え、ラフムの呼び声が聞こえた所で、復旧作業に忙しいカルデアのスタッフが来てくれるとは考えにくい。そもそも、『英霊が迷子って。プッ』とか言われたら……ええい泣くぞ？　ラフムは、本気で泣くからなっ！
スタッフにラフムが噛みついた光景――人、それを妄想と呼ぶ――を振り払って、涙目で辺りを見渡す。残念なことに周りの景色は変わっていなかった。いや、変わる訳がないんですけど。

「２５５……」
溜息が零れてしまった。どうしてこうなったとラフムは過去を振り返る。
そもそも、ラフムが今、ここにいる訳。それは数時間前に遡る。
人理継続機関フィニス・カルデアの所長、オルガマリー・アニムスフィアが殉職し、その体が光の粒子になって消えるのを見送った後、すぐのことだった。ラフムのマスター、藤丸立香とそのサーヴァント、シールダー：マシュ・キリエライトの二人は特異点Ｆへのレイシフトからカルデアへと帰還した。
だけど、一つ大きな問題があった。
マスターの意識が戻らなかったんだ。彼のバイタルはほぼ正常であることから単なる疲れで眠っているだけとＤｒ．ロマンに聞いてマシュと共に胸を撫で下ろした後（もちろん、比喩的な表現だ。マシュのマシュマロには触っていません……触っていません）、手が空いたラフムはふと思い付いたんだ。
『カルデアの中を探検しよう』って……。
数時間前のラフムを心の底から恨んで爆死しやがれと願いながら、ガックリと肩を落としてトボトボと歩く。ロマンの話を立ったまま寝ながら聞いていたのが間違いだったのかもしれない。もしかしたら、『カルデア内を勝手に歩いちゃいけません』とか注意があったかもだし。ラフムはね、２５歳児なんだよ。手を引いて赤提灯に連れて行ってくれなきゃ困ります。牛若丸みたいに天才じゃないんだから。
……一人で黙々と歩くのは寂しい。こういう時は歌でも歌おう。
「３．ｂ―４、３．ｂ―４、０ｑｄｆ：@ｙｇ―♪」
赤王とエリちゃんとセッションしたい。一応、言っておくと〝セッション〟という言葉に意味深な要素は入っていないのであしからず。
しかし、歌を歌っても元気になれない。病院を思わせるような無機質な廊下。そして、高い山の中にあるカルデアの建物。ゲームのジャンルが違ったらゾンビが出てきそうなシチュエーション。チビノブとか現れたし、ゾンビが来ても余り驚きはないような気がするけど、それは放っておく。ＶＲ以上に怖いに違いないし、そもそも、怖がり

のラフムはそんな想像をしてしまったら、目を開けてシャワーを浴びなければならない。
……思考を切り替えよう。
ＶＲでマシュのピーチマシュマロを生前に見たかったと思いながら足を動かしていくと、少し開いた扉を見つけた。スライド式のドアだ。右にずらすことで部屋の中に入ることができる。カルデアでよく見かけるドア。それが少し開いている。
ふむ、ホラーゲームや脱出ゲームを数限りなくしてきたラフムには分かる。
このドアの先にはまず間違いなくお宝があるであろうことを。そして、何かしらの面倒も同時に発生するということを。ＴＶの前で座ってすることができるホラーゲームならば、抱き枕（キャラはブラヴァツキーちゃんで、白いシーツの上に半脱ぎで横たわってる上正面からの全身絵で両手は頭の上で縛られて脇を強調して表情は『くっくやしい』と言いつつ発情している感じのカバーが掛けられている）を腕に抱きかかえて、フォウくんなりきりフードブランケットを被ると言った装備が必要だけれども、今のラフムは産まれたままの姿。一糸纏わぬ姿だ。露出狂だね、わかるとも！
誰が露出狂だ！　カルデアのスタッフから服を支給されなかっただけですぅー。というより、服の必要性もないと判断されたみたいで、ラフムは悲しい（ポロロン）
ここで、燻っていても仕方ない。抱き枕（キャラはブラヴァツキーちゃんで、白いシーツの上に半脱ぎで横たわってる上正面からの全身絵で両手は頭の上で縛られて脇を強調して表情は『くっくやしい』と言いつつ発情している感じのカバーが掛けられている）を抱きかかえることができないのが非常に不安だが、行くしかないと、スライド式のドアをそっと横に開ける。
すばやく体を滑り込ませて、ついでに一回転して部屋の中に転がり込んだ後に辺りを見渡す。ラフムはガールなんて歳じゃないけど、ニコ動では『もう一回』っていう歌声をＢＧＭに雁夜おじさんが坂を転がり落ちていたし、ラフムが一回転しながら部屋に転がり込んできて

も是非もないよネ！

転がりながら部屋に入った後、すばやく立ち上がる。その部屋は宇宙空間みたいだった。

『なんだって？』と尋ねるのはやめてくれ、ラフムにも何が何だか分からないんだから。

部屋の壁には宇宙のような風景をした壁紙。しかも、宇宙を再現した壁紙は一秒毎に動いているし、とても綺麗だ。星（ズヴェズダ）が好きなアイドルを連れてきたいものだ。……リヨぐだ子みたいにラフムもシャンシャンしてフルコンボ決めたい。それに出来たら、マイルームであーにゃんをアロマディフューザーで囲みたい。たぶん、みくにゃんとのあにゃんのＳＳＲが出やすくなると思う。

のあにゃんのＳＳＲ実装はよ！（２０１７年１月時点）

（∩、・ω・）

／　ミつ／⁇／　バンバン

？＼／＿＿／

それにしても、ＦＧＯもマイルームに模様替え機能があれば、蒸しマシュマロをするのに。マシュ蒸しなら、きっと、☆５鯖をじゃんじゃん出してくれるに違いない。

もし、アロマディフューザーでマシュを囲んで☆５鯖が出たなら『天使！　女神！　マシュ！』と新宿のド真ん中で叫んでも構わない。

そんな綺麗な部屋の中、ちょうど中央辺りにある魔法陣を見つけた。型月的には魔〝法〟陣じゃなくて魔術式が正しい言い方かもしれないけど、分かりやすく一般的に言われる魔法陣と言おう。

その魔法陣の形はどことなくマシュの盾に似ていた。

ははぁ……つまり、ここはアレだ。ＦＧＯの中で最も愉悦を感じられる罪深い烙印の象徴。そう、召喚システム・フェイトだ！　ありていに言っちゃうとガチャね。

「ｔ@ａ７３３３３！」

気分は『ジャンヌゥウウウ！』と叫ぶ旦那と同じ感じ。恋い焦がれた存在がそこにはあった。

うん。初めに言っておくとね、僕は廃課金勢なんだ。

あ、ダメだ。これ以上ガチャ(爆死)のこと思い出したらお腹が痛くなる。このストレスからの解放、カタルシスを得るためにはガチャを引くしかない。財布を取り出そ……う……。

――所持金／ｚｅｒｏ――

……それどころか、服すらも着ていない／（＾ｏ＾）／オワタ

「ｔ@ａ７３３３３３３３!!!　ｔ@ａ７３３３３３３３!!!　ｔ@ａ７３３３３３３!!!」

とりあえず、声の限りに叫ぶ。凄く疲れただけで、ガチャが勝手に回り始めるとかはなかった。これがアミューズメントフロアとかに置いているガチャなら隣にいた幼女が凄い可哀そうな目付きで１００円恵んでくれたこともあったというのに。ちなみに、１００円くれた幼女にはガチャの空容器をいっぱいあげたよ（皮肉）

そう、ラフム以外の奴らが☆５サーヴァントを引けなくたっていいんだ。

そうだ、ツイッターのフォロワーさんが貼る大勝利スクショが美しいから憧れた！　故に、自身から零れ落ちた☆５鯖ばかりだ。これを爆死と言わずなんと言う！　この身は大勝利しなければならないと、強迫観念に突き動かされてきた。それが苦痛だと思うことも、破綻していると気づく間もなく、ただ回し続けた！　だが、所詮は偽物だ。そんな端た金では誰も救えない。否、元より、ガチャを回すことすら出来はしない！

しかし、何事にも例外はある。万能の願望機、聖杯があれば、不可能は可能になる。聖杯があれば巨万の富を願っただけで出してくれてガチャを回せるというのに。……油田を買うのとどっちがいいだろうか？　いやいや、この際、汚染された聖杯でもいい。聖杯さえあれば、禁断の果実のカードがなくてもガチャを回せるのだ。

え？　聖杯くん！　その出刃包丁どうするの？

脳内に突如出てきた聖杯くんが『弱い奴らから毟り取っちまえよ』と言っているが、ラフムの頭の中の天使（恰好はラフムと同じ）が聖杯くんの首を締めあげることで事なきを得た。

弱者からお金を強請るのは悪い文明だからね。やっぱり効率を考

えると強い奴から峯らなきゃいけない。だから、さ……その心臓、貰い受ける！（相手はデーモン系エネミー）
だがしかし！　それは脳内での話。
現実では聖杯を渡してしまっていた。なんてことだ、ちくしょう！
オルガマリーと帰還した後、カルデアのスタッフに聖杯を渡してしまっているじゃないか！
自分の浅はかさにガックリと項垂れる。深くて怖くて魅力的なブラックホール（ガチャ）を前にして単発すら出来ないなんて辛すぎる。
ラフムはどうしようもなく膝を着いて項垂れる。諭吉よ、首を出せぃ！
どれくらいの時間が過ぎたのだろうか？
絶望に打ちひしがれていると、ウィンという音がしてドアが開いた。
……自動ドアめ、ラフムにもしっかり反応しろよ。ラフムを人間扱いしないのは悪い文明。
ラフムが振り返ると、そこには目を覚ましたマスターが立っていた。

―ＯＮ―

目を覚まし、マイルームを追い出された藤丸が辿り着いたのは、先日、自分が向かった場所。巨大地球儀、カルデアスがある部屋だ。青いホールの中心に探し人がいた。その菫色へと駆け寄る藤丸の足音を聞き留めたのだろう。彼女は振り返った。藤丸の姿を確認した彼女は口元を綻ばせる。
「おはようございます、先輩。無事で何よりです」
「マシュ！」
温室育ちの菫のように可憐なマシュがそこにはいた。レイシフトで特異点Ｆ冬木からカルデアへと戻る瞬間まで手を握っていた少女がそこにはいたのだ。そして、マシュの様子を見るに、大きな傷もなく状態は良好そうだ。
「先輩、ありがとうございます。先輩がいてくれたので意識を保って

いられました」
「いや、お礼を言うのはオレの方だ。マシュ、ありがとう」
　無事を確かめ合い、笑顔を浮かべる二人。その二人の耳に咳払いが届いた。
「再会を喜ぶのは結構だけど、今はこっちにも注目してくれないかな」
「ドクター！」
　彼らの後ろに立っていたのは、特異点Ｆで映像の向こうから指示を出していたロマニ・アーキマンだ。
「うん、まずは生還おめでとうと言わせてもらうよ、藤丸くん。そして、ミッション達成、お疲れ様。なし崩し的に全てを押し付けてしまったけど、君は勇敢にも事態に挑み、乗り越えてくれた。その事に心からの尊敬と感謝を送るよ。君のお陰でマシュとカルデアは救われた」
「オレじゃなくて、頑張ってくれたのはマシュとラフムと所長です」
「……そうだね。まずはそこからか。いいかい、落ち着いて聞いてくれ。……所長は殉職された」
「え？　で、でも……」
「これは事実だ。ボクらにはどうすることもできなかった」
「そんな……」
「所長は残念だったけど……今は弔うだけの余裕がない。悼むことぐらいしかできない。人類を守ることをボクらは所長から託された」
「そう……ですか」
　と、藤丸はあることに気付く。マシュはいた。しかし、その横にはもう一体の自分のサーヴァントの姿はない。
「ラフムは？」
「え？　さっきまで、そこに居たのに……。誰か！　ラフムの行先を知らないか？」
　ロマニに尋ねると、ラフムはどうやら無事らしい。それを聞いて藤丸はほっと息を吐いた。安心した様子の藤丸を尻目にロマニの指示でスタッフが慌ただしく監視カメラを確認していく。
「見つけました、守護英霊召喚システムの前で跪いています。まるで、

祈るように」
　ラフムのいる詳しい場所を聞こうとスタッフへと口を開こうとした藤丸だったが、ロマニに止められた。
「待つんだ、藤丸くん。ラフムの所に行く前に君に説明しておかなくちゃならないことと、君に聞きたいことがある」
「なんですか？」
「まずは、レフのこと。状況から鑑みるに、彼の言葉は真実だ。人類は滅びている。このカルデアだけが通常の時間軸に無い状態だ。崩壊直前の歴史に踏み止まっている……というのかな。宇宙空間に浮かんだコロニーと思えばいい。外の世界は死の世界だ。この状況を打破するまではね」
「……解決策があるんですね？」
「もちろん。まずはこれを見て欲しい。復興させたシバで地球の状態をスキャンしてみた。未来じゃなくて過去の地球のね。冬木の特異点は君たちのおかげで消滅した。なのに、未来が変わらないということは、他にも原因があるとボクらは仮定したんだ。その結果が――この狂った世界地図」
　カルデアスが不明瞭な世界を映す。
「新たに発見された、冬木とは比べ物にならない時空の乱れだ。よく過去を変えれば未来が変わる、というけど、ちょっとやそっとの過去改竄じゃ未来は変革できない。歴史には修復力というものがあってね。確かに人間の一人や二人を救うことが出来ても、その時代が迎える結末――決定的な結果だけは変わらないようになっている。でも、これらの特異点は違う。これは人類のターニングポイント」
　ロマニはカルデアスを見上げながら説明を続ける。
「〝この戦争が終わらなかったら〟〝この航海が成功しなかったら〟〝この発明が間違っていたら〟〝この国が独立できなかったら〟……そういった、現在の人類を決定づけた究極の選択点だ。それが崩されるということは、人類史の土台が崩れる事に等しい。この七つの特異点はまさにそれだ。この特異点が出来た時点で未来は決定してしまった。レフの言う通り、人類に２０１７年はやってこない」

カルデアスから藤丸へとロマニは目線を映す。
「けど、ボクらだけは違う。カルデアはまだその未来に到達していないからね。分かるかい？　ボクらだけがこの間違いを修復できる。今、こうして崩れている特異点を元に戻す機会（チャンス）がある」
「つまり……」
「結論を言おう。この七つの特異点にレイシフトし、歴史を正しいカタチに戻す。それが人類を救う唯一の手段だ。けれど、ボクらにはあまりにも力がない。マスター適性者は君を除いて凍結。所持するサーヴァントはマシュとラフムだけだ。この状況で君に話すのは強制に近いと理解している。それでも、ボクはこう言うしかない。マスター適性者４８番、藤丸。君が……」
「オレにやらせてください」
「……いいのかい？　たった一人で、この七つの人類史と戦わなくてはいけない。そのことを理解しているのか？」
「覚悟しています」
「逃げ出しても誰も君を責める者はいない。それでもかい？」
「逃げたら守れない。そうでしょう？」
少し考え、ロマニは笑う。
「ああ、君の言う通りだ。では、これより、カルデアは前所長オルガマリー・アニムスフィアが予定した通り、人理継続の尊命を全うする。目的は人類史の保護、及び、奪還。探索対象は各年代と、原因と思われる聖遺物・聖杯。我々が戦うべき相手は歴史そのものだ。君の前に立ちはだかるのは多くの英霊、伝説になる。それは挑戦であると同時に、過去に弓を引く冒涜だ。我々は人類を守るために人類史に立ち向かうのだから。けれど、生き残るにはそれしかない。いや、未来を取り戻すにはこれしかない。……例え、どのような結末が待っていようとも、だ。以上の決意を以って、作戦名はファーストオーダーから改める。これはカルデア最後にして原初の使命」
一息ついて、ロマニは宣言した。
「人理守護指定・Ｇ（グランド）・Ｏ（オーダー）。魔術世界における最高位の使命を以って、我々は未来を取り戻す！」

―ＯＦＦ―

「ｔ@ａ,!!　ｔ@ａ,!!　ｊｑｔ@ａ,　ｔ@ｔ@ｔ@ｊ０ｐ．＄４!!　７Ｚ２＄＄＄４４４４３!!　ｔ@ａ,＃３３!!　１０；ｙｔ@ａ,３!!　ｅＺｆ［ｅｅＺｆ［ｅｊ０ｒｋ＆＆!!　ｓ：．＄４!!　ｓ：ａ,４４!!」

「マシュ、ラフムは何て言ってるの？」

「わかりません」

『魔力が最も高まる時間帯にガチャを回そう』とラフムは習った。『君は午前２時教だね、分かるとも！』と叫んで、緑色のアサシンに飛び掛かりたいものだ。午前２時に回した結果、予定調和の如く……高レアサーヴァントは当たらなかった。☆４枠の綺礼は悪い文明。失望しました。午前２時教を辞めてマフィア梶田教になります。

と、ラフムは気づいた。このまま地面に寝転がりながら『溶けるぅ!!　溶けちゃうううう!!』とか叫んでいても仕方ないことに。とりあえず、状況を整理してみよう。

ラフム、ガチャを見つける→ラフム、マスター＆マシュとロマンに見つかる→彼らはラフムのパトロン（絶好のカモ）である→ラフムにガチャを引かせてくれるようお願いしている→しかし、ラフムの言葉は通じなかった！

そんな感じだ。しかし、ラフムは諦めない。ガチャ宗教になんか負けない！

「ｑ@ｅｐｅｂ４ｇ）４、ｇ）ｈｑ@ｅｐｅｂ４ｇ）４、ｄｙ７２ｄ@ｇ）４。ｒ＾@ｗｋ６ｔ．ｓｋ４ｎｋ６７。ｘｙｄ，ｅＥＥｙ！　ｏ〃―@２Ｚ〃」……ＹＥＡＡＡＡＨ！」

「マシュ、ラフムは何て言ってるの？」

「わかりません」

絶対に笑ってはいけないカルデア査察官になったような気分。セクシーはサンシャインな斎藤さん、キュートはサンシャインなラフムであることは確定的に明らか。

ちなみに、ラフムが査察官になったのなら、倉庫街の倉庫の上に立

ちながら魔術で姿を隠蔽しつつ、えっちなＣＧの開帳を許すのに。知恵の実（アップル）の手先どもめ、人造人間（アンドロイド）たちに比べてリリースを遅れさせたばかりか、ＣＧすらも許さぬとは何たる非道、何たる外道……。

午前二時召喚とか触媒用意するとか迷信信じて向かうはイフ城、我が征くは爆乳の彼方。穢れ切った輝石（え？　今、ラフムが回そうとしてるガチャって石４個必要なの？）を守護英霊（ガチャ）召喚システム・フェイトへと捧げる。イメージするのは常に高レアサーヴァントを引く自分だ。

マスターに何度もガチャを示して、その後にラフムの胸を叩く。言葉は伝わらなくとも気持ちは伝わったのだろう。マスターは苦笑して、ラフムへと四つの星晶石を渡してくれた。

……１０連じゃないことが不満だけど、まあ、回せるし良しとする。

大きく息を吸ってガチャへと石を捧げる。イメージするのは高レア鯖を引く自分だ。

ガチャが光り輝く。１２の光の玉が円状に並び、そして、１つの光の玉がその１２の光の玉の上で輝く。時計回りに回り出した１２の玉。その光の玉は一本の線となり、円を描……あ、あかんわ、これ。虹演出じゃない。

予想通りというか、光が収まった後、そこにあったのはとてもよく見知った概念礼装、〝偽臣の書〟だった。

ワカメはいらない！

ちくしょう！　台無しにしやがった。お前はいつもそうだ。このガチャはまるでお前の人生そのものだ。お前はいつも爆死ばかりだ。お前は色んな☆５サーヴァントを欲しがるが、一つだって手に入れられない。誰もお前を愛さない。

誰かラフムに偽臣の書という概念礼装の使い方を教えて。弱体耐性２０％アップ（前提条件として凸済みとする）するなら、素直にＮＰチャージ５０％の龍脈（前提条件として凸済みとする）を着ける。

どうせ同じワカメなら、優秀な方（レコードホルダー）が良かった。それなら、ケタケタ笑いでデバフを与えることができるラフムに合う礼装だったのに。

けど、一応は☆3の概念礼装。ずずいとショップに行ってダ・ヴィンチちゃんに売り払えば、５００ＱＰとマナプリズム1個と交換できる。その後、２０マナプリズムで呼符を交換すればいい。穢れ切った呼符を手に召喚すればいいだけの話だ。

さて、そうと決まれば呼符を交換して……。

マ　ナ　プ　リ　が　な　い　！

イベントがない状態でマナプリを集めるのは効率が悪い、というより絶望的だ。種火を集めて銀種火をマナプリに変えればいい話ではあるが、それよりも前にラフムのレベルを上げて欲しい気持ちもある。

これはマズイ。ガチャができない。いや、待てよ。ガチャをしていらない礼装やサーヴァントをマナプリに変えたらガチャができるじゃないか！（錯乱）

と、そこでラフムは気が付いた。

ちょっと待って。

ラフムは何か大事なことを忘れている気がする。

／／／

が、マスターの意識は戻らなかった。彼のバイタルはほぼ正常であることから単なる疲れで眠っているだけとＤｒ．ロマンに聞いてマシュと共に胸を撫で下ろした後（もちろん、比喩的な表現だ。マシュのマシュマロには触っていません……触っていません）、手が空いたラフムはふと思い付いたんだ。

『カルデアの中を探検しよう』って……。

数時間前のラフムを心の底から恨み、爆死しやがれと願いながら、ガックリと肩を落としてトボトボと歩く。

／／／

お気づきだろうか？

／／／

が、マスターの意識は戻らなかった。彼のバイタルはほぼ正常であることから単なる疲れで眠っているだけとＤｒ．ロマンに聞いてマシュと共に胸を撫で下ろした後（もちろん、比喩的な表現だ。マシュ

のマシュマロには触っていません……触っていません)、手が空いたラフムはふと思い付いたんだ。
『カルデアの中を探検しよう』って……。
数時間前のラフムを心の底から恨み、爆死しやがれと願いながら、ガックリと肩を落としてトボトボと歩く。
／／／
おわかりいただけただろうか？
／／／
が、マスターの意識は戻らなかった。彼のバイタルはほぼ正常であることから単なる疲れで眠っているだけとＤｒ．ロマンに聞いてマシュと共に胸を撫で下ろした後（もちろん、比喩的な表現だ。マシュのマシュマロには触っていません……触っていません)、手が空いたラフムはふと思い付いたんだ。
『カルデアの中を探検しよう』って……。
数時間前のラフムを心の底から恨み、
―人人人人人人人人人人―
＼爆死しやがれと願いながら＼
？Ｙ＾Ｙ＾Ｙ＾Ｙ＾Ｙ＾Ｙ＾Ｙ＾Ｙ＾Ｙ＾Ｙ＾？
ガックリと肩を落としてトボトボと歩く。
／／／
おかわりいただけるだろうか？
自分で自分に呪いをかけて、それが炸裂している。ラフムは呪いなんて使えなかったハズだけど、多分、過去のラフムのせいだ。かくなる上はレイシフトをして過去のラフムに爆死するからガチャを回すのは止めておけというべきか。
そこで、ラフムは自分の背中に注がれている視線に気が付いた。振り向くと、そこにはマスターが何とも微妙な顔でラフムを見ていた。
もう一回、回させて。ほら、次、来る気がビンビンにしているから、さ。次は☆5サーヴァントを当てる、必ず当てるから。いや、ホント、マジで。ラフムはやるよ、かなりやる。
１０連は終わらぬ――我らが胸に彼方への野心ある限り！　これ

ぞ大軍師の究極陣地！　勝鬨を上げよ！　石課金陣（はずれずのじん）！
課金王（アタルマ・デ・ヤメンゾイ）の軍勢！　ＡＡＡＡＬａＬａＬａＬａＬａｉｅ!!
そんな気持ちを表情にする。具体的に言うと、口からよだれを垂れ流している状態だ。
ラフムをじっと見つめているマスターは少し泣きそうだ。まあ、気持ちは分からなくもない。勝手にガチャを回されて、その結果がワカメなら大抵の人間は今のマスターと同じような表情をすること請け合いだ。大抵の人間じゃない人間はブチ切れるね、間違いなく。
しかし、その程度はとうの昔に通り過ぎた道。単発で当たらなければ、１０連ガチャをすればいいじゃない。単発でＰＵキャラが出たとかいう人は、もしかして可愛いから運営に見逃されていただけではないかしら？
ラフムは生前から運営とは本気（ガ）のプロレス（チャ）をしていたから、高レア鯖を当てる最高に頭のいい方法を知っている。
そう……出るまで回す教だ。回せ、回転数が全てだ。
固有時制御（タイムアルター）・３０連ガチャする・三十連召喚！　固有時制御（タイムアルター）・１００連ガチャする・百連召喚！
ガチャを回させてとマスターを見つめるが、次にマスターが取ったのは驚きの行動だった。なんと、マスターはラフムの首に腕を回して抱きしめたのだ。
「ラフム」
耳のすぐ傍でマスターの甘い声がする。
オウフｗｗｗいわゆるストレートな展開キタコレですねｗｗｗ
おっとっとｗｗｗ拙者『キタコレ』などとついネット用語がｗｗｗ
まあ拙者の場合、ノッブ好きとは言っても、いわゆる声優としてのノッブでなく、ガーチャーとして見ているちょっと変わり者ですのでｗｗｗゆうきゃんの影響がですねｗｗｗ
ドプフォｗｗｗついマニアックな知識が出てしまいましたｗｗｗいや失敬失敬ｗｗｗ
まあ彼氏面のメタファーとしての巌窟王は純粋によく演じてるなと賞賛できますがクハハハハ！

私みたいに一歩引いた見方をするとですねｗｗｗポストジョージのメタファーと型月主義のキッチュさを引き継いだアクターとしてのですねｗｗｗ
りえりーのショタ性癖はですねｗｗｗ
フォカヌポウｗｗｗ拙者これではまるでくろひーみたいｗｗｗ
拙者はくろひーではござらんのでｗｗｗコポォ
思わずキャラが崩れてしまう。それほどに回す方のノッブの声は甘かった。
「ｆ００……」
「一人で背負うな。オレは……マスターだろ？」
『まだまだ頼りないと思うだろうけど、さ』と言いながらラフムから体を離したマスター。何が起こったのかさっぱりだけど、取り合えず頷いておいた。
「さて、それじゃ、行こうか」
「^？」
「オレたちの旅はこれからだよ、ラフム」
え？　でも、ガチャは？
そんな感情を籠めてガチャ（召喚システム・フェｒｙ）を指し示す。ラフムの視線に気が付いたのだろう。マスターは手を鳴らして、衝撃的な提案をした。
「召喚システムを起動させるより、この石は魔力リソースとして使った方がいいんじゃないかと考えたんだ。オレは未熟だから、間違うこともあるかもしれない。その時のために、この石で危なくなった時はラフムたちをサポートするから」
嘘やん（^・ω・、）

―ＯＮ―

守護英霊召喚システム・フェイトを稼働させ、概念礼装が排出された途端に、ラフムは今まで見せたことのない表情を浮かべた。茫然自失というように口から涎を垂らしているラフムを見た瞬間、藤丸は大きく目を見開いた。そして、彼はラフムの気持ちに気づく。

ラフムは召喚の責任を感じているのだと。
思えば、出会った時からそうだった。
マスターである自分を常に優先していた。オルガマリーに爪を向けたのも自分のため。普通なら、素人感丸出しの自分の指示ではなく、身なりが整い魔術師然としたオルガマリーをマスターよりも上と認め、オルガマリーの指示に従うだろう。
一般人でしかない自分とカルデアの所長であるオルガマリーを天秤にかけたのも自分のため。普通なら、自分よりも上の立場であるオルガマリーを優先させるのは自明の理。
ラフムの全ての行動は自分、つまり、思いがけずラフムのマスターとなってしまった自分を尊重する行為に他ならなかったのだと藤丸は思い至った。
そして、今回、運という不確定極まりないものに大きく左右される召喚にラフムが率先して挑んだのは、何の役にも立ちそうにもない礼装をマスターが引いてしまい、気落ちするのを避けるためではないか？　いや、きっと……必ずそうに違いない。
なぜなら、ラフムは常にマスターである自分を第一に行動してきた。特異点Ｆでアーチャーとの戦闘を単身、行ったのも自分を危険に巻き込まないためだ。あの時は自分の体、そして、今回は自分の心をラフムは守るよう行動したのだろう。ハズレと断じることができる礼装を引いてしまい自身が詰(なじ)られることすらも承知の上で。
――ああ……かっこいい。
しかし。
――堪らなく……辛い。
その生き方が、自分を危険に晒しても前に立ち続けるラフムの姿が藤丸には痛々しく思えたのだ。サーヴァントは道具や武器として扱われるもの。それが魔術師の常識だ。サーヴァントと縁を育むなど愚の骨頂だと魔術師然とした魔術師は嘲笑うだろう。
だが、藤丸という人間はレイシフトの適性があるというだけの一般人。彼はサーヴァントが道具として自らを律する様子を見る事は耐えられなかった。

だからこそ、彼はラフムを抱きしめたのだ。自分の盾となり、剣となり、時には軍師となる存在を。まるで、父や兄、母や姉、教師や上司、いや、それ以上に自分を慈しみ守る存在を。
「ラフム」
「ｆ００……」
震えるラフムの声。それを耳にした藤丸は更にきつくラフムを抱きしめる。
「一人で背負うな。オレは……マスターだろ？」
『まだまだ頼りないと思うだろうけど、さ』と言いながら藤丸はラフムから体を離してじっと見つめる。ややあって、ラフムは頷いた。
頷いたラフムに笑顔を返した藤丸は立ち上がる。
「さて、それじゃ、行こうか」
「^？」
「オレたちの旅はこれからだよ、ラフム」
しかしながら、ラフムが返した反応は召喚システム・フェイトを指し示すというもの。
合点がいったというように藤丸は手を鳴らす。ラフムのことだ。強力な英霊を召喚できる可能性がある召喚システムを稼働させた方がマスターである自分の身を守ることができると考えているのだろうと藤丸は感じ取った。
だが、守られるばかりでは自分が許せなくなる。だからこそ、藤丸は最高の笑顔でラフムへと宣言した。
「召喚システムを起動させるより、この石は魔力リソースとして使った方がいいんじゃないかと考えたんだ。オレは未熟だから、間違うこともあるかもしれない。その時のために、この石で危なくなった時はラフムたちをサポートするから」
『さあ、オレたちで世界を救うんだ』と言いながら藤丸は部屋を出て行く。これから先、藤丸立香という矮小な人間には様々な苦難が待ち受けているだろうことを藤丸は知っていた。しかし、彼は同時に知っていた。
時空を越える旅にはかけがえのない出会いもまた待っているだろ

うことを。だから、藤丸は足を止めずに歩くのだ。
運命の出会いという奇跡を信じて。